

第Ⅵ章 考 察

1 頭塔の立地

頭塔の建立者は、その造営地点をどのようにして決定したのだろうか。平城京の条坊や東大寺伽藍の中軸線との関係を検討することによって考察しよう。

A 四条大路との関係

平城京の条坊復元図あるいは奈良町に残る遺存地割を見ると、頭塔は四条大路中心線の東延長部に乗っているかに見える。実際はどうだろうか。四条大路の位置の確定作業から始めよう。

やっかいなことに四条大路については、右京の西五坊坊間西小路から西五坊坊間路の間で北側溝を検出しているのみで(1)、左京・左京東出張部での検出例がない。また外京では、四条大路のみならず、条坊道路の両側溝の検出例自体が少ない。

そこでまず、四条大路に近い東西方向の大路で、検出例が多い三条大路のデータから、四条大路の国土方眼座標軸に対する振れを想定する。三条大路では北側溝が数カ所で検出され、そのうち東三坊大路の東側では大路の幅員が狭くなる可能性が指摘されているため¹⁾、その検出例を除外すると、東西に長く取った2点(2・3)の方位は、国土方眼座標軸に対して、東で $0^{\circ}17'02''$ 北に振れる。この方位は南側溝の検出例2点(4・5)を結ぶ振れ $0^{\circ}17'06''$ と大差ない。そこで、双方の平均値 $0^{\circ}17'04''$ を四条大路の振れと想定する。

四 条 大 路
の 振 れ

次に、頭塔との位置関係を検討するために、四条大路の位置を想定する。想定には左京(①)または外京(②)のそれぞれについて、近接する条間路または小路の成果(a)と大路の成果(b)を用いる。なお、以下では基準尺を0.296mとし、南北の条坊計画線上の距離については条坊の振れを無視してもほとんど影響しないことから考慮しないものとする。

①、左京における条坊遺構検出例による頭塔位置の検討

左 京 の 成 果
に よ る 検 討

①a 左京四条一坊十四・十五坪で検出した四条条間路心(6)の位置を用いる。この点の2坪分南の点(7)を四条大路が通るものとする。この直線を頭塔心(8)と同じY座標の値(以下、頭塔東西位置)まで延長すると、点(9)を得、頭塔心が14.632m南となる。

①b 東一坊大路と二条大路の交差点(10)は既知であり、東一坊大路と六条大路の交差点も隣接地の調査成果からその位置を推定できる(11)。そこで、両点の midpoint が東一坊大路心と四条大路心との交差点となる(12)。この点を通り、頭塔東西心まで上記推定の振れで延長すると、点(13)を得、頭塔心が14.636m南となる。

このように左京の検出例から頭塔の位置を検討すると、頭塔心が四条大路の延長部より14.6mも南へずれていたという成果を得る。

②、外京城における条坊遺構検出例や現存する建造物遺構の位置からの頭塔位置の検討

外 京 の 成 果
に よ る 検 討

②a 興福寺中金堂院の発掘調査で、興福寺造営に先行する三条条間南小路の両側溝と考え

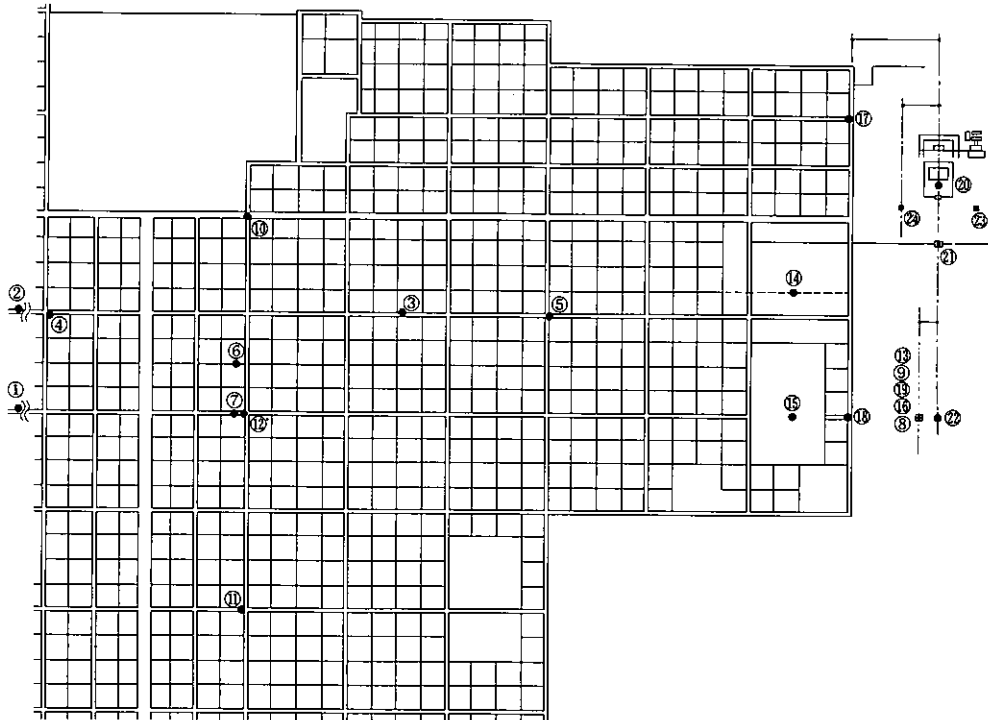


Fig.34 検討地点の模式図

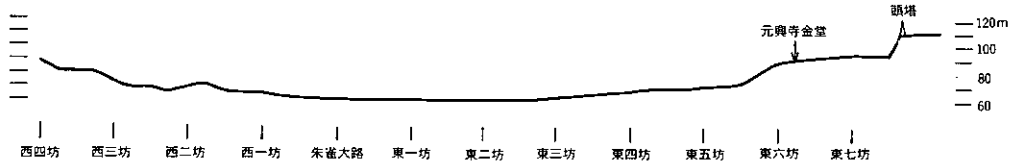


Fig.35 四条大路東西断面図

Tab.3 検討地点の座標値

	X	Y	調査位置	出典
1	-147,080.540	-20,450.080	四条大路北側溝(右京四条四坊五坪)	1
2	-146,549.012	-19,640.000	三条大路北側溝(右京三条二坊十三坪)	2
3	-146,537.000	-17,215.000	三条大路北側溝(左京三条二坊十二坪)	3
4	-146,567.928	-19,086.588	三条大路南側溝(右京四条一坊十六坪)	4
5	-146,554.700	-16,428.000	三条大路南側溝(左京四条五坊一坪)	5
6	-146,815.620	-18,077.500	四条条間路心(左京四条一坊十四・十五坪)	6
7	-147,082.020	-18,077.500	点6の2坪分南	
8	-147,078.910	-14,503.745	頭塔の心柱抜き取り穴心	
9	-147,064.278	-14,503.745	四条大路心延長部の算出値①	
10	-146,018.490	-18,053.560	東一坊大路・二条大路交差点心(算出値)	7
11	-148,145.250	-18,042.510	東一坊大路・六条大路交差点心(算出値)	8
12	-147,081.870	-18,048.035	東一坊大路・四条大路交差点心の算出値	
13	-147,064.274	-14,503.745	四条大路心延長部の算出値②	
14	-146,416.050	-15,171.300	三条条間南小路心	9
15	-147,082.050	-15,171.300	点14の5坪分南	
16	-147,078.736	-14,503.745	四条大路心延長部の算出値③	
17	-145,480.200	-14,872.960	一坊南大路・東七坊大路交差点想定心	9
18	-147,078.600	-14,872.960	転害門前交差点心の3坊分南	
19	-147,077.214	-14,503.745	四条大路心延長部の算出値④	
20	-145,828.475	-14,411.759	大仏殿前燈籠心	10
21	-146,128.673	-14,409.897	南大門南北軸線上(1990年1月計測)	
22	-147,078.910	-14,404.005	頭塔心の真東、東大寺中軸線との交点	
23	-145,950.500	-14,207.400	東塔(1/1000地形図より計測)	
24	-145,953.000	-14,615.900	西塔(1/1000地形図より計測)	

出典

- 1 『奈良市埋蔵文化財調査報告』昭和55年度「平城京右京四条四坊五坪」p.95 奈良市教育委員会 1981
- 2 『昭和55年度平城官跡発掘調査部発掘調査概報』「右京三条二坊十三坪の調査(第123-5次)」奈文研 1981
- 3 『奈良市埋蔵文化財調査報告』平成7年度「平城京左京(下京)四条五坊一坪の調査」奈良市教育委員会 p.50 1996
- 4 『奈良県遺跡調査概報1994年度』「平城京三条大路・西一坊大路交差点付近の調査」p.71 1994
- 5 『奈良市埋蔵文化財調査報告』「平城京左京(下京)四条五坊一坪の調査」平成7年度 奈良市教育委員会 p.49 1996
- 6 『奈良市埋蔵文化財調査報告』昭和59年度「平城京四条々間路の調査」p.66 奈良市教育委員会 1985
- 7 『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』奈良国立文化財研究所 1995 p.498
- 8 『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所 1997 p.161
- 9 『興福寺 第I期境内整備事業にともなう発掘調査概報 II』興福寺 p.25 2000
- 10 p.106注2文献 p.89

得る遺構を検出した。その道路心(14)の5坪分南の点(15)を四条大路が通るとし、頭塔東西心まで延長すると点(16)を得、頭塔心が0.174m南となる。

②b 東大寺転害門は一条南大路の東の終点であり、面する東七坊大路との交差点推定心は点(17)である。ここから3坊分南(450尺×4坪×3坊)の点(18)を、四条大路が通るとし、頭塔東西心まで延長すると点(19)を得、頭塔心が1.696m南となる。

四条大路延長部と一致

このように、外京の成果を用いた検討では、頭塔心が四条大路の延長部にほぼ一致、あるいはずれても1.7m北に位置することになる。これは景観上は延長部に位置するといつて良い程度の差である。そのことは重要な成果だが、外京の条坊が左京の条坊の延長部とはずれること²⁾も意味するから、外京城での調査成果の蓄積をまって補強する必要があるだろう。

B 東大寺伽藍中軸線との関係

西へ337尺

大仏殿は江戸時代の再々建であり、南大門は鎌倉時代の再建であるが、その位置は大きくは変わっていないと考えられる。しかしながら、大仏殿前には奈良時代建立の燈籠が現存し、当初位置を踏襲していると考えられるため、燈籠心(20)と南大門東西心(21)を結ぶ直線を伽藍中軸線と考える。その振れは北で西に0°21'19"で、この直線を頭塔の南北位置まで延長すると点(22)を得、頭塔心は99.742m西となる。これを基準尺で除した場合、337尺の値を得る。岸俊男が、大仏殿は東七坊(東京極)大路から3.5坪分東、西塔は2坪分東で、西塔は中軸線から1.5坪分すなわち675尺西に位置することを指摘している³⁾。337尺はちょうど675尺の半分にあたる。ところが、表の数値を用いてそれぞれの基準尺を求めると、順に、0.293m、0.286m、0.305mとなり、従来の成果には整合しないことになる。しかしながら、現在も東七坊大路の副員が確定していないことや、伽藍内の建物配置でどこまで基本計画に則り施工したかという問題もあり、この指摘を否定するわけではない。むしろ、頭塔の東西心は1.5坪分の1/2、中軸線から西に正確に配置されていたと考えられる。

なお、頭塔は春日山の東麓から西へ延びる台地上の西端に位置し、奈良盆地に広がる平城京の街の中からは、構築物を最大限効果的に見せることができる。仮に100m東の東大寺の伽藍中軸線上に頭塔を配置したとすると、頭塔の下半部は台地の上端線に没し、さらに高い構築を施さない限り見えにくいことになる。そこで東大寺の朱雀といつても、中軸線上をはずして、地形条件を重視して、視覚的効果の大きい位置に配置したとも考えられる。

C 頭塔の位置とその意味

頭塔は平城京から見えやすい台地の端で、東大寺の建物とも関連する位置にある。近世城下町の都市景観設計では街路のアイ・ストップに天守や山頂を用いた事例が多数知られているが、遡る平城京四条大路でもアイ・ストップに頭塔を用い、シンボリックな景観をつくったと考えられる。頭塔の造営者や背後の発願者は、こうした都市景観の構成をも企図したと推定できる。

注

- 1 奈良市教委 1996「平城京左京(外京)四条五坊一坪の調査」『奈良市埋文報告 平成7年度』。
- 2 外京については武田和哉が多角的に問題点を整理している。武田和哉 1997「平城京外京条坊制考—興福寺伽藍中心線との位置関係について」『奈良古代史論集』3。
- 3 岸俊男 1987「日本都城制総論」『日本の古代』9。

2 遺構変遷と年代

A 下層頭塔の造営

奈良時代後半のある日、新薬師寺から元興寺寺地東北部（現奈良ホテル・大乘院庭園）まで西北西に長く伸びる尾根から分岐した小尾根の上で、異様な土木工事が始まった。小尾根上にあった6世紀の古墳を破壊し、南と西に緩く下がる斜面に直接版築を行なって基壇を造り、その上に階段状の塔身を築き上げ、外表面のほとんどを石で覆った。そこは台地の縁辺上であり、平城京四条大路の東への延長線に乗っけているので、工事の進行が四条大路方面からつぶさに窺えたはずである。

(1) 完成か未完成か

下層頭塔の構造については第VI章3Aで詳述するが、三重塔としての復原が可能である。しかし、発掘調査で確認した塔身は二重までであり、三重目の築土は確認できなかった。はたして下層頭塔の工事は完成したのか、工事途中で上層に改造したのか。上層の造営に際して、下層をかなりの部分まで切り崩し、瓦や石材や築土を回収・再利用しているのだから、その判定は困難だが、結論的には塔身・基壇ともども完成していたと考える。以下、根拠を述べる。

一般的な基壇建物の場合、基壇の仕上げは建物本体が完成してから行うのが普通である。頭塔の基壇上面舗装は全体を覆わずに塔身の周囲のみに犬走状に巡るもので、その外側は築土が露出している。舗装のうち、西面・北面・東面北端では平石敷の周囲に1段低く小礫敷を設けるなど細かい作業をしているし、小礫敷の有無にかかわらず平石敷の縁部は直線的に仕上げで見切りとしている。このような丁寧な仕事の開始は、施工した舗装が乱れてしまうのを避けるため、塔身を築く足場や資材搬入路の撤去と清掃が完了してからであろう。

完成の根拠

また、基壇上面舗装の平石敷の東北隅・西北隅で検出した柱穴は、儀式のための旗竿用と考えられ、柱痕跡の状況からみて実際に赤塗りの柱が立っていた。また石敷の施工は柱を立てた後である。これらは竣工後の儀式の挙行を前提とした仕事であり、下層頭塔が完成したことは間違いあるまい。

(2) 造営開始年代

では下層頭塔の造営開始年代はいつであろうか。結論的には天平宝字4年(760)と考えている。発掘調査では下層頭塔造営に際して6世紀の古墳を破壊したことが判明している。古尾谷知浩が第VI章5Aで詳述するが、正倉院文書続修22に収められる「天平宝字四年造南寺所解」から、天平宝字4年3月頃に東大寺南の朱雀路にあたる場所で、造東大寺司管下の造南寺所(=造香山薬師寺所)が何らかの造営工事を行った際に墓を破壊したことが窺える。頭塔は東大寺大仏殿と南大門を結ぶ中軸線の南延長部より西に約100mずれるが、『東大寺別当次第』に記す「御寺朱雀之末」の「土塔」であるから、造南寺所が破壊した墓が頭塔下古墳に当たり、その工事が下層頭塔の造営であった蓋然性を強く認めるので、天平宝字4年を下層頭塔造営の開始年代と考えるのである。ただし、正倉院文書の「南寺」関係史料には、天平宝字3年(759)□工所解があり、天平宝字3年にも「南寺」関係の造営があったことが推定できる。こ

天平宝字
4年

れが下層頭塔に関わる記事であれば、着工は天平宝字3年まで遡ることになる。ただし、この時の造営が新薬師寺中枢部に関わる可能性も捨てきれず、より蓋然性が高いのは4年からと見ておく。造営終了時期については、特殊な建造物ゆえ工事期間をどれほどに見積もるか難しいが、天平宝字年間には取まると考えたい。

東大寺創建期の軒瓦

造営が天平宝字年間前半に遡ることを傍証する考古学的根拠も示そう。第VI章4Bで詳述するが、下層頭塔所用の軒瓦は6235Mb-6732Faであり、それより新しい瓦は含まない。ともに東大寺創建期の軒瓦であり、作範年代はほぼ天平勝宝年間に取まるから、下層頭塔の年代がそれより遡ることはない。また天平宝字年間は6235-6732の新たな作範は行われず、天平勝宝年間製作の範の継続使用期であるとともに、神護景雲年間に至れば6234A-6732D・Hなどの新範を用い始めるので、より新しい型式を含めずに6235Mb-6732Faのみを使用する期間は、天平宝字年間に取まると考えるのが無難だ。また、天平宝字4～5年造営の法華寺阿弥陀浄土院への供給瓦窯である京都府木津町五領池東瓦窯では6732Fbが焼き口に用いてあり、6732FaからFbへの彫り直しは、天平宝字4年以前に終了していた。したがって6732Fbを含まずFaのみである下層頭塔所用軒平瓦は、天平宝字4年以前に製作されていたと考えられる。

B 上層頭塔の造営

(1) 改造の理由

上層頭塔は、基壇こそ下層を踏襲するものの、塔身は下層をかなり破壊し埋め尽くして造ったものだ。姿も下層の3段から7段に変え、44ヶ所もの仏龕を配した。下層の仏龕の数は残念ながら不明であるが、下層W1wには下層E1wの大仏龕に対応する仏龕はなく、下層E2wにも認められないことから見て、多くはなかったと推定できる。上層で仏龕の数を増やした理由は、改造の主体者が計画した教学的構想の表現上の必要性からであろうが、下層から上層への改造には、他にも土木技術上の理由などがあつたと考える。総じて下層頭塔は設計上の欠陥があるのに加えて施工も杜撰で、土木工事としての出来が悪い

石積崩壊が

石積の高さ 下層頭塔の構造の詳細は第IV章2A・第VI章3Aで詳述するが、下層の石積は2mないしそれ以上も垂直に積み上げているにもかかわらず、石と石の隙間が大きく、とくに下層W1w・S1wでは石積工程の途中で築土だけを厚さ20～25cmも積んだ部分すらある。石と石の間の目地が土であつて、石どうしが直接噛み合っていない部分が多い点は上層でも改善されないが、下層の方が杜撰であつて、下層S1wが手前はかなりオーバーハングしている例からも明らかのように、竣工後間もなく石積の崩壊などの深刻な事態が生じたと推定できる。下層から上層への改造の主眼は、塔身全体の高さをほとんど変えないで段数を増やし、石積1段の高さを低く押さえることであつたと考えたい。

塔身各辺の屈曲 下層塔身の各辺は一直線をなさず、剣菱状に突出する特徴がある。最長でも21.75mにすぎない石積を、一直線に仕上げるのが技術的に困難だったとは考え難いので、折れ線とする意図はあつたと考えるが、屈曲点が各辺の中央には来ず、特に下層E1wではかなり北に寄る。それが石積としての欠点になるとは思えないが、上層では各辺を一直線に造るから、上層への改造者が不都合と見なしたことは明らかだ。

基壇上面の勾配 下層頭塔造営前の旧地形は、南北方向で2.5～3%勾配の南下がり、東西

方向で2.5~2.7%勾配の西下がり斜面をなしていた。下層頭塔造営時に基壇土を西に厚く盛れば水平にできたにもかかわらず、基壇上面の(石積と並行する方向の)勾配は、南北方向で1.5~2.5%、東西方向で1.5~2.0%であって、補正は若干にとどまった。これも改善の対象と見なされたようで、上層では東面・北面では1%まで補正している。

補正は若干

塔身の振れ IV 2 Aで述べたが、下層頭塔の基壇各辺の振れは、W 0 wが北で東に $0^{\circ}57'$ 、N 0 wが東で南に $1^{\circ}24'$ 、E 0 wが北で東に $1^{\circ}41'$ であるから、基壇の平面形は北が広い逆台形となり北で東に 1° 以上振れる。いっぽう下層の塔身各辺は剣菱状だが、下層1 wの西北隅と東北隅、東北隅と東南隅を直線で結ぶと、それぞれの振れは東で北に $1^{\circ}0'$ 、北で東に $1^{\circ}10'$ となるから、塔身の平面形は北が広い逆台形となり北で西に約 1° 振れる。基壇と塔身で振れの方向が逆となるから、基壇の出が一定せず見苦しい姿となる。上層への改造では、基壇はそのままだ、塔身の振れを基壇に近付けた。すなわち上層W 1 wは北で東に $0^{\circ}13'$ 、上層N 1 wは東で南に $1^{\circ}44'$ 、上層E 1 wは北で東に $2^{\circ}03'$ で、それぞれ基壇の振れに近くなっている。

(2) 改造年代

上層への改造年代は、先にA(2)で述べた下層頭塔の年代観から見れば天平宝字年間後半以降となろうが、それ以上に絞り込むための遺物に乏しい。上層築土から出土した土師器小皿は従来から年代が決めにくい器種であった。上層所用軒瓦は第VI章4 Aで述べるように、下層所用軒瓦をそのまま用いているから決め手にならない。実忠が神護景雲元年(767)に造立したという「土塔」・「石塔」を上層頭塔に当てれば、造立は神護景雲元年となるが、『東大寺要録』や『東大寺別当次第』に言う「造立塔一基」「建石塔」「作土塔」が、起工か竣工かという問題は残る。一般論としては両方あり得るであろうが、古尾谷知浩によれば「造進」は「ツクリタテマツル」であって竣工にふさわしいという。竣工であれば、改造への着手は天平宝字~天平神護年間に遡る可能性が出てくる。

神護景雲元年に竣工か

C 上層頭塔の変遷

上層頭塔の平安時代以降の変遷については、すでに第IV章2 C・第IV章3で記述した。ここでは重要な事柄にのみ再度言及する。

(1) 頂部に落雷

上層頭塔竣工後のある時点で、落雷で頂部施設が焼失・廃絶したので、心柱を抜き取り緡銭・琥珀玉を投入し、祭祀を行ってから埋め戻している(第IV章2 B(3))。その年代を考える根拠が緡銭である。緡銭の内訳は、和同開珎4枚、萬年通寶34枚、神功開寶83枚、不明銭1枚であって、隆平永寶を含まない。この組成が当時流通していた銭貨の比率を反映していると仮定すると、和同開珎がまだ残るが少なくなり、神功開寶が増えているから、宝亀年間より新しく長岡宮期を中心とすると見えよう(柴原 1991)。

長岡宮期に落雷か

(2) 石塔造立

埋め戻した穴の最上部に銭貨を埋納し鎮壇を行ってから、凝灰岩製十三重塔を建立した。鎮壇具の一部と見られる銭貨の内訳は、和同開珎1枚、神功開寶2枚、隆平永寶1枚であり、隆平永寶を含むので、石塔の造立は隆平永寶発行年の延暦15年(799)以降に下る。

なお、(1)で述べた心柱の抜き取りと、石塔の造立とを一連の出来事と考えれば、緡銭・琥

珀玉の投入による祭祀も鎮壇の第一段階と評価せねばならなくなるが、ここでは落雷と石塔造立に時間差を認めるので、緡銭・琥珀玉投入の意味は、落雷といった災いの再発防止を祈るためと考える。

また、十三重石塔に伴う地鎮具と考えた盗掘坑出土の和同開珎1枚、神功開寶2枚、隆平永寶1枚を、「舍利荘嚴具」の一部とする説もある(奈文研 1989)。これを検討しよう。石塔でなく木造塔の場合、塔心礎に舍利と荘嚴具を安置する風は7世紀後半まで盛んだったが、奈良時代以降衰退してしまい、心柱頭に納めたり、国分寺造営以降は法舍利としての経巻を塔内に安置する風が主流となる(石田 1932・1969、中野 1976、森 1993)。石塔でも同じ傾向を辿るとすれば、延暦15年(799)以降に造立の頭塔十三重石塔で、基壇の下に舍利荘嚴具を置くであろうか。時期は下るが、建長5年(1253)造立の奈良般若寺十三重石塔では塔身に穿った穴に舍利と多量の荘嚴具を納めている。頭塔の頂上部盗掘坑出土の銭貨が、もともと般若寺石塔のように塔本体のどこかに納められ、石塔の倒壊後に台石の下に埋められたのなら、舍利荘嚴具であった可能性は否定できない。しかし最初から台石の下にあったのなら、舍利荘嚴具ではなく、むしろ鎮壇具と見なした方が良いと考える。

銭貨は
鎮壇具

(3) 石仏供養

11世紀後半を中心とする時期に、石仏の前に多くの灯明皿などを並べて供養を行っている。石仏が一般民衆の信仰の対象となっていたとする説もあるが(巽・佐川 1990)、民衆信仰であればしばらく継続して不思議はないし、土器に年代幅が見られても良からう。しかし実際には、土器の年代は11世紀前半に遡るものがあるものの、11世紀後半の一時期に集中するから(第V章4B)、特別な事情が生じた時にのみ行った供養と考えるべきであろう。古尾谷知浩が第VI章5B(2)で述べるように、11世紀以降、興福寺菩提院が頭塔の取り込みを図るので、菩提院における何らかの事件・事情と関わる可能性があるが、今の所特定できておらず、今後の検討課題である。

(4) 十三重大墓

保延6年(1140)の大江親通による『七大寺巡礼私記』興福寺菩提院の条には、頭塔を「十三重大墓」と表現している。仏菩薩像を彫刻した「墓石」にも言及してはいるが、塔身本体はかなり崩壊しており、頂上の十三重石塔のみが目立つ状態だったのであろう。そして、すでに東大寺や新薬師寺とは縁が切れ、興福寺関連の施設と認識されている(第VI章5B(2))。

(5) 興福寺賢聖院から日蓮宗常德寺へ

中世の頭塔は興福寺大乘院領となり、18世紀初頭の時点では、興福寺賢聖院の管理下にあった。享保15年(1730)に賢聖院から日蓮宗常德寺に譲渡され、末寺頭塔寺となり明治に至った。

参考文献

- 石田茂作 1932 「塔の中心礎石の研究」『考古学雑誌』22-2・3。
 石田茂作 1969 『日本仏塔』。
 柴原永遠男 1991 「和同開珎の流通」『新版古代の日本』6。
 巽淳一郎・佐川正敏 1990 「頭塔(西北部)の発掘調査」『奈良国立文化財研究所年報1989』。
 中野政樹 1976 「舍利とその容器」『新版仏教考古学講座』3。
 奈文研 1989 「頭塔の調査 第199次」『昭和63年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』。
 森 郁夫 1993 「古代寺院における舍利納置」『平安京歴史研究』。

3 頭塔の構造と復原

A 下層頭塔の復原

(1) 遺構の状況

遺構の状況は第IV章2Aに詳述したが、再度要点を述べるとともに、その事実関係に基づいて平面プランを図示しよう (Fig.36)。

基壇 平面形は逆台形を呈す。東西長がN0w位置で33.0m (111.5尺)、W1c・E1c石仏位置で32.75m (110.5尺)、推定南北長がW0w位置で31.8m (107.4尺)、E0w位置で32.0m (108.1尺)。基壇の振れは、N0w推定線が東で南に $1^{\circ}24'$ 、E0wが北で東に $1^{\circ}41'$ 、W0wが北で東に $0^{\circ}57'$ であるから、全体として北で東に 1° 以上振れる。基壇の出は北面5.4~5.9m、東面5.8~6.0m、西面5.85~6.15mである。基壇高は基壇土上面までで北面1.4m、東面1.0~1.3m、西面1.6mであり、W0w高は1.8mである。

塔身 平面形はわずかに北が広い逆台形を呈す。2重まで確認した。1重の推定東西長20.2~20.8m (68.2~70.3尺)、推定南北長21.7~21.75m (73.3~73.5尺)、高さ約3m、2重の推定東西長13.2~13.8m (44.6~46.6尺)、推定南北長14.3m (48.3尺)となる。石積の高さは基底部を含めて1wが2.3m以上、2wが1.4m以上である。1wの各辺は直線ではなく、剣菱状に中央が張り出すが、隅と隅を結んだ直線の振れは、下層N1wは東で北に $1^{\circ}0'$ 、下層E1wは北で東に $1^{\circ}10'$ となり、主軸は北で西に 1° 程度振れる。各段の上面石敷はまったく検出しておらず勾配は不明であるが、幅は下層E1Pが約3.5m、下層S1Pが約3.7mである。

(2) 本来の姿の推定復原

(1)に示した実測値から下層頭塔の設計原理を推定する場合の問題点がある。第VI章2b(1)で述べた塔身各辺の屈曲、基壇上面の勾配、塔身の振れに加えて、基壇・塔身ともに平面が正方形ではない点である。何度も述べたように北が広い逆台形で、しかも南北長が東西長より1.5mほど長い。

こうした変則性は施工時の都合や誤差などのために結果的にそうってしまった面があると推定する。設計者が意図したものは、もっと整然としており、その設計原理は単純な原則からなると仮定して推定を試みた。

単純な
設計原理

基壇規模 一辺を東大寺大仏の高さ53.5尺の2倍たる107尺 (31.7m) とみる説がある (松浦1997)。推定南北長はこれに近いが、北半の長さを2倍して得た数値であるから問題があり、東西方向は107尺より110尺 (32.6m) の方が近い。下層W0w以外は当初の石積が残っていないか未調査の現状では、どちらとも決し難い。

石積間の距離 頭塔の中心から下層1wまでの距離の3等分線が下層2w・下層3wの位置である。したがって下層1w~下層2w、下層2w~下層3w、下層3w~頭塔心の距離をXとすると、Xの実長は約3.55m (12尺) であり、石積の一辺の長さは、下層1wが6X (72尺・21.3m)、下層2wが4X (48尺・14.2m)、下層3wが2X (24尺・7.1m) となる。

屋根は何重か 第VI章2A(1)で結論を先に示したが、本書では下層頭塔を3重と考える。

しかし発掘調査で3重目を確認してはいないから、2重までしかないか3重目が小さいかで、戒壇のような形状であったと推定する人もあろう。しかし、前項で示したように、頭塔の中心から下層1wまでの距離の3等分線上に下層2wを乗せているから、内側の3等分線上にも石積を配したと見るのが自然だろう。戒壇であれば、かりに覆屋が瓦葺であっても壇自体は瓦葺ではないはずだ。下層頭塔に覆屋があった証拠はなく、テラス上に直接瓦を葺いたと推定できる。瓦を葺く(設計上は)正方形平面の建造物としてはやはり塔がふさわしく、塔であれば、多宝塔成立以前のこの時期に2重は考え難い。

30%勾配と推定

屋根の勾配 屋根の勾配は30%と推定する。後述するが、上層頭塔で瓦屋根を載せたと推定できる奇数段上面の勾配は25~30%である。下層頭塔も瓦葺であればこの数値が参考となる。下層2w下端と基壇上面との比高差は最大3.2mである。下層2wの下方25cmが築土の下に隠れるとして、下層1Pの勾配が30%なら下層1wの高さは2.35m(8尺)、25%なら2.55m(8.6尺)となる。検出した範囲の下層1wで最も良く残る下層W1wの高さは推定2.3mであり、どちらの勾配でもあり得るが、下層1wの高さを低めに考えて勾配30%を採用する。

推定復原 以上の要素以外に下層2w・3wの高さを決める必要があるが、その手がかりはない。ここでは、下層1wと同じ2.35m(8尺)案と、半分の1.2m(4尺)案を図示した(Fig.36)。4尺案では塔身高が約8mとなり、上層頭塔の7段目までの推定高さとはほぼ一致する。8尺案では塔身高が約10.35mとなり、高い石積が崩落しそうで不安である。

B 上層頭塔の復原

(1) 遺構の状況

遺構の状況は第IV章2Bに詳述したが、再度要点を述べるとともに、その事実関係に基づいて平面プランを図示しよう(Fig.37)。

基壇 基壇の平面規模は下層を踏襲しており省略する。基壇の出は北面3.55~3.65m、東面3.95~4.1m、西面4.1~4.3mである。基壇高は北面1.45~1.65m、東面1.35~1.65m、西面1.85~2.3mである。

塔身 わずかに北が広い逆台形を呈す。以下に石積の長さ、高さ、振れの値を示す。()は強引に推定した参考値である。

	1w	2w	3w	4w	5w	6w	7w
長さN	24.8	22.5	18.8	16.0	12.4	9.8	6.35m
E	24.2	(22.1)	(18.5)	(15.8)	12.3	9.7	(6.35)m
W	(24.85)	(22.45)	(18.7)	(16.0)	(12.3)	(9.7)	(6.35)m
高さN	135~150	75~80	90~95	55~65	85~90	95~100	75cm
E	140~150	70~75	80~90	65~75	85~90	95~100	75cm
W	135~150	55~80	90~95	45~60	85~105	85~100	75cm
振れN	S1°44'	S1°27'	S1°20'	S1°52'	N0°19'	S0°43'	S0°56'
E	E2°03'	E1°52'	E0°52'	E1°23'	E0°40'	E1°53'	E0°58'
W	E0°13'	E0°15'	E0°53'	E1°21'	E1°09'	E1°35'	E1°06'

次に各段上面石敷の幅と勾配の値を示す。

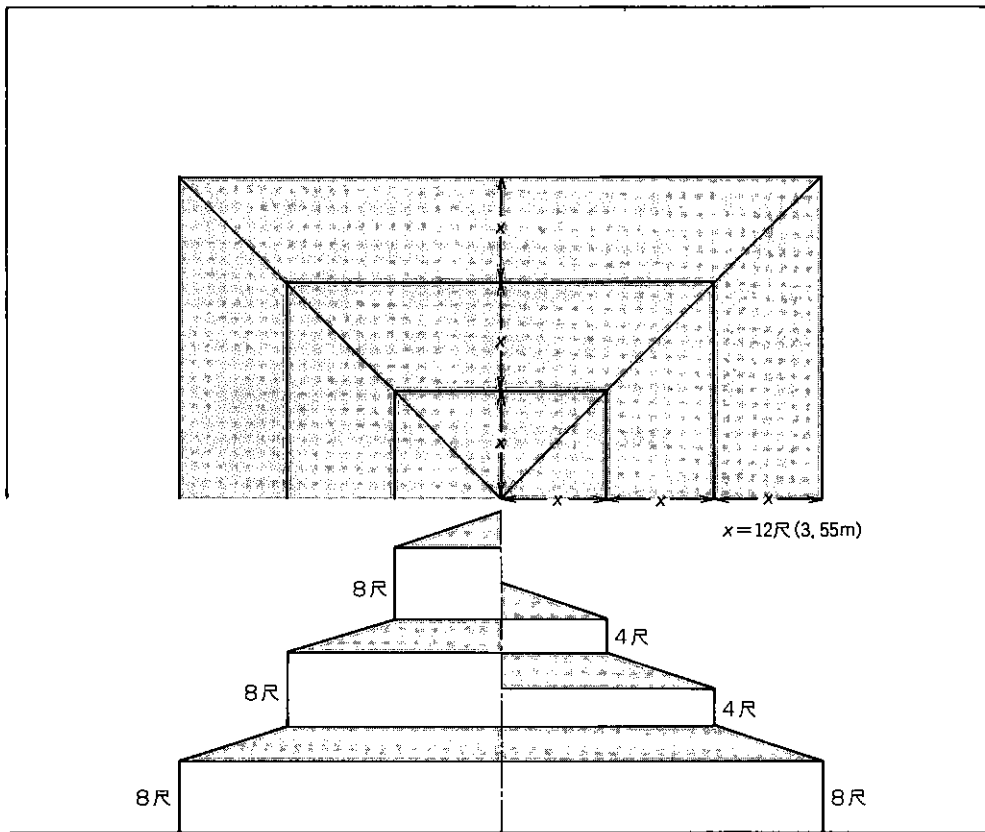
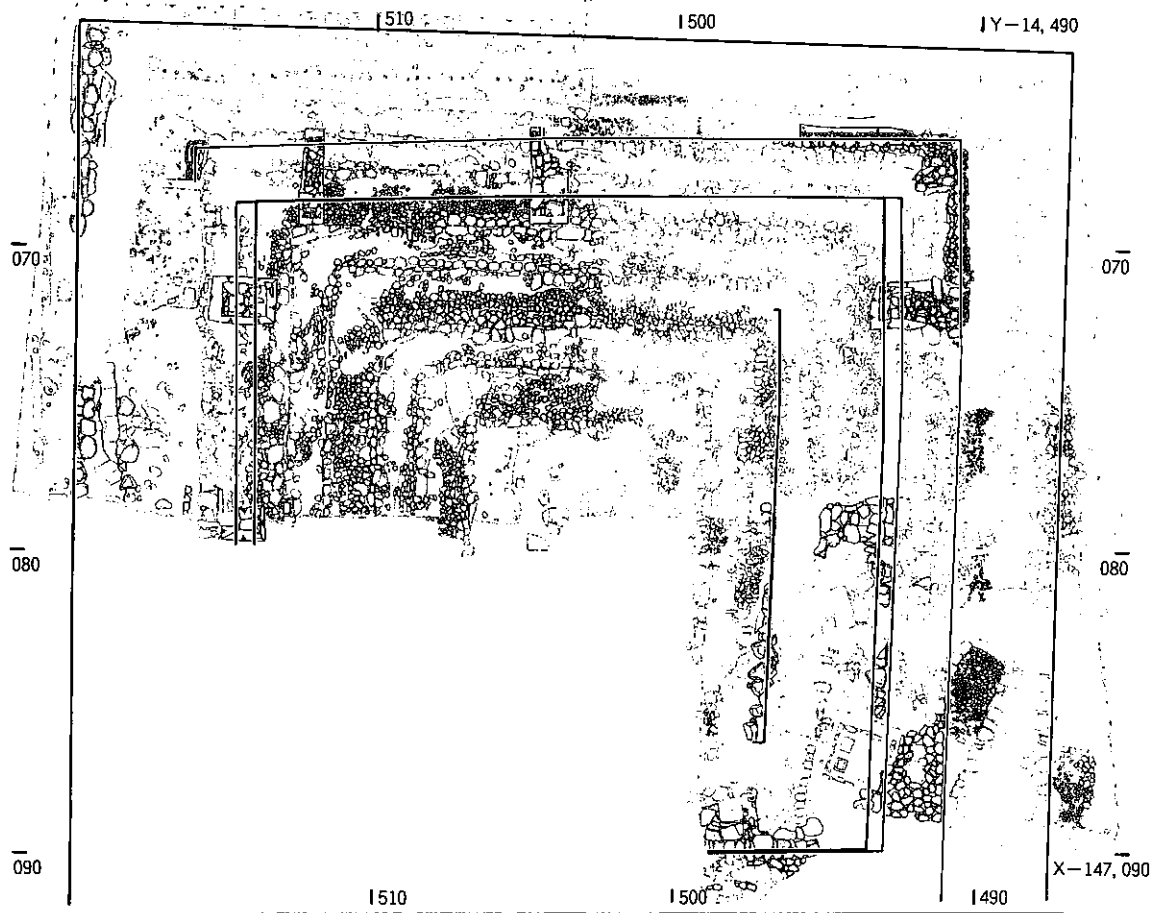


Fig.36 下層頭塔の平面と設計原理 (1 : 250)

	1P	2P	3P	4P	5P	6P
幅 N	105~125	185	135~145	165~200	120~125	160~165cm
E	105~115	170~185	135~145	170~185	135~160	170~180cm
W	115	170~180	130~140	165~170	130~135	160~165cm
勾配N	?	10~13	26.5	3~7.5	24	5.5%
E	?	11	?	5.5~7	25~30	8.5%
W	?	12.5	31	9~10	26	3.5%

(2) 上層頭塔の変則性

なお残る
欠陥

(1)に示した各種の実測値から設計原理を推定する場合の問題点がある。施工が杜撰で出来の悪い点が多々あるからである。上層頭塔は第VI章2B(1)で述べた下層頭塔の欠陥を補正したものの、塔身の平面形、基壇上面や塔身石敷の勾配については次のような欠陥が残った。

イ、塔身の平面形が正方形ではない。そうなった理由は何か。上層塔身の各辺は、下層と異なり基壇の振れにほぼ平行させて直線的に施工した。ところが、そもそも基壇が正方形ではなく北広がりであったため上層塔身も北広がりとなった。それに加えて、一部を検出した上層S1Wも上層N1Wと平行ではなさそうで、塔身全体としては北と西が広い不等四辺形となっている。このために、塔身各段の石積長が面ごとに異なる。

ロ、イに加えて、同一面の石積が互いに平行ではない。このために同一段のテラスの出が面ごとに異なるとともに、同一面においてさえ一定しないことが多い。

ハ、基壇上面、塔身各段上面石敷の、石積と並行する方向の勾配が水平ではなく、同一面の石敷の(石積と並行する方向の)勾配が一致してもいない。このために同一段の石積の高さが面ごとに異なるとともに、同一面においてさえ一定しない。

(3) 設計原理の推定

単純な
設計原理

(2)で示した変則性は、下層頭塔の場合と同様に、施工時の都合や誤差などのため結果的にそうってしまった面が強く、設計者の意図はもっと整然としており、設計原理は単純な原則からなると仮定して推定した。変則性や誤差をあえて捨象することによって浮かび上がった原則を記す(Fig.37・38)。ただし以下に示す各部分の数値は、実測長と必ずしも一致しない。

石積間の距離 頭塔の中心から1Wまでの距離の4等分線が3W・5W・7Wの位置である。したがって1W~3W、3W~5W、5W~7W、7W~頭塔心の距離をxとすると、xの実長は約3.1m(10.5尺)であり、石積の一辺の長さは、1Wが8x(24.8m・84尺)、3Wが6x(18.6m・63尺)、5Wが4x(12.4m・42尺)、7Wが2x(6.2m・21尺)となる。そして、2W・4W・6Wの位置は、1W~3W、3W~5W、5W~7Wの距離を2:3に区分する線上にある。

石仏の位置 一辺の長さがxの正方形の対角線の長さ($\sqrt{2}x$)をyとする。第1段では石仏1a・1eは1Wの両端から距離xの所に置く。そして石仏1a・1eから距離yの所に石仏1b・1dを置く。第3段では石仏3a・3cは、3Wの両端から距離yの所に中心を置く。第5段では、石仏5a・5bは5Wの両端から距離xの所に置く。原則が以上であるから、石仏1a・5a・7a、石仏1e・5b・7aはそれぞれ一直線上に乗るが、石仏3a・3cはその直線より内側にずれる。いっぽう石仏1b・3a、1d・3cはそれぞれ一直線上に乗る。

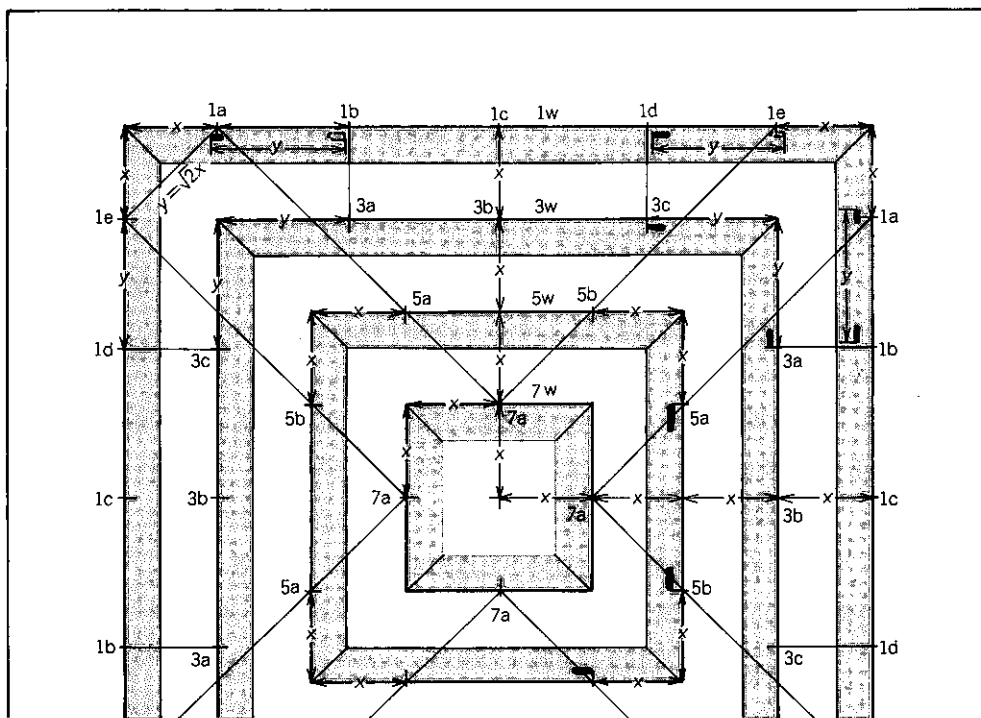
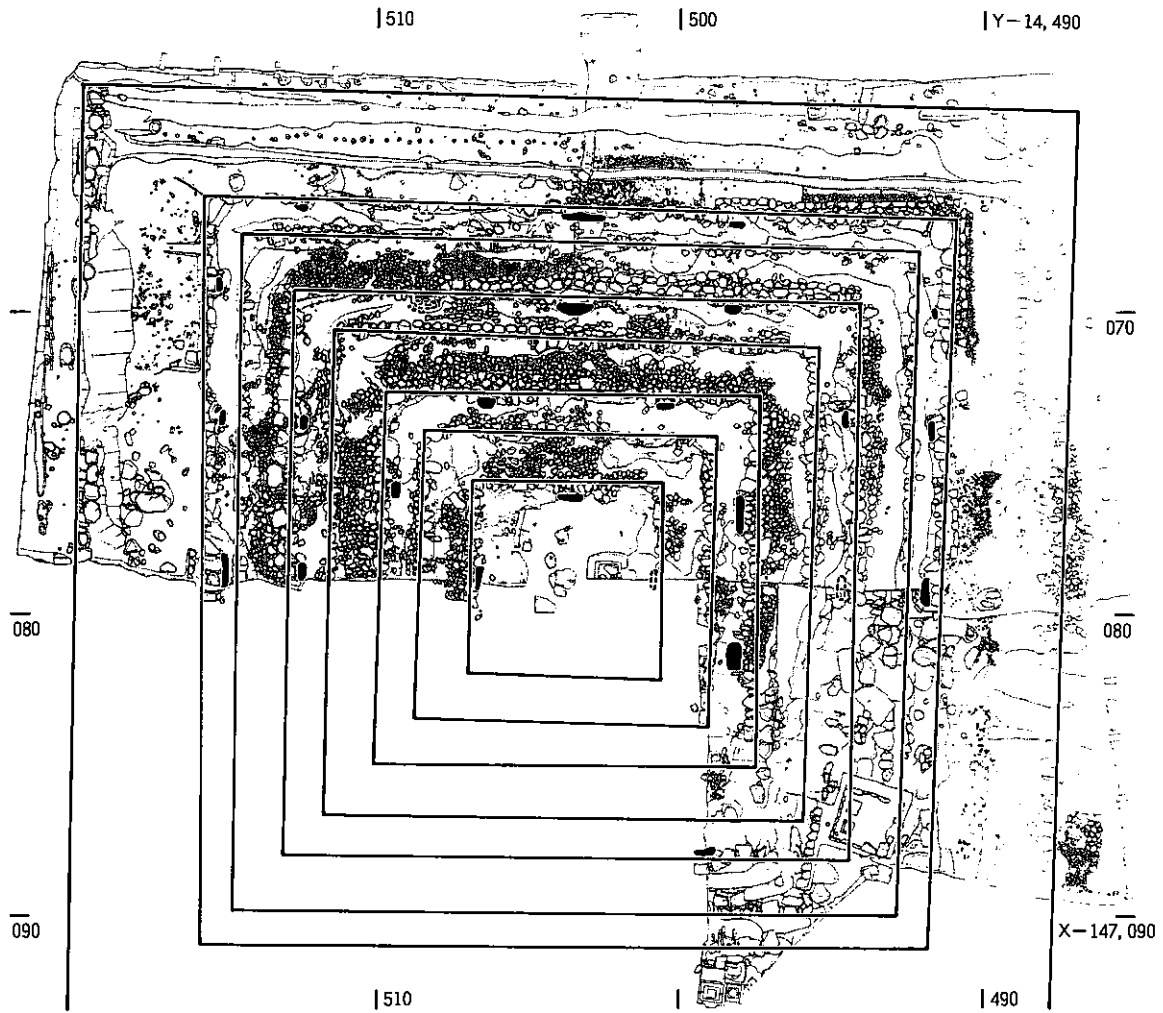


Fig.37 上層頭塔の平面と設計原理 (1 : 250)

実際の施工に際しては、長さ $x \cdot y$ の縄などを用意して石仏の位置を決めたのだろうが、原則の適用に臨機応変の所がある。石仏1 a-1 b、石仏1 d-1 eの距離 y の場合、西面では心々距離を y とするが、北面・東面では石仏の外外の距離を y とする。また石仏3 aや3 cと3 w端との距離 y の場合、W 3 c・N 3 aは石仏の心、N 3 c・E 3 aは3 w端から遠い方の端、S 3 aは3 w端から近い方の端を合す。石仏5 aや5 cと5 w端との距離 x の場合、W 5 b・N 5 a・N 5 bは石仏の心、E 5 a・E 5 b・S 5 aは5 w端から近い方の端を合す。

石敷の勾配 石敷の幅と、石敷の(石積と直行する方向の)勾配には明瞭な対応関係がある。偶数段上面すなわち2 P・4 P・6 Pは幅が広く5~10%の緩勾配、奇数段上面すなわち1 P・3 P・5 Pは幅が狭く25~30%の急勾配である。7 Pはまったく残っていないが、幅が狭く25~30%勾配であろう。

段の高さ 設計上重要なのは、石積の高さに石敷部分の高さを加えた値であり、これを段の高さと呼ぶ。奇数段が高く偶数段が低いのが原則。第1段のみ特に高く1.7m(6尺)。第2・3段の高さの和=第4・5段の高さの和=2.1m(7尺)であり、第6・7段の高さの和とも一致すると推定する。第2段と第3段の高さの比、第4段と第5段の高さの比はともに2:3であり、第6段と第7段の高さの比も2:3とすべきはずだが、なぜか1:1としている。

(4) 屋根は何重か

多量の瓦の出土から見て頭塔は瓦葺であった。問題は屋根が何重かである。結論的には1・3・5・7段上の4重に、頂上の木造塔身1層を加えた5重と考える。以下に根拠を記す。

石敷の幅と勾配 (3)に記したように、奇数段上面すなわち石仏の上では狭くて3寸勾配と急、偶数段上面すなわち石仏前面では広くて1寸勾配以下と緩い。木造塔と異なり雨漏りを考慮する必要がないとはいえ、勾配からみて瓦葺屋根を載せるのは奇数段上面がふさわしく、偶数段上面には水垂れ勾配のみを付けていると考える。

石仏の見え方 偶数段上面すなわち石仏前面に瓦葺屋根を載せると、垂木や野地板を置かずに石敷直上に瓦を葺いたとしても、下から15cmほどが見えなくなる。E 5 a・S 3 bでは蓮華座の花茎、S 3 aでは蓮華座、W 7 a・N 7 aでは蓮華座と仏の膝、E 5 bでは釈迦・多宝二仏を讃嘆する諸天四衆がまったく見えず不都合である。

偶数段の隅木の有無 第IV章2 B(2) c (P51)で述べたが、N 4 PとE 4 P・W 4 Pとの境界線、すなわち5 wの東北・西北隅から斜め45°の方向に石が無い幅15cmの溝状部分があり、第199次調査では隅木を置いたと考えた。しかしこの溝は斜面と斜面の境界、石敷と石敷の境界をうまく収めるために稜線上に直列に並べていた石の脱落痕と考えた方がよい。

軒支柱の有無 下層基壇上面の平石敷の東北隅・西北隅には柱穴がある。下層頭塔の存在が判明する前の第199次調査では、この柱穴を上層第1層の屋根の隅木を受ける柱と考えたが、そうではない。第199次調査では上層石積の周囲全体に柱が巡る可能性を考えたと検出できなかった。上層に伴う軒支柱は存在せず、軒の出もほとんど無かったと考える。

頂上部施設の有無 落雷で焼失した心柱の抜き取り痕跡の底からは、焼け焦げた板材1点と多量の炭化物・灰が出土した。心柱を抜き取った直後に入ったと推定でき、板材を含むので木造の塔身があったと考える。屋根が奇数段石積の上面だけでは4重となり塔の層数として奇異であることも根拠となる。

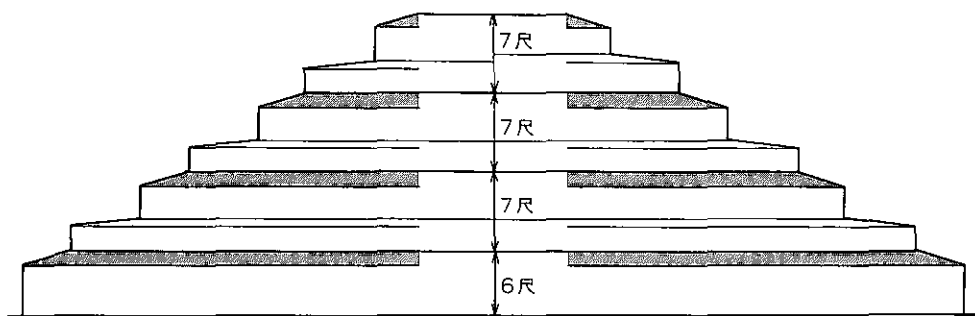
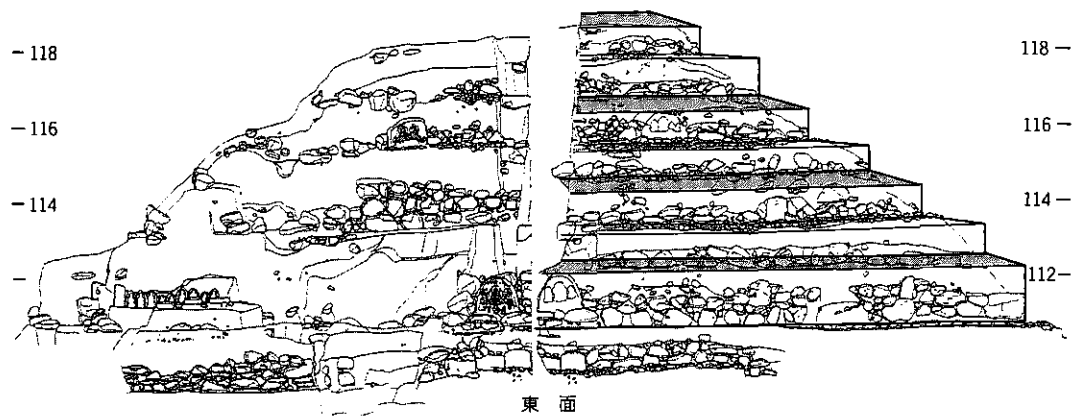
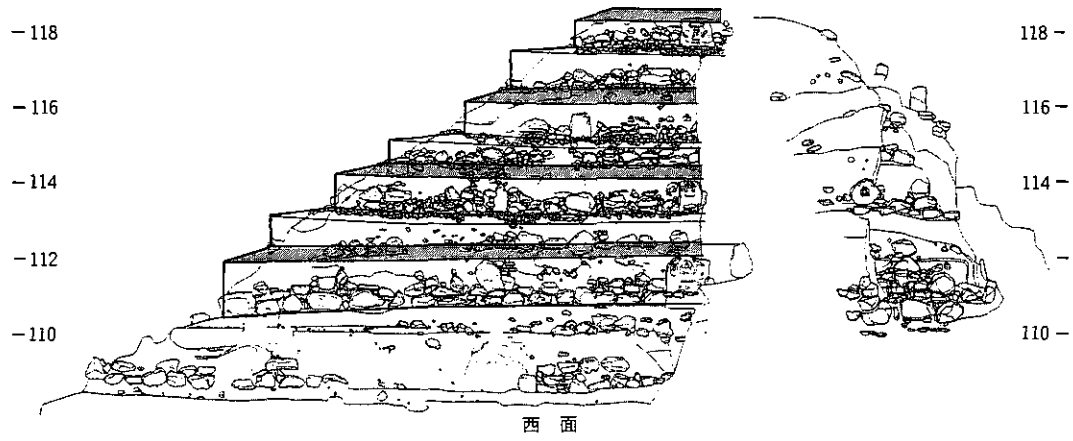
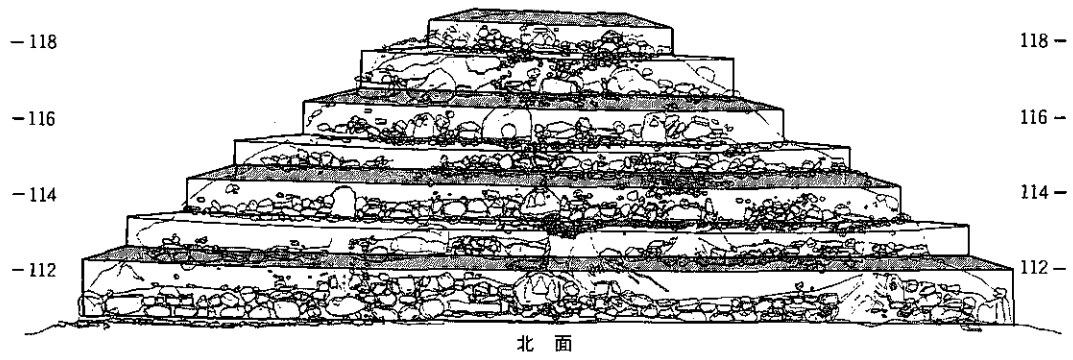


Fig.38 上層頭塔の立面と設計原理 (1 : 200)

(5) 既往の復原諸説と問題点

以上の検討結果および第Ⅵ章3C「屋根構造の復原」に記した成果に基づいた復原試案を示す(PLAN6)。上層頭塔の本来の姿については、先学がさまざま案を提示してきた。ここではそれらを紹介するとともに(Fig.39・40)、本書の復原案と比較検討しよう。

石田茂作案(石田 1958)発掘調査開始前に公表された復原図の唯一の例であろう。5重とし頂上に相輪を立てる。仏龕を有す第2～5重が、本書での1w・3w・5w・7wに対応する。第1重は本書での基壇に対応するが、この当時まだ基壇の存在は判明しておらず、4重ではおかしいという理由で第1重の存在を推定したものである。本書では石田氏の第1重があくまで基壇であって塔身にはなり得ないので、頂上部に木造塔身を1重分推定したのである。

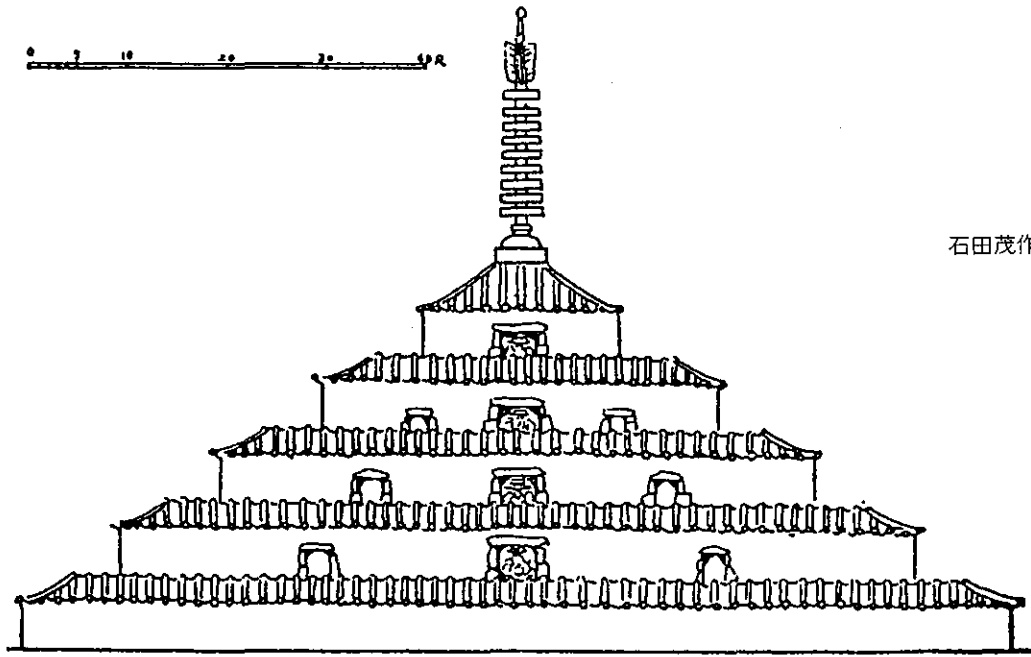
石田氏は本書での2w・4w・6wに相当する「石列」の存在にも気付いており、「石仏に繋がる護石」の外側をめぐる「一種の歩道のようなもの」の端を示す石列であり、その際から瓦葺が始まるとみている。本書では瓦葺は2w・4w・6wの下端から始まると考えているが、石田氏の時点では「石列」が石積の上端だとは判明していないから、石田氏の説はむしろ卓見というべきであろう。「土壇上に直ちに瓦葺」、「軒出の無い」という重要な指摘もある。

奈文研A・B案(巽 1989)第199次調査で北半全体の様相が判明した後に提示した2案。この調査では石積が7段と確定し、各段の上面石敷が屋根勾配をもつこと、中心に心柱が立つこと、瓦が多量に出土することが判明した。しかし、各段の隅に隅木を置き、石積の外に隅木を受ける柱が立つとの認識から、両案ともに軒の出を深くし軒支柱を立て、桁・隅木・垂木で屋根を架けていたと見る点では、本書での説と異なる。

A案は7重 A案は各段上面に瓦葺屋根を架け、頂上に相輪を立てる7重案。史料に見える「土塔」の表現にふさわしいと評しているが、石敷の幅と勾配が偶数段と奇数段で差があることが十分反映されていない。石敷のほぼ中央に軒支柱が立ち、軒支柱の外側の石敷の上には屋根が乗り、軒支柱の内側には石敷が露出し回廊状の空間ができる。一見台榭建築風だが、この空間は最大でも幅90cm、高さ90cmしかない。

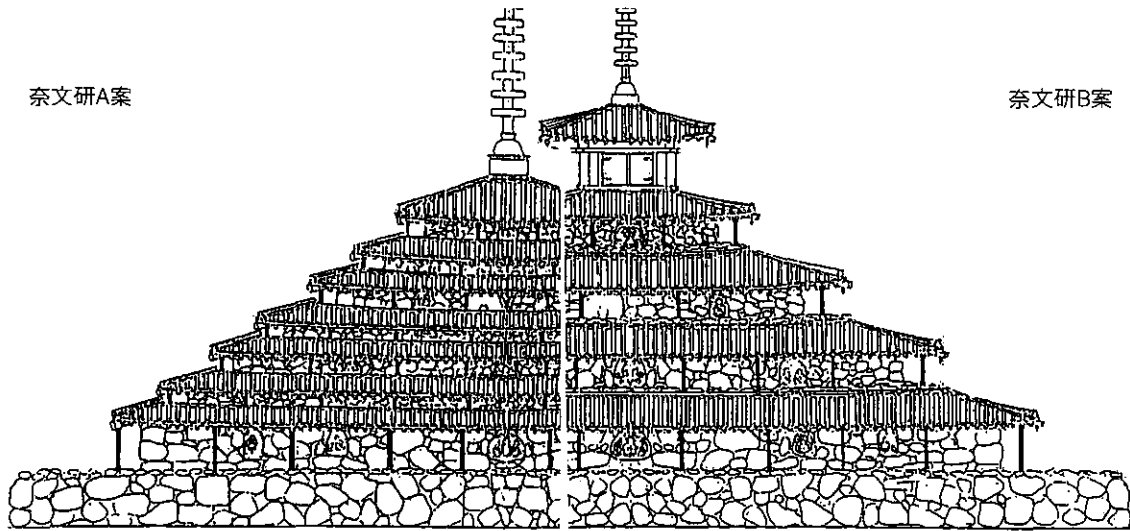
B案は5重 B案は、偶数段石積の上端から直下の奇数段石積を覆うように屋根を架けて4重とし、頂上に木造塔身1重を置いて5重とする案。本書の案と近いが、屋根が偶数段石積の上端から出ているため偶数段石積がまったく見え、軒の出が深くて軒支柱が林立するため、印象はかなり異なる。A案同様台榭建築風で、回廊状空間の高さに余裕ができるが、奇数段石敷と偶数段石積を造り分ける意味が無くなる。

戒壇説 杉山信三案(杉山 1991)奈文研A・B案への対案として出され、仏塔ではなく戒壇として復原する案。奈文研B案と同様に5重だが、台榭建築風ではなく、石積を芯としてその上に木造の覆屋をかぶせた形となる。発想の要点は、石積を7段でなく4段とし、偶数段石積を確たる段と見ずに、偶数段石積下端とその前面の奇数段石敷とがなす隅を、土居の痕跡と見ることにある。土居は「木造塔婆で、上層を形成する柱が、下層の垂木の上に据えられた土居の上に立つ、その土居」である。この土居桁上に柱を立て、土居桁と一つ下の段の柱の間に梁を渡して、偶数段上面石敷を覆う屋根を架けて回廊とする。頂上には舍利塔を据える。類例として中国チベット自治区白居寺大菩提塔などを挙げている。杉山説は下層頭塔の様相が判明する前に出され、下層を行基の戒壇に当て、実忠の関与をその再興と見るなど興味深い説ではあるが、発想

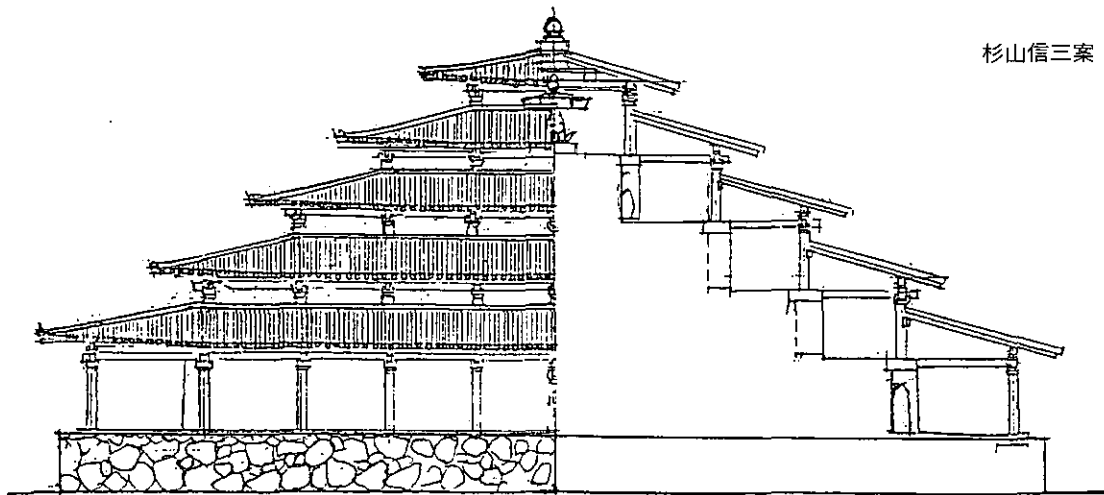


石田茂作案

奈文研A案



奈文研B案



杉山信三案

Fig.39 上層頭塔の復原案(1) (1:250)

の起点たる土居桁の存在は認め難い。杉山説では偶数段石積の下端を土居桁の当たりとみると同時に、土居桁を仏龕の直上に置いているが、検出した遺構でそのような状態を考えれば、土居桁の幅は奇数段上面石敷の幅である105~145cmに達したと考えねばならなくなり、異様に太い。しかし杉山が示した断面図では、偶数段石積の下端（土居桁の当たり）と、下側の奇数段石積の前面（土居桁の端）との距離はさほど広くなく、遺構の実態と齟齬がある。

楊鴻勛案（浅川 1994） 1993年に来日した中国社会科学院考古研究所の楊鴻勛は、「方案之一~三」という3案を示した。方案之三是奈文研B案と大差ない。方案之一は石田案と似て基壇にも屋根を架けて5重とするが、頂上に覆鉢形土饅頭を載せる。方案之二的4層以下は方案之三と同じだが、屋根を載せた土饅頭を第5層に置く。

特異な復原

方案之一の土饅頭はストーパーへの先祖返りと言える。方案之二的第5層はいわゆる宝塔状である。8世紀以前の中国本土においては、大きな覆鉢を載せる型式が、雲崗石窟第十一洞（北魏）・南響堂山石窟第一洞左壁（隋か）の浮き彫りや、舍利容器・墓塔などの小型品にあり、宝塔は敦煌莫高窟壁面にみられる。現実の建築にどれほどあったのか問題であるが、大野寺土塔の最上層の平面形は円形と判明しており、大型の覆鉢ないし宝塔状のものが乗っていた可能性があるから、こうした形態の知識が、8世紀前半の日本に入っていたとみてよい。そうであれば楊の方案之一・二も捨てがたく、第VI章3Cでも類似した案を示した。

注

- 1 杉山説は上層・下層ともに戒壇と見るが、発表時には下層頭塔の様相は不明であった。両者の姿がある程度明らかになった現在、上層を仏塔と認めても、下層については、さきに第VI章3A(2)に述べたように、戒壇の可能性を考える人がいるかも知れない。そこで中国・朝鮮・日本の戒壇を瞥見する（村田 1962、福山 1971）。①唐の道宣の『戒壇図経』に記す長安城外・浄業寺戒壇は、乾封2年（667）創建で3重。下壇は方29.8尺、高さ3尺、中壇は方23尺、高さ4.5尺、上壇は方7尺、高さ2寸。上壇上に覆鉢を置き、内に仏舎利を納め、上に宝珠を乗せる。②円仁が開成5年（840）に見た唐州・開元寺戒壇は2重。下壇は方25尺、上壇は方15尺、高さ2.5尺。③朝鮮・全羅北道・金山寺戒壇は3重。下壇は方40.8尺、高さ2.6尺、中壇は方27.5尺、高さ2.5尺、上壇は方6.6尺で覆鉢形舍利塔を安置する。④東大寺戒壇院の創建期戒壇は3重。下壇は方約45尺、中壇は方約35尺、上壇は方約10尺で中央に6重金銅塔を置いた。⑤唐招提寺に現存の戒壇は元禄8~11年（1695~98）の復興で3重。下壇は方35.2尺、高さ3尺、中壇は方27尺、高さ4.4尺、上壇は方7尺、高さ3.5寸。

事例がいささか少ないが、以上の例から見ると3重が多く、唐・浄業寺や東大寺の古代の例では、中壇が下壇の77~78%、上壇が下壇の22~24%の規模という基準があったのではなかろうか。下層頭塔の場合、第2段が第1段の67%と小振りであるのに加え、第1段が方72尺、高さ8尺、第2段が方48尺であって、戒壇とするには大き過ぎるのが明らかだ。

参考文献

- 浅川滋男 1994 「楊鴻勛先生の来日と頭塔復原」『奈良国立文化財研究所年報1993』。
 石田茂作 1958 「頭塔の復原」『歴史考古』2。
 杉山信三 1991 「大和 頭塔復原案の一つ」『史迹と美術』618。
 巽淳一郎 1989 「頭塔の調査 第199次」『昭和63年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』。
 松浦正昭 1997 「頭塔石仏の図像的解釈」『国華』1215。
 村田治郎 1962 「戒壇小考」『仏教芸術』50。
 福山敏男 1971 「戒壇と土塔」『新版考古学講座』8。

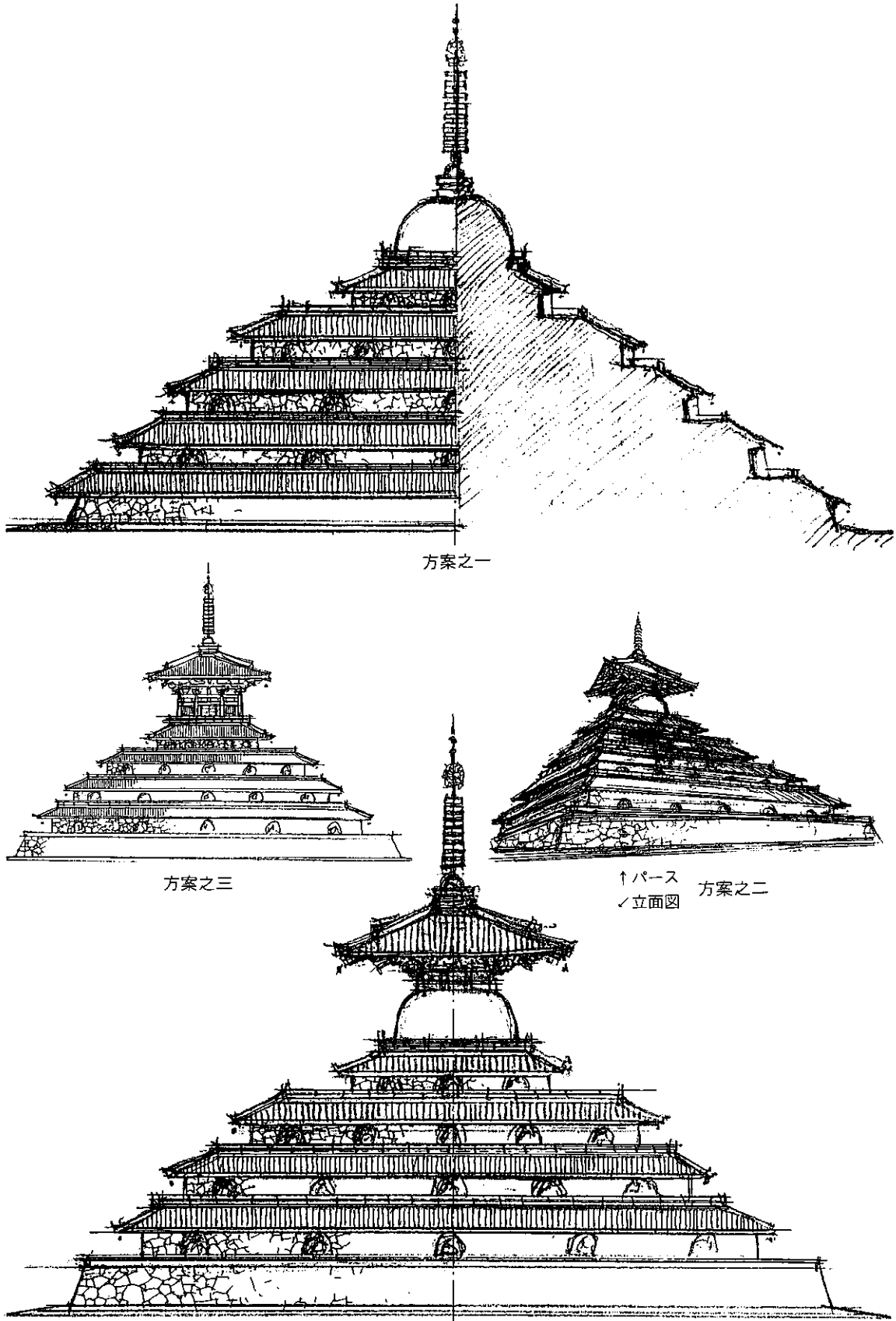


Fig.40 上層頭塔の復原案(2) 揚鴻勛 (1993) による。

C 上屋構造の復原

(1) 4重までの復原

頭塔は、1辺約110尺の方形基壇上にたつ5重の塔とみなされる。このうち4重の部分まで遺構が出土しているので、まずはこの部分の屋根構造を考えてみよう。すでに繰り返し述べてきたが、塔身の奇数段上面は幅が狭く、勾配が25～30%を示すのに対して、石仏をおく偶数段上面は幅がひろく、勾配は5～10%と緩い。これは、偶数段が石仏前面のテラス、奇数段は25～30%の勾配をもつ裳階風の瓦葺き屋根であったことを示している。

この裳階状屋根とそれが取り付く壁面においては、垂木をとめる仕口の痕跡がまったくなく、
瓦直葺き 瓦は石敷斜面上に粘土を塗りつけ直接葺いたものと推定される (PLAN 6-5)。頭塔における瓦直葺きの技法については石田茂作の先見的指摘があり、近年における大野寺土塔での出土状況がそれを裏付けた。但し、木材をまったく用いていないわけではない。第181次調査では、
瓦座は存在 裏面に朱を残す軒平瓦が出土しており、その朱は軒平瓦の先端から9cmの位置にあるので、ここに瓦座を配していたことがわかる。奇数段上面にはわずかながら軒反りも認められる。屋根に葺いた瓦は、軒丸瓦が6235Mb型式、軒平瓦は6732Fa型式である。丸瓦の直径は17.5cm、長さ32.4cm、平瓦は長さ37.8cmで、幅は短辺23.5cm・長辺28.8cmであり、葺足が24.4cmに復原できる。
瓦の割付 瓦の割付は、初重では5枚、二重では6枚、三重では7枚、四重では5枚重ねたことになる。瓦の割付は、初重が82列、二重が62列、三重が42列、四重が22列の各段20列減らしに復原できる。鬼瓦はまったく出土していないので、四隅の降棟は熨斗瓦の上に丸瓦を葺いただけの素朴な処理であったろう (PLAN 6-4)。瓦屋根の上端は出土した熨斗瓦と面戸瓦で留める。

(2) 5重の復原

塔身の最上層では、心柱の痕跡以外に明瞭な遺構がみつからない。したがって、5重の復原については推定の域をでないのだが、以下のように考察した。まず、心柱を有するわけだから、木造多重塔(層塔)の最上層と親近性をもつ意匠の構造物であった可能性は当然あるだろう。そこで五重に元興寺五重小塔の最上層を拡大して配してみたのだが、PLAN 6-6にみるとおり、四重までのずんぐりした外観と最上層の意匠上の不釣り合いは否めない。五重の屋根だけ軒が深く組物が派手にみえてしまうからである。この種の意匠を採用するならば、奈文研B案や楊鴻勛方案3のように、テラス部分に柱をたてて四重までの軒も深くとする構造のほうに意匠の統一性が生まれる。しかし、上層遺構に伴う柱穴は心柱以外まったくみつからない。

ところで、頭塔五重の意匠を推定するにあたって、最も参照すべきは大野寺の土塔である。この土塔最上層の基礎部分では円形にめぐる粘土ブロックが出土しており、頭塔の最上層もまた円形平面を呈した可能性を否定できない。この場合、宝塔・多宝塔系の意匠とも相関性が深くなる。いわゆる宝塔形式は密教とともに伝来したとされるが、敦煌莫高窟の建築壁画には北周・隋代からこの種の塔婆が描かれており、遣唐使がその実物もしくは図像資料を実見した可能性は十分あるだろう。そもそも「多宝塔」という名称は『法華経』見宝塔品に由来し、多宝如来をまつる塔の総称であって、特定の形式を指すものではない。日本でも朱鳥元年(686)銘をもつ長谷寺の銅板千仏多宝仏塔には六角三重塔が刻まれている。ここにいう「六角」あるいは「八角」が「円」の代替表現であることは、「八角円堂」などの呼称からもあきらかであ

り、韓国慶州の仏国寺多宝石塔（8世紀）では初重を方形、二重を八角形とするが、二重高欄上の蓮華座は円形を呈している。こうした諸例を視野に納めるならば、頭塔の最上層に円形平面、もしくは八角形・六角形平面の構造物が存在していたとしても不思議ではない。そこで、PLAN 6-7ではPLAN 6-6の軸部を宝塔風の土饅頭構造に替えた復原案、PLAN 6-8では頭塔と建設年代の近い法隆寺夢殿を五重に縮小して配する復原案を示してみた。しかし、いずれもPLAN 6-6と同じく、四重までの意匠と五重の意匠に大きな懸隔がある。

ひるがえって、石仏を飾る四重までの階段状構造と調和させようとするならば、五重の意匠には以下のような工夫が必要であろう。まず、四重屋根の上に下段と同じテラスをもう1段設け、その上に低い壁をたちあげて3寸前後の屋根勾配を確保し、屋根面に直接瓦を葺く。塔身の平面は方形か円形かは不明だが、大野寺土塔の最上層に敬意を払い、ここでは円形に近い八角形平面を採用してみた（PLAN 6-2）。なぜ円形平面ではなく、八角形平面にするのかと言えば、五重屋根を瓦葺とする場合、八角形でなければ納まらないからである。この八角屋根は勾配をややきつくして、五重全体が饅頭形に近い姿に作る（PLAN 6-1・3）。ただし、頂部はフラットにして直径98cmほどの伏鉢を置き、これを心柱が突き抜け相輪を支える。初重軒と三重軒を引き通した線に五重軒がくる（傾斜角35度）と仮定すれば、五重塔身の高さは約63cm、五重基底部の1辺は約416cmに復原できる。五重塔身の規模は瓦の大きさにより規定される。八角形平面の一辺に平瓦が4枚乗る大きさがちょうどよく、この場合、八角形の一辺は約120cm（4尺）、対辺間距離は約290cmに復原できるので、五重テラスの出は約63cmと非常に短くなる。また、塔身の高さも約63cmにすぎず、このスケールでは五重のテラスに人はあがれないし、壁面に仏龕を設けるのも容易ではない。四重の壁面各辺に仏龕が中央1ヶ所しかないことも、五重に仏龕がなかったことを想像させる。五重は、おそらくそれ自体が巨大な伏鉢としての意味を

八角形平面

大型の伏鉢

相輪の意匠

(3) 復原案からみた頭塔の系譜と意味

筆者（浅川）は、1991年に楊鴻勛氏が来日された際、頭塔の発掘現場を案内し、簡単な情報を提供したところ、楊先生はごく短時間のうちに3つの復原案を示された。そのうち伏鉢状の構造物を最上層に据えた方案1と方案2に強い衝撃をうけたのだが、多くの研究者は証拠がないとして、これを退けていた。しかし、このたび大野寺土塔の最上層で円形遺構が検出されたことにより、楊先生の復原案は大きく息を吹き返し、本復原案の母胎となった。さて、頭塔が「塔」であり、とりわけ中国華北の磚塔に影響を受けた可能性はたしかに高いであろう。しかし、方形階段状遺構の壁面に多数の仏龕を配し、その中央に円形（八角形）の伏鉢を配する姿は、立体曼荼羅とでも表現すべき建築物であり、とすれば、直接的な系譜関係はありえないに

立体曼荼羅

せる。かりにそれが意識的な所産であるとするならば、行基、良弁、実忠らの仏僧は、遠くインドのストゥーパにも想いを馳せていたことになる、と言えは言い過ぎだろうか。

D 盛土と石積

類例の稀な土を核としてもつ塔である頭塔が、当時のいかなる技術の基に構築されたかを考えるにあたって、瓦を葺いた木造部分や頂部の施設を除いた部分、すなわち盛土と石積からなる塔内部本体に関する考察も欠くことができないであろう。ここでは、そこに見られる特徴からその築造技術の系譜を探ることとする。

下層頭塔の 築造技術

まず、下層頭塔についてであるが、第277次調査の断ち割りで一部明らかになったように、黄褐色系統の粘質土を均等な厚さでほぼ水平に積み上げた土盛り部分の外側に石積を施している。また、トレンチが十分な広さを持たないため不確定であるが、下層頭塔の方が、上層頭塔に比べて、広い範囲にわたる水平盛土が観察される。

とはいえ、それは7世紀になって寺院や山城などで多々目にするようになる堅固な版築と同一視することができるであろうか。これらの堅固な版築とは、堰板などを用いて種類の異なる土を互層に積み上げるもので、おそらく細かな作業単位とその間の搗き固め作業を必要としたものであった。こうして積み上げられた土盛りは、それ自身で十分自立することのできる堅固さを持ち、いわゆる終末期古墳の墳丘や山城などに多用された。それは、6世紀まで日本にはほとんどなかった技術であり、寺院建築などとともに新たに大陸からもたらされたものといえる。結果として、古墳の外表面を石で被覆し、崩壊を防ぐ必要はなくなり葺石の消滅をもたらすことになった¹⁾。また、段築自身も同じ理由から必要ではなくなった。急傾斜での無段の墳丘は、シルクハット状の墳丘を出現させた。

こうした堅固な版築技術による土盛り施設の外側にさらに石を積む場合、それは基本的に強度の必要からではなく、装飾的意図が前面に出た行為であったとみなせる。寺院基壇がそうである。ただし、山城のようなとくに堅牢さとともに急な立ち上がりが要求される場合は別である。石垣を外に高くめぐらすことによって、いっそう防備を固めたのであろう。どちらにしても、外側に何らかの施設を加える場合、まず芯となる版築盛土本体を構築した後、その外側をあらためて一部削り取り、若干の裏込を挟みながら基壇化粧や石垣を加えている。

新来の技術 は駆使せず

これらの状況からすると、本体の盛土部分と同時に構築が進む下層頭塔はそうした新来の技術を駆使していないことは明かである。

上層頭塔の 築造技術

一方、上層頭塔はどうであろうか。第1段ではそうでもないが、第2段より上では下層頭塔残存部の外側に2段階にわけて、やはり水平積みの盛土をしている。いうまでもなく、これも上述の意味で本式の版築というわけにはいかない。そして、下層頭塔残存部から上層頭塔外面までの距離が遠いため2段階に分けて施工していると理解できる。その際、2段階目の盛土は、ある意味で石積の裏込としての様相をもつものともいえる。

注意されるのは、偶数段目の最終盛土が水平ではなく、若干内側に傾斜した層向を見せることである。外側ほど高く積み上げる工法は、古墳などでよく見られたものであり、上面を石で斜めに葺き上げることと関連して、前代の技術の継承を示すものと言える。

以上のように上層、下層ともに盛土の特徴は、厳密には古代寺院や山城に典型的にみられる

版築とは区別されるもので、在来の技術によるものであることがわかる。

この石を積み上げながら盛土を行う技術は、6世紀後半から盛んになる外護列石と呼ばれる墳丘外護施設の築造技術に通じることが指摘できる。外護列石は、従来の葺石の発展形態としてではなく、いまだその導入の様相ははっきりしないが、盛土技術の変化に対応して目立つようになったものである。最もそれと連動して発達したものが、横穴式石室である。盛土をほぼ完成させてから埋葬施設を築く前中期的な墓制と異なり、大型の石材を用いて石室を組み上げながら盛土を積むのにふさわしい工法と言え、墳丘を中心部から外に向かって完成させて行くものである。その類似はとくに上層頭塔の構築に看取されるが、下層頭塔にも何段階かの工程が未掘部分にあることを予測させる。おそらく、核となる部分を先に築いてから石積をとまなう工程に移っていったのであろう。

外護列石のもつもうひとつの重要な特徴として、それが完成された盛土内にしばしば隠れることが挙げられる。つまり、これは昨今事例が増えつつある土囊を使用した盛土工法と通じるものであり、外観的側面が二次的になっていることを示す。頭塔の石積は、もちろん外観を整える意味があるから、外護列石のそうした側面を投影させるわけにはいかないが、いま述べたように内部の盛土との関係において類似していることは確かである。頭塔の石積に見られる顕著な隙間はこうした外護列石にもままた確認できるものである。

最後に言及しておきたいのが、大阪府堺市の大野寺土塔である。そこにみられる技術はやはり土囊を盛土の区画やおさえに用い、間を充填するように築いていくもので、同じ技法が大阪府蔵塚古墳などで確認されている。これらの土囊の使用法と外護列石の関係はその使用方法や目的においてきわめて近い関係にあるとみてよい。

このように見てくれば、頭塔は古墳時代後期に達成された在来の盛土・石積技術を駆使して本体部分を構築したとあってよく、その点で土塔と一致しているのである。しかしながら、その仕上がった姿はまったく異なるものであり、今ここでそのことについては何ら言及するつもりはない。

注

- 1 ただし、水平な互層積に叩き締める版築でなくとも、その前段階としてすでに6世紀段階で細かく丹念に積み上げることによって、土盛の堅牢さは獲得されている。大阪府羽曳野市峯ヶ塚古墳では平均N値33.5が測定されており、また高槻市今城塚古墳では戦国時代の破壊の際に崩れることなく墳丘盛土が切り出されていることがわかった。こうして達成された強固な墳丘は、両者ともすでに斜面全面を覆うような葺石を採用しなくなっていることと相関するものと思われる。
- 2 外護列石自体は、葺石の見られない朝鮮半島の伽耶や新羅で早くから盛んになる構築技術であり、日本へのそれらの影響が考えられる。朝鮮半島では、堅穴系であっても地表部に埋葬施設を構築する意識が強いことも手伝って、埋葬施設を包むに足る盛土を、外護列石を回しながら石室と同時に築いているのである。

参考文献

- 高槻市教育委員会 1998『史跡・今城塚古墳』平成9年度・規模確認調査。
 羽曳野市教育委員会 1993『峯ヶ塚古墳概報』。
 大阪府教育委員会 1962「大野寺土塔の実測調査」『大阪府の文化財』。
 大阪府文化財調査研究センター 1998『蔵塚古墳』。

在来の技術
の継承

外護列石

土囊の使用

4 屋 瓦

A 下層の軒瓦と上層の軒瓦

上層築土出土瓦の由来

上層頭塔の上面あるいは周囲からは多量の瓦が出土した。これらのほとんどは上層所用とみて¹⁾良い。一方、上層頭塔の築土を断割調査すると、面積が狭小な割には、築土や石積の裏込から軒丸瓦・軒平瓦・熨斗瓦・面戸瓦が多く出土する。これらの瓦は特定の層に面的な広がりを持って分布する傾向があり、上層築造時にわざわざ携き込んだものであるが、問題はその由来である。上層頭塔に葺くために新たに現場に持ち込んだ瓦の中から破損品を選んで携き込んだものとするれば、これらの瓦と下層頭塔とは無関係ということになる。しかし第IV章2Aに記したように、下層基壇の上面からも瓦が出土し、その上を切り崩した下層の築土が覆っていることからみて、下層頭塔にも瓦を葺いていた可能性が強い。下層所用瓦の一部は転落したまま放置され、他は版築土に携き込んで再利用したのであろう。以下、下層頭塔も上層頭塔も瓦葺で、上層の築土中や石積の裏込から出土したものは、本来下層所用だったと考えて論を進める。

まず軒瓦に注目し、上層所用瓦が上層築造時にあらたに搬入したものなのか下層所用品の転用なのかを検討しよう。下層頭塔も上層頭塔も、所用軒瓦の型式は6235Mb-6732Faの組み合わせであって変りがない。しかし同一の範を用いても製作年代に差があるかも知れない。それを確定するには範傷進行の段階を明らかにし、下層所用品と上層所用品がそれぞれどの段階に当たるかを検討する必要がある。

範傷進行の段階

範傷進行の段階について東大寺・西大寺などの出土品を含めて設定した (Fig.41・42)。

6235Mについては、第1～10段階があり、第2段階までがMa、第3～10段階がMbである。第1段階は東大寺、第2段階は上人ヶ平遺跡にある。下層頭塔出土品は少ないが第5・6段階があり、上層では第3～10段階がすべて揃う。

6732Fについては、第1～9段階があり、第8段階までがFa、第9段階がFbである。頭塔では下層・上層ともに第2～8の各段階があって製作年代の区別はできない。また第1段階が平城京左京三条二坊一坪、第2段階が東大寺、第5段階が東大寺・西大寺、第7段階が西大寺、第9段階が東大寺・五領池東瓦窯にある。そのほか段階を絞り込めない個体として、東大寺では第1～2、第5～8、西大寺では第3～6、第4～8に属するものがある。

下層所用瓦を再利用

以上の結果から、下層頭塔により早い段階のものが供給された事実はなく、下層の所用瓦をそのまま上層に用い、上層築造時にあらたに搬入はしなかったと考えて良からう。以上は軒瓦についての所見だが、丸瓦・平瓦なども同様だったと考える。次項では、頭塔に6235Mb-6732Faが葺かれた意義を考えよう。

B 東大寺式軒瓦の変遷と供給

(1) 東大寺式軒瓦の変遷 (Fig.43)

東大寺式軒瓦6235-6732は、東大寺創建期の天平勝宝年間から奈良時代末まで製作され、きわめて同文異範品が多い。その分類と変遷を再検討してから、6235Mb-6732Faの位置付け²⁾

1		東大寺	6		上層頭塔 下層頭塔
2		上人ヶ平遺跡	7		上層頭塔
3		上層頭塔 東大寺	8		上層頭塔
4		上層頭塔 東大寺	9		上層頭塔
5		上層頭塔 東大寺 下層頭塔	10		上層頭塔

Fig.41 6235M 範復進行状況

他遺跡	頭塔での出土点数		左半の範傷進行	段階	右半の範傷進行	頭塔での出土点数		他遺跡
	上層	下層				下層	上層	
左京三条 二坊一坪	0			a 1				東大寺 西面大垣
東大寺 西面大垣	6	1		b 2		1		
	2	7		c 3				西大寺
	2	1		d 4		3	16	
東大寺 僧房北方 西大寺	7	1		e 5		1	9	
	1	1		6				
西大寺 東大寺南辺	4	2		7		1	7	西大寺
	15	11		f		1	5	
			6732Fa ↓ Fb	8				
	0			9	E		0	東大寺南辺 大仏殿西回廊 御領池東瓦窯

Fig.42 6732F 範傷進行状況

を考えよう。

6235の変遷

6235はA～K・M・O～Qがある。毛利光俊彦は、弁形や蓮子の数（1+6ないし1+5）、外区の珠文の数、外区と外縁を分かつ圏線の有無、外縁の形（傾斜縁Iないし直立縁）に基づいて、大きく3群に区分した。第1群（E・G）は弁が肉彫り風で盛り上がりがあり、外区と外縁を分かつ圏線があり、外縁が傾斜縁I。第2群（B・F・J・M）は外区と外縁を分かつ圏線が省略され、その痕跡が外縁下端に段として残る点が第1群と異なる。第3群（C・D・I・K）は外縁が直立縁で下端に段も残らない。

作範年代は第1群が最古で、Bを除く2群が続き、ともにⅢ期後半（天平勝宝年間）、BがⅣ期前半（天平宝字～天平神護年間）、C・IがⅣ期後半（神護景雲年間）、D・KがⅣ期後半かⅤ期（宝亀元年～）とした（毛利光 1991）。

このうち平城宮所用のB、西隆寺所用のC・Iを除く他について検討する。第1群のGは蓮弁の表現が平板で、弁と間弁の端部が連なり円弧状を呈すなどDに類似するので、E・F・J・Mより下る可能性があるが、Ⅳ期まで下げて良いか疑問である。第3群のKは外縁が直立縁Ⅱであり、6236では直立縁Ⅱが宝亀年間に出現するという所見（小沢 1993）に照らせばⅤ期に下る。Dは直立縁Ⅰだが内・外区間の界線がなく、やはりⅤ期に下るであろう。そうすると東大寺では、Ⅳ期には6235の作範が行われなかったことになる。替わりに、6235が単弁化した6234AがⅣ期後半に当てられている（毛利光 1991）。

6732の変遷

6732はA・C～O・Q～S・U～W・X・Zがある。花谷浩は、中心飾りや唐草の違いにより大きく「東大寺系」・「宮系」・「西大寺系」に区分した（花谷 1991）。以下、頭塔と東大寺で出土する東大寺系を問題とする。東大寺系の特徴は、唐草第1支葉が3～4葉からなり、唐草の巻き込みがもっとも強く、中心飾りの三葉が互いに分離し左右の葉が外反する点であり、D～J・S・V・Wがある。東大寺系は唐草の連続性や細部の特徴によってさらに細分して変化を追うことができる。花谷は岡本東三の変遷案（岡本 1976）に基き、E～G・J→D・H→I・S・V・Wの3段階に区分し、順にⅢ期後半、Ⅳ期後半、Ⅴ期以降とした（花谷 1991）。

以上の結果、東大寺所用の6235の諸種と6732のそれとの組み合わせは次のようになる。Ⅴ期後半：6235E・F・J・M・G-6732E・F・G・J。Ⅳ期後半：6234A-6732D・H。Ⅴ期：6235D・K-6732I・S・V・W。作範年代は順に、天平勝宝年間、神護景雲年間、宝亀元年～延暦3年となる。天平宝字～天平神護年間にはⅢ期後半の範を継続使用したと考えられる。

(2) 頭塔への供給事情

こうして見ると、6235M-6732Fの作範年代は天平勝宝年間である。頭塔が神護景雲元年創建であれば、6234A-6732D・Hが供給されていてもおかしくないが、実際は6235Mb-6732Faのみで新しい種をまったく含まない。本書では下層頭塔の創建年代を天平宝字4年頃と見ており、天平宝字年間は天平勝宝年間製作の範の継続使用期であるから、6234A-6732D・Hを含まなくても当然なのである。下層の瓦をそのまま上層に転用したと考えれば、より新しい瓦を含まぬ点は理解し易くなる。下層の創建を天平宝字4年とすると、『続日本紀』同年7月庚戌条によればその時点で東大寺の造営がほぼ終了していたことが推測できるので、①その時点で余っていたか備蓄していた瓦を下層頭塔の造営に回したか、②あらたに作って供給したかのどちらかであろう。その確定のためには、先にAで検討した6235M-6732Fの範傷の進行過程

備蓄瓦の利用か新造か

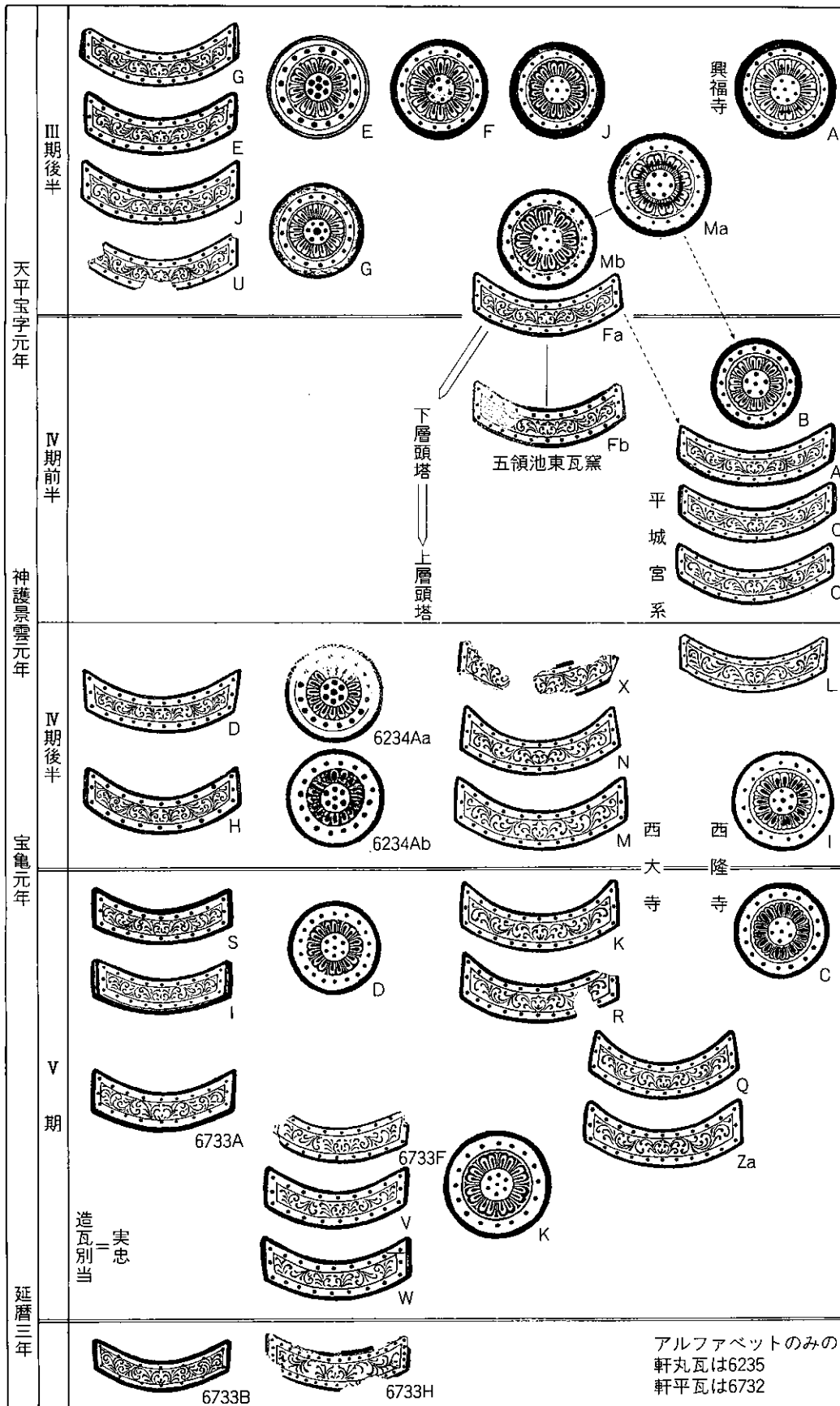


Fig.43 東大寺式軒瓦の変遷

に基づいて、東大寺や他の遺跡にどの段階のものが供給されたか調べねばならない。東大寺出土品のうち檀原考古学研究所による防災施設工事に伴う発掘調査の出土品は未発表で詳細不明であるので、奈文研の発掘調査による出土品などと比較した。

東大寺に
6235M b あり

6235Mについては、Maが東大寺、Mbが頭塔で出土するとされてきたが、東大寺出土品にも確実に6235M bがあり、6235M bが頭塔のみへの供給品ではないことが判明した。ただし、東大寺と頭塔とで供給品の製作時期に差があるかどうかは、東大寺での6235M bの出土数が少なく確定できなかった。

6732Fについては、第1～9段階があり、第8段階までがFa、第9段階がFbである。各段階の出土遺跡はFig.41に示した。段階は細かく分かれるが、天平宝字4～5年(760～761)造営の法華寺阿弥陀浄土院への供給瓦窯である京都府木津町五領池東瓦窯(有井 1997)ではFbが焼き口に用いられていたから、第9段階に至る範傷進行とFaからFbへの彫り直しは、天平宝字4年以前に終了していたと見るべきだろう。そうすると、6732Faの頭塔への供給が先の①②のどちらだったのかについては、天平宝字4年着工の下層頭塔に6732Fbが1点もないことから、着工時の新造ではなく多量に作ってストックしていたものを使用したと考えたい。

(3) 6235M b-6732Fa選定事情

6235にしろ6732にしろⅢ期後半に用いた範は数種類あるのに、頭塔の造営に6235M b-6732Faの組み合わせばかりを用いた理由、さらに、Ⅲ期後半作範の6732のうちで、Fだけが東大寺外であちこちから出る理由についても考えておく。

東大寺境内の既調査地に限られるという難はあるが、既報告のもので見る限り、Ⅲ期後半の6235のうちで、Maは製作数が多かったと推定できる。Ma段階ですでに範を相当使い込んでおり、Mbの使用期間中に急激に傷みが激しくなっているが用い続けたことから見れば、下層頭塔への供給品の製作時に6235E・F・Jの範はすでに使用不能になっていたのではないかと推定する。

いっぽう6732Faも、Ⅲ期後半作範の6732のうちで製作数が多かったと推定できるのだが、天平宝字4年以前にFbに彫り直されているにもかかわらず、ストック品とおぼしきFaが、天平宝字4年の下層頭塔のほか、天平宝字6・7年頃の新薬師寺の修理など東大寺の外での造東大寺司関係の工事のほか、神護景雲年間に造営が本格化した西大寺の造営にも使用されている。これは6732E・G・Jと異なるところであり、Fの使用開始がE・G・Jに比して遅かった、E・G・Jの範がFより先に使用不能になった、Faのストックが多かった、といった事情が考えられる。Fbさえ使用不可能になってからようやく神護景雲年間にD・Hが新造されたのであろう。西大寺でD・Hが出土していないのは、東大寺でD・Hを用い始める前に西大寺独自のM・Nが創出・多用されていたからであろう。

(4) 造東大寺司の造瓦技法

凸面押圧
技 法

軒平瓦については凸面押圧技法、すなわち凸面にタタキを施さずに押圧して粘土を締めてから縦へラケズリで仕上げる技法が、東大寺・西大寺系の製作技術と認定されている(小沢 1990、花谷 1991)。これ以外に造東大寺司造瓦所を特徴付ける製作技術があるだろうか。

第V章1A(1)で述べたように、頭塔出土の6235M b・6732Faともに特徴的な方法で製作されていた。6235M bでは、瓦当と丸瓦の接合のために、丸瓦広端部の凹面側を斜めに削って

片刃状とする。ただし結果的には効果が薄く、瓦当部と丸瓦部とがきれいに剥離してしまった個体が多い。この手法は、6235D・F・G・K・Ma・N・R、6234Aa・Abなどに見られ、Ⅲ期後半に造東大寺司の一部で生み出された工夫と推測されている(毛利光 1991)。

瓦当と丸瓦
の接合法

6732Faでは、箆を打ち込む前に、握り鯨1個分くらいの粘土を瓦当面に貼り付けて薄く伸ばす操作を数回繰り返して、箆を打ち込むための平滑なプラットフォームを形成するが、瓦当面が剥離した薄い破片が異常に多い。この手法を6235の他種で確認するには至っていないが、やはり造東大寺司で生み出された工夫と推定し、類例の探索に努めたい。

(5) 実忠が造った瓦

頭塔と直接関係はないが、実忠が宝亀11年(780)～延暦元年(782)の造瓦別当就任時に造った瓦はどれか検討しておく。これは早良親王禪師が「造東大寺司が最近作る瓦はきわめて粗悪で、葺く際に破損するものがやたらに多い」と指摘したのを受けて、実忠が諸所の土を捜し求め、山城国相楽郡福宏村の土で作る僧房に用いた19万枚の瓦は、硬くて破損しなかったという伝えである(『東大寺要録』所収「東大寺権別当実忠二十九ヶ条」)。毛利光は僧房北方の調査所見から得た組み合わせ、6234Aa、6235D・K-6732D・Hがそれに当たる可能性を述べつつ、それらをⅣ期後半(天平神護～神護景雲年間)に置く編年観から断定せず、他方で6732I・V・Wを宝亀11年～延暦元年の僧房所用とも述べている(毛利光 1991)。

造瓦別当
実 忠

実忠が造瓦に用いる土だけを変えたのか、箆も新造したのか定かでないが、Ⅴ期以降に下る種の中で焼成堅緻なものを捜そう。6733Aには軟弱、堅い、非常に堅いの3者がある。前2者には直線顎と曲線顎Ⅱがあり、後者は直線顎である。曲線顎Ⅱの個体が造東大寺司造瓦所の製品か検討の必要があるが、文様的には対葉花文基部が長くなってはいるものの、唐草の分解は6732V・W・6733Fほどではなく、Ⅴ期に収めて良いであろう。現状では西面大垣の調査でまとまって出土したのに対し、僧房北方では出ていない難点があるが、今後の調査に注目したい⁸⁾。平安に下る可能性が大きい6732V・Wは概して軟弱である。6732D・Hは瓦当文様からみて作箆年代をⅤ期後半まで下げにくいのは確かだが、僧房北方でまとまって出土し、堅い個体も多い。このうち6732Dには堅軟両者があり、堅い方が製作年代が新しければ、それを実忠の瓦に当てることができようが、観察した範囲では箆傷が進行していない個体は全般的に堅く、進行した個体には堅軟両者があり単純でない。これに対し6732Hは全般的に焼成が良い。

数種の候補

総じて6732Hと6733Aの堅いものは東大寺式では異常な堅さを有し、実忠の瓦にふさわしい。6732Hは古い箆を再利用し、6733Aは箆を新造したと考える。6732I・Sの文様は6732D・Hと6733Aの中間的様相を持つ。新薬師寺では宝亀11年の落雷被害後の修理に用いたようで、年代的には実忠の瓦の候補になるが、Iが総じて軟弱でSは実見の機会がなかった⁹⁾。

(6) 興福寺との関わり

これも頭塔と直接の関係はないが、興福寺境内から東大寺式が多く出土する事情に触れておく。それについては、東大寺造営時に興福寺から瓦の提供を受けた見返りとして、造東大寺司造瓦所の製品を興福寺に供給したとする説(岡本 1976)と、興福寺が造東大寺司からの依頼で瓦箆を貸与されて造った瓦の一部を、光明皇太后死去後の境内整備に用いたとみる説(藪中 1990)がある。前者であれば興福寺出土品の製作技法は造東大寺司の製品と区別できず、後者なら異なる可能性がある。

瓦の供給か
箆の貸与か

孝謙女帝が大仏殿院回廊の工事を聖武太上天皇の一周忌に間に合わせるよう厳命したのを受け、造東大寺司が興福寺に三万枚の造瓦を依頼したのが天平勝宝8歳(756)、光明皇太后死去の翌年興福寺東院内に西檢皮葺堂を建てたのが天平宝字5年(760)であるから、ともに東大寺では6235E・F・J・M・G—6732E・F・G・Jの使用期に当たる。

技法の差異

興福寺境内出土の東大寺式は、6235A・G・J、6732D・E・Fがあり、6234Ab、6733A・B・Dも加わる。多くは東大寺でも出土するが6235A、6733B・Dは今のところ出土例がない¹⁰⁾。興福寺出土の6235Aの瓦当と丸瓦の接合は、瓦当粘土を詰めた上に丸瓦を強く押しつけ気味に置き、丸瓦下端の凹凸両面に若干量の粘土をなでつけて瓦当と丸瓦を接着してから、接合粘土を多めに置く方法である。興福寺の6235J・6234Abでは6235Aと同じ方法のほかに瓦当裏面に指頭で深い溝を入れてから丸瓦を押し込む例もある。また興福寺の6235A・J・6234Abの丸瓦広端部は、断面形がコ字状を呈し、端面に刻み目を入れる例もある。

以上の特徴は、東大寺出土の6235F・G・K、6234Aaや頭塔出土の6235Mbが、瓦当粘土上に溝を設けず弱く押し気味に丸瓦を置くのと異なるし、丸瓦広端面を斜めに削って片刃状にするのとも異なる。6235J・6234Abは興福寺と東大寺の双方で出土し互いに造りが異なるから、興福寺出土品は興福寺瓦屋が範を借りて作った可能性が大きい。6235Aは今のところ東大寺では出土していないので、もともと興福寺瓦屋所有の範だったか、東大寺で未使用の範を興福寺が借用し結局返却しなかったかであろう。

6732D・E・Fについては東大寺出土品と差は見いだせない。6733Aには東大寺出土品に比して凸面のタテケズリが粗雑で、平瓦凹面部と側面との境に面取りするものがあるが、比較点数が少なく瓦屋の違いと断じがたい。6733B・Dは興福寺でしか出土せず、平瓦部と瓦当の厚さがあまり変わらず、瓦当面が平瓦凹面に対してやや鋭角をなすという特徴があるので、興福寺瓦屋の製品であろう。

荒池瓦窯

東大寺創建期の瓦屋の一つとして名高い荒池瓦窯については、所属が興福寺→東大寺(創建期～造東大寺司廃止)→興福寺(永承再建時)と推移したとする説(堀池 1964)と、終始興福寺瓦窯であって東大寺式が出土するのは造東大寺司から瓦範を貸与されて造ったにすぎないとする説(藪中 1990)とがあるが、荒池瓦窯出土の6235の丸瓦接合法を調べれば判る可能性がある。残念ながら今回は検討できなかったため、将来の課題としたい。

C 東大寺式以外の瓦の年代と供給

(1) 奈良時代の瓦

頭塔出土の奈良時代の瓦は6235Mb-6732Fa以外は、6012C-6572Jと6740Aに限られる。

6012C
6572J

6012C-6572Jについて。毛利光俊彦は重圈文軒丸瓦6010・6011・6012・6015・6018を外縁の形態から4群に区分し、他型式の外縁変遷観に照らして、第1群—傾斜縁Ⅱ—Ⅱ期後半初、第2群—やや厚手の傾斜縁Ⅰ—Ⅱ期後半、第3群—傾斜のきつい傾斜縁Ⅰ—Ⅱ期後半末かⅢ期、第4群—直立縁—Ⅳ期後半に比定した(毛利光 1991)。したがって6012Cは第2群でⅡ期後半となる。6572は顎形態で編年でき、Ⅰが段顎でⅡ期前半(千田 1999)、A～Dが直線顎でⅡ期後半、6572Eは曲線顎ⅡでⅢ期に下る(花谷 1991)。6572Jは直線顎ゆえⅡ期後半に置ける。したがって6012C-6572Jは、製作年代がⅡ期後半で頭塔創建より遡る。数は少ないながらも

複数あるので、6235Mb-6732Faを頭塔に供給した際に、供給元のストックの一部が紛れ込んだのだろう。そうであれば、6012C-6572Jが東大寺でも出土する可能性があるが、既報告資料中には6012B、6572A・Dしか見いだせない。今後の出土例に注意する必要がある。

6740Aは外区の珠文が粗く、中心飾りの左右に上から下に巻き込む小葉を置き、唐草主葉の先端からハ字状の小葉が派生する点で6763に近い。6763は唐草第2支葉を3葉構成とする点で西隆寺所用の6761A・6764Aと関係がある(花谷 1991)。6761A・6764Aは神護景雲年間(Ⅳ期後半)の製作であり(小沢 1993)、6763も同時期に置かれる(花谷 1991)。6740Aは6763・6761A・6764Aより唐草の分解が進んでおり後出的ではあるが、文様だけからどれほど時間差があるかは決め難く、Ⅳ期後半以降としておく。6740Aは上層W2wの裏込から出土しており、上層頭塔がⅣ期後半以降に下る証拠とみなせよう。

6740 A

(2) 平安・鎌倉時代の瓦

平安時代の瓦には東大寺仏餉屋336・7753A・興福寺食堂785・宝相華文軒丸瓦、鎌倉時代の瓦には興福寺食堂885がある。

東大寺仏餉屋336は瓦当文様からみて平安時代前期であろうが、それ以上は限定しがたい。

仏餉屋336

7753Aも平安時代前期である。中心飾りが7753Aと類似した双頭渦文である軒平瓦の年代観を参考にもう少し絞り込もう。平安京では西賀茂角社瓦窯の製品があるが、唐草の形状が7753Aと異なる。7753Aの唐草第1支葉が2葉で、先端が二股に分かれる楔形が第2支葉である点は、栗栖野瓦窯で生産されたC字対向形を中心飾りとする軒平瓦のほうに近い。西賀茂角社瓦窯・栗栖野瓦窯の該当する瓦はともに9世紀前半に置かれる(近藤 1980、上原 1994)。法隆寺では242D・B・A型式がある。唐草は4回反転で、第4単位がDは小字形の3葉、B・Aは1葉を方郭で囲む。第2支葉の形態がD・Bは長く伸びる1葉、Aは三角形の2葉である。いずれも貞観年間(859~877年)の修造瓦とされる(毛利光 1992)。興福寺には法隆寺242Bと類似し、669(奈文研 1959)あるいはⅢ平B2(藪中 1991)と呼ばれる軒平瓦がある。3回反転で第3単位主葉が巻かずに波状に伸びる。山崎信二は法隆寺242Aより後出と見て元慶2年(878)焼亡後の再建時所用とする(山崎 1980)。

7753 A

7753Aは法隆寺・興福寺の類品と比較すると、もっとも外側の第3単位の変形がないので、より年代が遡り9世紀前半に取まると考える。7753Aは荒池瓦窯から出土している(岩井 1937)。荒池瓦窯について、延暦8年(789)の造東大寺司廃止時にいったん廃絶したとする説もあるが(堀池 1964)、7753Aの製造が確かなら9世紀前半までは操業していたことになろう。

興福寺食堂785について、藪中五百樹は承暦2年(1078)~康和5年(1103)に当てる(藪中 1991)。興福寺食堂785の文様を左右反転させた瓦は興福寺・元興寺極楽坊・薬師寺にあり、山崎信二は平安後期Ⅱ(1080~1150)に置く(山崎 1987)。宝相華文軒丸瓦の内区の単位文様は宝相華唐草の一部を取り出したものだが、簡略化・形式化しており、11世紀中頃の延暦寺蔵宝相華時絵経箱に類似した文様がある。直立縁で上面が平坦であるが、焼成や側面調整の特徴も考慮して平安時代末とみておく。興福寺食堂855は「瓦当貼り付け」技法による。南都でのこの技法の採用開始は1250~1260年頃とされており(佐川 1995)、鎌倉後期前半に置ける。

興福寺食堂
785宝相華文
軒丸瓦興福寺食堂
855

頭塔出土の平安時代前期瓦は東大寺仏餉屋336・7753Aの2種に限られ数も少ない。7753Aは荒池瓦窯で同范品が出土しており、第VI章4B(6)で述べたように荒池瓦窯の帰属について

は問題があるが、東大寺仏餉屋336の出土を重視すれば、平安時代前期までは頭塔が東大寺の管轄下にあったと考えても良いであろう。しかし平安時代後期以降、少数ながら興福寺食堂785・885という興福寺所用瓦との同范品が出土するのは、第VI章5B(2)で述べるように、頭塔が興福寺領に組み込まれた事実を背景とするのであろう。

D 頭塔の屋根

(1) 上層所用瓦の分布 (Fig.44~46)

上層頭塔の斜面や周囲で出土した瓦は多くが、上層所用品とみられるが、その分布から屋根の復原に役立つ情報が得られるだろうか。石積や石敷の遺存状況は西北部の第199次調査区がもっとも良く、東北部の第181次調査区がそれに次ぐ。東南部の第277次調査区は江戸時代の破壊がひどく、E4w以下の築土がほとんど残っていない。

そこでまず西北部における瓦の分布をみよう。分布図は6235Mb・6732Fa・熨斗瓦に分けて示したが、傾向は同じであり、基壇上面、2段上面、4段上面、6段上面、すなわち広い平坦面に多い。これら偶数段の上面石敷は、外側の半分ほどが崩壊してもなお、奥側の半分が良好な状態で残っており、その平坦面に瓦をとどめやすい。しかし1・3・5・7段は幅が狭く、上面石敷はほとんど残っておらず、急な斜面を形成しているから、遺物は一つ下の偶数段上面まで転落してしまうのである。屋根や石積・石敷が緩んで崩壊すると斜面を滑り落ちて、最後には基壇上面に達する。基壇上面からの出土量をもっとも多いのは当然である。熨斗瓦は隅棟に載っていたはずだが、西北隅に多いということはなく軒瓦の分布と差がない。これも当然で、かりに隅棟が崩壊しても、熨斗瓦が斜め45°の棟方向に落ちて行くのではなく、西面斜面か北面斜面に沿って転落したことを示す。

東北部では基壇上面での出土量が西北部に比して少ない。とくに基壇土が大きく抉り込まれて破壊されている区間、すなわち基壇の東北隅から南へ10m、西へ5mに対応する上面に瓦が少ないのは、基壇の破壊時に上面のめぼしい遺物を持ち去ったからであろう。また2段上面石敷の残りが西北部に比して悪いことも、瓦が少ない原因となっている。東南部では築土がほとんど削平され、その上に堆積した土中からの出土であり、削平で形成された平坦面から満遍なく出土する。ここでは分布に意味を見いだす事はできない。

以上を総合して、北半部でも瓦の分布から屋根の復原に役立つ情報を得るのは困難である。

(2) 上層が何重か推定可能か

出土した瓦には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦・面戸瓦が揃うので、本瓦葺であったと推定できる。上層頭塔の石積は7段であるが、7段すべてに屋根を載せたのか奇数段のみであったのかが、上層頭塔の復原結果を大きく左右する。屋根に葺いた瓦の総量は屋根の面積に左右され、当然ながら5重と7重では大差があると推定できるから、瓦の遺存率が高ければ、瓦の出土量は何重かを決定する手がかりとなるだろう。

そこで調査区内の屋根面積を概算するが、東南部の第277次調査区は江戸時代の破壊により瓦の遺存量が北半部と異なる危険性があるので除外し、第181・199次調査区を中心とする北半部の屋根面積を概算した。7段すべてが瓦葺の場合、7重目は宝形造となり、いずれの段も軒の出がほとんどないと推定する。奇数段の場合、1・3・5・7の4重では塔として奇異であ



Fig.44 6235Mb分布图

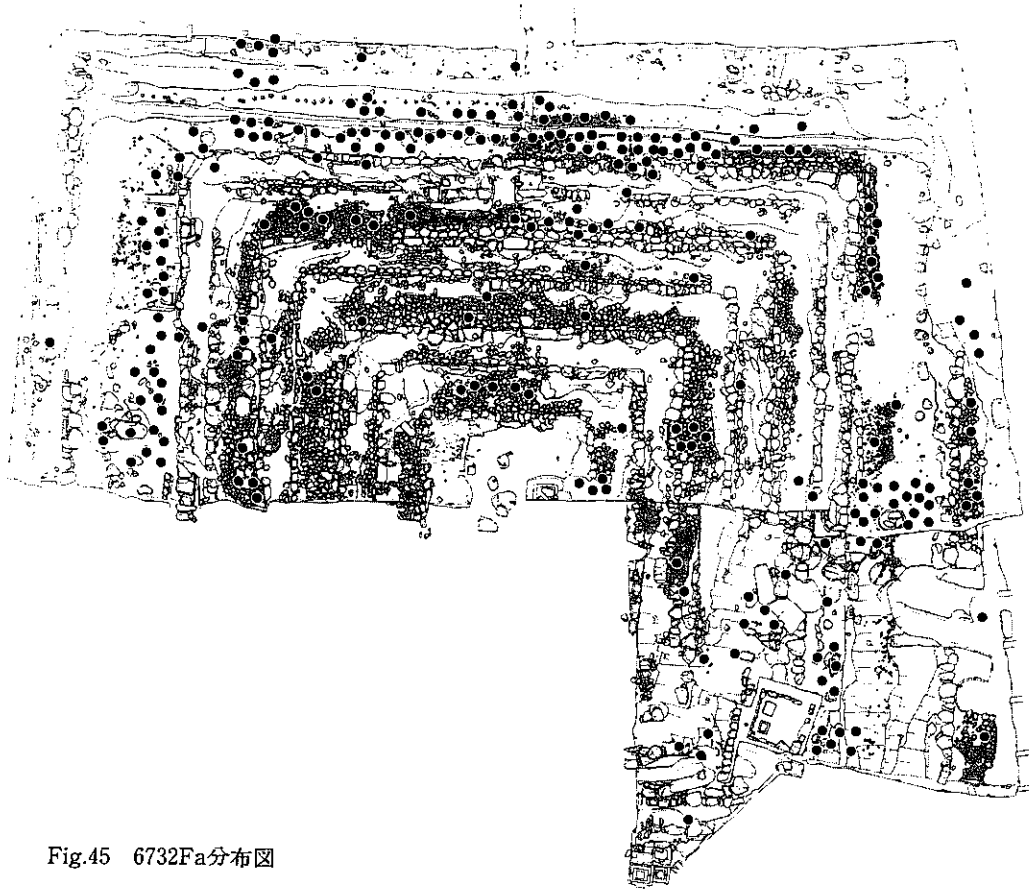


Fig.45 6732Fa分布图

るから、7段目の上に木造の小建物を載せた5重とし、5重目には若干の軒の出があると推定する。そうすると7重の場合は約330㎡、5重の場合は約170㎡となり、7重の方がほぼ2倍の量の瓦が必要となることが判明する。問題は瓦の遺存率である。実際に出土した量でどれほどの面積に葺けるのだろうか。

個体数の推定

瓦葺きで覆うことができる面積は、瓦各種の1個体当たりの平均法量と個体数と葺足が判明すれば計算が可能だ。しかし今のところ、軒瓦については破片数、丸・平瓦については破片数・総重量のみが判明している。これらから個体数と葺足が判明するであろうか。まず破片数をみると、6235M bが192点、6732 F aは273点で計465点、丸瓦が4823点、平瓦が11215点となるものの、小片も1点と数えており、十分な接合作業を経ていない現状では、個体数と直結させることができない。また隅数を数える方法もあるが実行できなかった。

こうした場合にもっとも有効なのが、かつて小沢毅が試みた方法（小沢 1993）、すなわち丸・平瓦の総重量と1個体平均重量から個体数を推定する方法であろう。とりわけ頭塔出土の瓦は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦ともに1種ずつに限定され法量のばらつきが少ないはずなので、この方法の信頼度が高いであろう。

まず第277次調査区出土分を除いた重量を調べると丸瓦が672.1kg、平瓦が1311.5kgで、重量比は1:1.95となる。完形に近い個体から復元的に求めた1個体の平均重量は、丸瓦が2.8kg、平瓦が4.1kgであるから、総重量をそれぞれの平均重量で割って完形品に換算すると（以下「重量比換算個体数」とする）、丸瓦は240点、平瓦は320点に相当する。

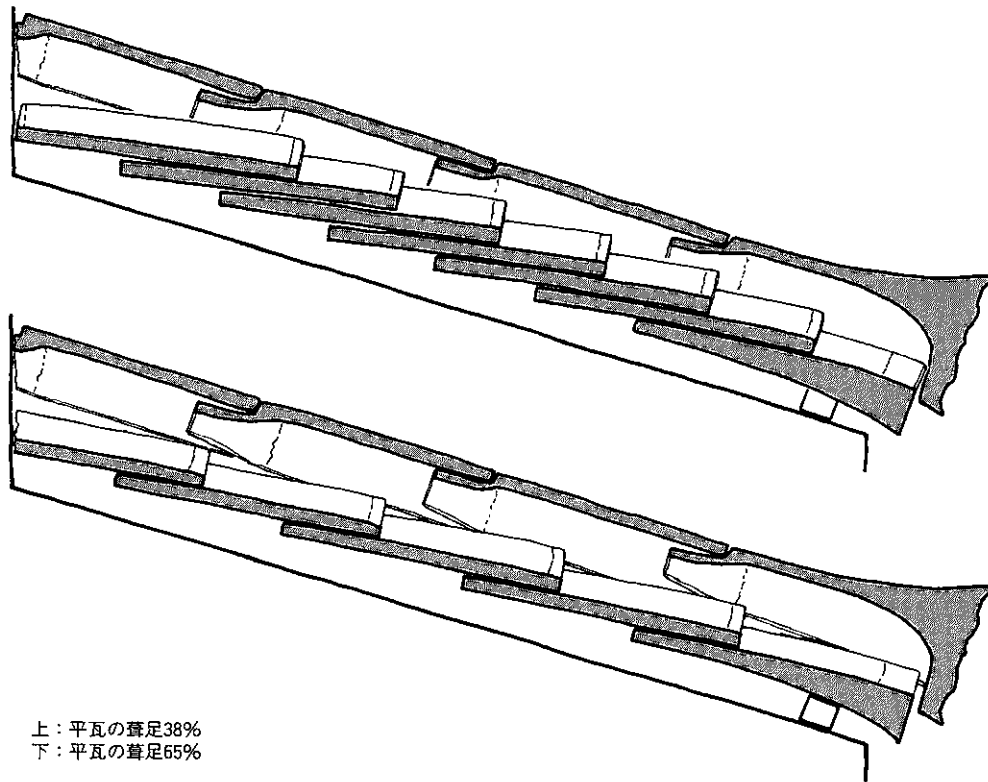
葺足の推定

この個体数で葺ける面積が問題であるが、それを計算するには葺足（非重複部分）の長さを推定する必要がある。丸瓦240点、平瓦320点で、両者の重量比換算個体数比は1:1.33となり、西隆寺での比1:2.60、平城宮第二次大極殿院での比1:2.51に比して、平瓦が半減していることが判明する。この原因が平瓦の葺足が長いための容易に推測できる。丸瓦と平瓦の個体数比が1:1.33であるから、丸瓦の葺足は平瓦の1.33倍と考えられる。丸瓦の葺足は胴部長と一致するが、頭塔出土の丸瓦の胴部平均長は32.4cmであるから、平瓦の葺足の平均は $32.4 \div 1.33 = 24.4\text{cm}$ となる。これは平瓦の平均長37.8cmの65% ($24.4 \div 37.8$) に相当する。西隆寺での葺足は37%、平城宮第二次大極殿院での葺足は38~40%ほどであるのに（小沢 1993）、頭塔ではなぜこのように葺足が長いのか。葺足を短くするのはもちろん雨漏りを防ぐためであるが、頭塔では瓦葺は形だけのもので、雨漏り対策の必要が皆無であるから、葺足を長くして平瓦の枚数を節約しても問題がない。丸瓦の葺足は長くできないから平瓦の方で節約を図ったのであろう。もっとも葺足をさらに長くすること、さらには100%とスタイル状に敷き詰めることも可能だが、やはり外観が通常の瓦葺屋根と大きく異なることには抵抗があったのだろう。

ここで明らかにした葺足をもとに、出土瓦で葺ける面積を計算しよう。頭塔第1段に葺くとした場合に葺き得る長さを求める。頭塔1段目の奥行きは約1.13mであるが、上面の傾斜を約30%とすると斜面長は約1.18mとなる。この長さには、胴部長32.4cmの丸瓦が4本収まるが、先頭は軒丸瓦であるから、丸瓦は3本となる。一方、長さ37.8cmの平瓦を葺足24.4cmで葺くとちょうど5枚収まるが、先頭は軒平瓦であるから、平瓦は4枚となる。つまり丸瓦は1列に3本、平瓦は1列に4枚ということになる。平瓦の葺足を32cmにすれば、さらに1枚減って1列当たり3枚となるが、そこまで減らしてはいない。頭塔北半部出土の丸瓦の重量比換算個体数



Fig.46 壁斗瓦分布図



上：平瓦の葺足38%
下：平瓦の葺足65%

Fig.47 瓦の葺足推定図

80列分遺存

は240点であるから、80列分に相当する(240÷3)。平瓦の重量比換算個体数は320点であるから、やはり80列分に相当し(320÷4)、見事に一致する。丸・平瓦ともに80列分が遺存したのである。N1wの東西長は24.8mであるから、平瓦の広端幅平均値28.5cmで割れば、87列収まることになる。つまり頭塔の北半部全体で出土した丸・平瓦の総量は1段目の1辺のみを葺くにも少し足りない程度の量なのである。遺存率がいかに低いかがわかる。残念ながら、瓦の出土量から屋根が何重かを推定することはできず、遺構の状況に立ち戻って検討するしか方法がない。しかしそれが明らかになったことも重要な成果と見なすべきであろう。

低い遺存率

付随的に、頭塔に特殊な面戸瓦を用いた理由を考察しておく。通常の木造多重建物で、最上層以外の屋根と壁が接する部分には、面戸瓦と熨斗瓦を用いて、棟積みを中軸線沿いに半裁したような形に葺き上げる。熨斗瓦の下に隠れる面戸瓦の尻は宙に浮いており、その下には葺き土が詰めてある。屋根と壁が接する部分は軒の下にあり直接雨に濡れることがないから、面戸瓦の裏、熨斗瓦の下に葺き土を詰めても問題がない。ところが頭塔の場合、屋根と石積が接する部分は直接雨に濡れるから、熨斗瓦の下に葺き土を詰めてもやがて流れ出してしまうだろう。面戸瓦の尻を浮かしておくと、葺き土の流失とともに尻が落ちて手前にはずれてしまう恐れがある。そこで面戸瓦の尻を浮かさずに置く工夫として、丸瓦の横断面形をそのまま残した半円弧状とし、両端の2箇所平瓦に接するようにしたのである。先にB(2)で頭塔所用の軒瓦は着工時の新造ではなく備蓄品と見なしたが、面戸瓦は頭塔用に特注したのかもしれない。ただしそれは、東大寺創建期の面戸瓦にこの種が存在するか否か判明しないと断定はできない。

特殊な面戸瓦

(3) 下層所用瓦

本章Aで述べたように、上層頭塔に葺いた瓦は下層所用瓦を再利用し、上層築造時にあらたに搬入はしなかったと考えている。そうであれば上層所用瓦の器種構成は下層所用瓦のそれを反映するから、下層も本瓦葺であろう。

下層も本瓦葺

下層頭塔から取り外した瓦は、上層の版築を行っている際には、近くに集積してあったと推定できるが、下層所用瓦を取り外した際に破損のため再利用不可となったものは、上層築造時に築土の中に搗き込んでしまうのが、もっとも簡便な処理法である。じっさい上層の築土や石積の裏込から出土した瓦にも、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦・面戸瓦をすべて含むので、本瓦葺だった事が裏付けられよう。

注

- 1 厳密には上層頭塔の上面や周囲で出土した瓦のすべてが上層所用ではない。後述するように、上層の築土には版築時に搗き込んだ瓦を含む。各段の石積の上半、石敷の半分ほどは崩落しているから、築土に搗き込んであった瓦も崩壊土とともに転落し、上層所用瓦と混在しているはずである。かりに上層所用品と下層所用品に顕著な違いがあれば認識できる筈なので、とりあえずは上層所用品として扱っておく。
- 2 奈良国立文化財研究所の平城宮軒瓦編年では、東大寺創建期の6235-6732の年代を天平勝宝元年～天平宝字元年とする(毛利光 1991)。これは東大寺の大仏殿院・西塔院など中心建物の造営開始を天平勝宝元年とする説に基づくが、6235-6732の上限を天平19年冬の東大寺発足前後まで遡上させる説(吉川 2000)もある。その根拠は、塔本歩廊の瓦葺が終わったと記す「造東大寺司考文案」断簡(大日古25-67)を天平勝宝元年度、すなわち天平20年8月～天平勝宝元年7月のものとし、西塔本体の造営開始がさらに遡ると推定する点にある。この問題は天平勝宝元年10月以降に造営開始したと推定できる大仏殿所用瓦と、西塔所用瓦の製作時期の差の有無を、範傷進行状況などから確定しなければ解決できまい。奈良県教委による西塔院の発掘調査で出土した瓦に

- は6235E・G・Mb、6732Fが4点あるものの、6732H・S・W、6733Fや平安初頭に下るものの方が多く(奈良県教委 1965)、創建瓦の様相の解明には本格的発掘調査が必要である。いずれにせよ頭塔に供給された6235Mb-6732Faの製作年代を論じる際には当面棚上げしておいて影響がない。
- 3 1978年調査南面大垣出土品、1979年調査僧房北方出土品、二月堂仏餉屋修理工事出土品、寺蔵品などにある。範傷進行第①～③段階があるが、いまだ例が少ない。
 - 4 法華寺阿弥陀浄土院の造営については、天平宝字3～4年とする福山敏男の説(福山 1943)が定説化していた。すなわち、「造金堂所解」を阿弥陀浄土院金堂の造営に関する文書とし、阿弥陀浄土院が光明皇太後の存命中に発願され、造営も開始されたものの、完成を見ぬまま皇太后が没し、阿弥陀浄土院が皇太后の一周忌の御齋会に用いられることになり、それに向けて造営が続行されることになったという説である。ところが黒田洋子の検討によって、「造金堂所解」は法華寺本体の金堂の造営に関わる史料であって、阿弥陀浄土院とは無関係と判明した。阿弥陀浄土院は皇太后の死後に一周忌御齋会のために計画された寺で、真の造営期間は、天平宝字4年6月から一周忌の挙行された翌5年6月までの間である(黒田 1992)。
 - 5 新薬師寺出土の6732Fを天平宝字6・7年頃の修理用とする説(毛利光 1991)に従うが、組みあう軒丸瓦を6236A・Eとする点は検討を要する。6236A・Eは直立縁IIであり、西隆寺の調査所見から宝亀年間に下ると判明している(小沢 1993)。新薬師寺は宝亀11年に落雷で被害を受けており、6236A・Eはその後の修理用であろう。これに組み合う軒平瓦は少量ながら出土例がある6732I・Sなどであろう。
 - 6 西大寺では6732Faが10点出土した(小沢 1990)。西大寺は天平神護元年以降に造営された寺で、神護景雲年間に造営が本格化した。6732Faの作範年代より10年以上遅れるが、西大寺寺域で出土する6732Faは、西大寺創建以前に当地にもたらされたのではなく、西大寺造営時に搬入されたと見て良い。問題は製作年代であるが、範傷進行からみて第3～8段階のものがあり、第1～8段階の頭塔と前後の関係にはないから、頭塔への供給品と同じ母集団に由来すると言える。
 - 7 天平宝字年間の平城宮改作で使用された6732A・C・Lのうち、東大寺創建期の6732にもっとも近いのはAであるが、Aの文様の細部は、E・F・G・JのうちでFをモデルとする可能性が大である。Aを作範する時にたまたまFを選んだのかも知れないが、Fしか残っていなかったのではないか。Fの範は一時期平城宮系瓦工房に貸し出されたようである。たとえば平城京左京三条二坊出土品(岸本 1995)は、表面の摩耗で調整手法は不明ながら、顎の幅2.0cmほどの曲線顎IIであるから、造東大寺司での製品ではなかろう。また京都府木津町五領池東瓦窯(有井 1997)出土の6732Fbも、顎は曲線顎IIで、凹面はタテナアの後ヨコナデを施し、凸面は縦縄タタキで顎をヨコナデするという平城宮系技法である。報告書では6732Fbが「東大寺所用瓦」であるから、法華寺の施設造営に造東大寺司が何らかの関係を有した可能性を考える。6732Fbは焚き口に用いられていたもので、五領池東瓦窯の製品かどうか判然としないが、製作地がどこであるにせよ、そこへは範のみが貸し出されたのであって、造東大寺司下の瓦工の製品ではない。なお、曲線顎IIの顎面の幅が5cmと異様に広く奈良時代末まで下るように見えるが、瓦窯の操業年代(天平宝字4・5年)からみて無理であろう。
- 範傷の進行段階は、平城京左京三条二坊出土品が第1段階、五領池東瓦窯出土品が第9段階であるから、範使用の初期と末期に平城宮系工房に貸し出され、いずれかの際に6732Aのモデルにされたと考える。
- また、天平宝字年間の平城宮改作で使用された6235Bは、東大寺創建期の6235E・F・G・J・Mのうち、弁の起伏が大きく弁端が高く反り上がる形状から見てMにもっとも近く、Mをモデルとする可能性が大である。Mの製品ないし範が平城宮系工房に持ち込まれたと推定できる。天平宝字年間の平城宮改作の所用瓦を製作した京都府木津町上人ヶ平遺跡からは6235Maが出土している(石井 1991)。上人ヶ平遺跡で成形した瓦は隣接する市坂瓦窯で焼成された。両遺跡では6235Bは出土していないが、瓦工が6235Maを手元に置いていたのは確かだ。両遺跡の操業時に6235Mの範は傷みがひどくMbに彫り直されていた可能性が大きいので、わざわざ綺麗なMaの製品を選んでモデルにしたのであろうか。そっくり模倣するのを嫌って、珠文を16でなく17に、蓮子を1+6でなく1+5に変えている。
- 8 東大寺僧房北方の調査区は北面小子房のすぐ北側であるが、南北17m、東西7mの小範囲にすぎない。僧房所用瓦の型式について将来の本格的調査の結果から再考すべきは当然である。
 - 9 5に同じ。
 - 10 1970年代までは東大寺で6235Aが出土すると考えられていたが、現在では逆の認識に変わっている。その事情を述べておく。

平城京出土瓦の全般的時期区分を提示した『基準資料Ⅱ瓦編2』解説では、東大寺には6235 A-6732G・Hがあり、西塔院・金堂・南面回廊で出土したと述べる(奈文研 1975)。岡本東三が東大寺出土の6235として示した7種の拓本は(岡本 1976)、今日の種番号と照合するとA・D・E・F・G・H・Jであり、明らかにAが含まれる。現行の標識資料の6235Aは興福寺出土品であるが、岡本が使用した『南都七大寺古瓦紋様集』、『古瓦集英』、奈文研調査による出土品、瓦又所蔵品の中に、岡本は6235Aを認めたわけである。それがどの個体であるかは、A以外の種を消去していけば、ほぼ特定できる。

ところが、ある時点から6235Aは東大寺から出土しないという認識に変わった。毛利光が示した東大寺・平城宮・西隆寺出土の6235の主要種についての変遷観の中にAはない(毛利光 1991)。奈文研の最新版軒瓦型式一覧でも付表の出土地欄の6235Aの所には「興福寺」とのみ書いてあり、東大寺では出土例がないということを暗示している(奈文研 1996)。

かつて東大寺出土のAとされた個体が何に変わったかが問題だが、おそらくMである。Mがいつ設定されたのか記録がないので定かでないが、頭塔の第114次調査(1978年)で多量に出土した後である。1980年代の毛利光・花谷による型式番号再検討の際に、上人ヶ平遺跡の調査(1984~89年)で出土した彫り直しと範傷の少ない個体をMaとし、頭塔出土品をMbに変えたようだ。Ma設定後に、それまでAと認定していた個体を見直すと、標識のAとは異なることが判明したので、Maと認定し直したという事情であろう。また榎原考古学研究所による東大寺調査の出土品も、新設定のMaと認定されて今日に至っている。このような過程の中で、Aは興福寺所用品という認識が定着したようである。

では、現在ではMとする個体がかつてはAと認定した事情は何か。6235の中でA・F・J・Mは類似度が高い。実物があればやや小振りで弁端が下がるJは区別し易いが、写真や拓本しか手元のない個体の種認定を行うばあい、中房の蓮子と蓮弁との位置関係や個々の蓮弁の形状の微妙な歪みで識別するしかない。それらの点でFとM・Aは区別できるが、MとAは酷似し区別が困難だ。6235の中では興福寺出土品を標識にAが最初に設定されていたので、それとの比較で『南都七大寺古瓦紋様集』、『古瓦集英』、瓦又所蔵品の中にAが認定されていたようである。奈文研調査による東大寺の出土品中には、AはなくMaが2点あるのだがAと混同されていた。AとMの違いは、頭塔で多量のMが出土するまで認識されなかったのだ。

参考文献

- 有井広幸 1997 「五領池東瓦窯跡群」『京都府遺跡調査概報』第79冊。
 石井清司 1991 「瓦塼類」『京都府遺跡調査報告書』第15冊。
 岩井孝次 1937 『古瓦集英』。
 上原真人 1994 「前期の瓦」『平安京提要』。
 岡本東三 1976 「東大寺式軒瓦について—造東大寺司を背景として—」『古代研究』9。
 小沢 毅 1990 「瓦塼」・「西大寺の創建および復興期の瓦」『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』。
 小沢 毅 1993 「瓦塼」・「西隆寺創建期の軒瓦」『西隆寺発掘調査報告書』。
 岸本直文 1995 「瓦塼類」『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』。
 黒田洋子 1992 「正倉院文書の研究—天平宝字年間の表裏関係から見た伝来の契機—」『お茶の水史学』36。
 近藤喬一 1980 「平安京古瓦概説」『平安京古瓦図録』。
 佐川正敏 1995 「鎌倉時代の軒平瓦の編年研究—よみがえる中世の瓦—」『文化財論叢Ⅱ』。
 千田剛道 1999 「平城京重郭文軒平瓦小考」『瓦衣千年 森郁夫先生還暦記念論文集』。
 奈文研 1959 『興福寺食堂発掘調査報告』。
 奈文研 1975 『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅱ』瓦編2解説。
 花谷 浩 1991 「軒平瓦の変遷」『平城宮発掘調査報告』XII。
 福山敏男 1943 「奈良時代に於ける法華寺の造営」『日本建築史の研究』。
 堀池春峰 1964 「造東大寺瓦屋と興福寺瓦窯址」『日本歴史』197。
 毛利光俊彦 1991 「平城宮・京出土軒瓦編年の再検討」『平城宮発掘調査報告』XII。
 毛利光俊彦 1992 「平安時代の瓦」『平安時代における東西伽藍の修造』『法隆寺の至宝』第15巻。
 藪中五百樹 1990 「奈良時代に於ける興福寺の造営と瓦」『南都佛教』64。
 藪中五百樹 1991 「平安時代に於ける興福寺の造営と瓦」『仏教芸術』194。
 山崎信二 1980 「大和における平安時代の瓦生産」『奈良国立文化財研究所研究論集』VI。
 山崎信二 1987 「屋瓦」『薬師寺発掘調査報告』。
 吉川真司 2000 「東大寺の古層—東大寺丸山西遺跡考—」『南都佛教』78。

5 文献史料からみた頭塔

A 創建期の諸問題

(1) 通説と課題

頭塔の創建については、神護景雲元年（767）に東大寺僧実忠が良弁の命により国家のために造ったというのが通説である（板橋1929、福山1932、足立1944、堀池1964）。その根拠となったのは次の諸史料である。

『東大寺要録』七、東大寺権別当実忠二十九箇条事

「一、堤作池一処〈在東大寺南春日谷。以去神護元年所造也。〉

一、奉造立塔一基〈在新薬師寺西野。以去景雲元年所造進也。〉

右二種事、承僧正命、奉為国家、奉造如前。」

この「塔」がすなわち『東大寺要録』六の

「新薬師寺…実忠和尚西野建石塔為東大寺別院。」

にみえる「石塔」であり、『東大寺別当次第』大僧都良恵の項の

「神護景雲元年、実忠和尚依僧正命、御寺朱雀之末、作土塔。」

にみえる「土塔」と同じもの、つまり現在残っている頭塔にはかならないと考えられているの **土塔=頭塔**
である。

以上の諸史料から考えて、頭塔は神護景雲元年に実忠の関与によって最終的に完成した、という点自体は動かし難いことであり、本書でもこの点に限っては異論をさしはさむ必要はないと考える。

ところが、これまでの頭塔の発掘調査の知見により、上層、下層の塔の存在が明らかになり、造営に少なくとも二つの段階があったことが判明し、また、下層造営の際に破壊された横穴式石室を有する古墳が検出され、下層頭塔の造営過程の一端が明らかになった。この知見を踏まえ、第一段階の下層頭塔の造営開始が従来考えていたよりも古く遡ることを念頭に置きつつ、文献史料を見直す必要がある。

まず最初に頭塔造営開始の上限をおさえておこう。後に詳しく検討を加えることとするが、天平勝宝8歳（756）に描かれた「東大寺山堺四至図」をみても頭塔は記されていない。もちろん、描かれていないからといって当時存在しなかったということにはならない。しかしながら、後述するように東大寺の寺域境界線との関係を見ると、仮に頭塔が存在したとすると、その位置は寺域の外にあたってしまうことになるので、天平勝宝8歳の時点では頭塔が存在しなかったとみるべきである。そうすると、頭塔の造営開始はこれ以降、天平宝字年間前後の可能性が高いということになる。

**造営開始
の 上 限**

(2) 天平宝字4年（760）造南寺所解

正倉院文書統修22に次の文書が収められている¹⁾。

「造南寺所解」

造南寺所解 申請奉写仏頂経用度物事

請

紙十四張〈内訳省略〉

錢百六十文〈内訳省略〉

布清衣一領 袴一腰〈経師料〉

香二両〈小〉

右当東大寺南朱雀路壊平為墓鬼

靈奉写仏頂経一卷用度料所請如件以解

天平宝字四年三月九日 舎人玉手「道足」(自署)

史生麻柄「全万呂」(自署)

これは東大寺の南方の地域について述べた文書であり、頭塔の所在する位置と関わりがある可能性がある。この文書については福山敏男、堀池春峰が既に論及しているが（福山1932、堀池1948）、両者とも敢えて頭塔と結び付けてはいない。神護景雲元年の実忠による頭塔造営の記事より7年も前のものであるからとも想像されるが、頭塔造営がさらにさかのぼる可能性が出てきた現在、一度先行研究を離れて考える必要がある。

墓の破壊

まず、内容を見ると、これは東大寺南の朱雀路にあたる墓を壊すにあたって、その墓の鬼霊の供養のための写経料物を申請するために造南寺所が出した解である。ところで、この墓を壊した工事は何の造営に伴うものであろうか。「当東大寺南朱雀路壊平」との表現は、「東大寺の南の朱雀路の壊平に当たりて」と訓んで、路の造営に関わるとみる可能性もある。しかし、壊すのは墓であって「路の壊平」と訓むのは不自然であるし、東大寺（金鐘寺）の朱雀路そのものは既に『続日本紀』天平16年（744）12月丙申条にみえるので、別の造営を考えた方がよかろう。何よりも解を出した主体が「造南寺所」であることを念頭に置けば、この工事は南寺という寺院の施設に関わる造営と見なければならぬ。「当東大寺南朱雀路壊平……」は「東大寺の南の朱雀路に当たりて壊平する墓の鬼霊のために」と訓んで、「東大寺朱雀路の南端に当たるところで」南寺に関わる造営工事がなされたものと解してよかろう。

造南寺所は造東大寺司の管下

では、ここに見える「造南寺所」とはなんであろうか。堀池の指摘の通り、東大寺の南で造営工事をしていることから、この「南寺」は南大寺すなわち大安寺や、北寺（興福寺）に対する南寺（元興寺）のことではありえない。正倉院文書として解の正文が伝来したことからみて、造南寺所は造東大寺司の下部組織とみてよかろう。署名している官人をみても玉手道足は、造東大寺司及び造石山院所、造香山薬師所など、麻柄全万呂は造東大寺司及び造香山薬師所など、造東大寺司及びその管下の造営組織の職員を歴任していることもこの推定を支える。以上のことから考えて、この時期、造東大寺司の管下で「南寺」の施設が造営されつつあったことが明らかとなった。

ちなみに、正倉院文書の中で他の「南寺」関係史料をあたると、天平宝字3年（759）□工所解²⁾がある。これは□工所が、所属している仕丁の月糧を申請している解であるが、その中に「南寺」に派遣された仕丁がみえている。この史料も同時期に行われていた「南寺」造営に関わるものであると推定できるが、造南寺所解にみえる工事と一連のものか否かは確言できない。

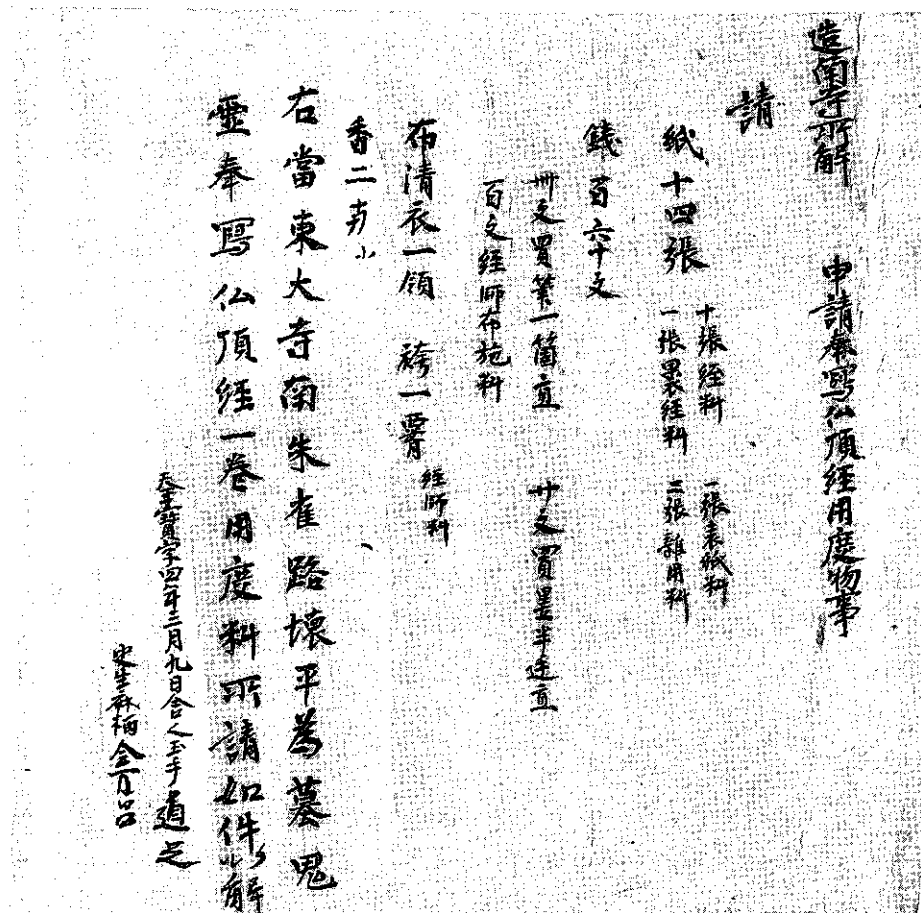


Fig.48 正倉院宝物「造南寺所解」

なお、このほか、天平感宝元年(749)経師等布施充帳³⁾に、布施の銭は南寺から来たということがみえ、天平勝宝3年(751)頃のものと思われる造東大寺司政所牒⁴⁾の草の宛所として「南寺鎮御房」がみえる。しかしこれは大安寺である可能性が捨てきれず、天平宝字年間に造営を行っていた「南寺」とは別であるとみた方がよいので除外して考えるべきであろう。

(3) 造南寺所による工事の位置と下層頭塔

さて、この「造南寺所解」にみえる造営工事が行われていた場所はどこであろうか。東大寺南方で工事を行っているのであるが、同じ方角にある頭塔との関係はないのだろうか。

堀池春峰は「南寺」の位置を東大寺南大門の南、吉城川の北に求め、「南寺」を西南院に当てている(堀池1948)。吉城川より南には、天平勝宝8歳(756)「東大寺山堺四至図」によれば興福寺領の松林(「山階寺東松林廿七町」)が広がっているため、その北に比定したものであろう。しかしながら、東大寺朱雀路を吉城川の北に限定することは疑問であり、また、「南寺」を東大寺南大門の内側の西南院に当てることも従いがたい。

「南寺」は西南院にあらず

「東大寺の南の朱雀路」は遺構の上で確認されておらず、どの位置を通るかは問題であるが、菩提川を隔てた地域、すなわち現在頭塔が存在する丘陵部は興福寺領から外れており、ここに推定することも可能である。後世の史料であるが、『東大寺別当次第』に頭塔の位置が「御寺朱雀之末」と示されていることからみて、頭塔は東大寺の「朱雀」にあるという認識があったことは間違いない。「東大寺南の朱雀路」にあたって「造南寺所」が工事をしていった場所は頭

工事の位置は頭塔周辺に相当

塔の位置にあたる、つまり逆に言えば「南寺」とは頭塔を構成要素とする寺院であったとみて不自然ではないのである。⁵⁾

造南寺所破壊の墓は頭塔下古墳か

さらに、平城宮第277次調査で得られた知見がこの可能性を強く示唆している。つまり、下層頭塔の造営の際に破壊された古墳の存在が明らかになり、「造南寺所解」から窺える造営工事のありさまと一致するのである。

もちろん、「造南寺所解」にみえる墓を破壊しつつ行った工事が下層頭塔そのものの造営に伴うものではなく、周辺施設の造営に伴う可能性を捨て去ることはできない。実際、現在の菩提川流域にはいくつかの古墳があることが確認されており、頭塔下古墳以外にも一連の造営の際に破壊されたものがあるかもしれない。第V章4Aで指摘するように、頭塔の発掘調査で塔身や基壇の積み土から出土した古墳時代の土器には、複数の古墳の副葬品に由来するものが含まれているとみられ、頭塔を含む周辺の造営工事で複数の古墳が破壊されたことは間違いない。しかしながら、天平宝字年間(729-749)に造南寺所が現在頭塔のある位置の周辺で造営工事を行っていたことは動かない。現在知りうる限りの知見を統合的に考えるならば、「造南寺所解」にみえる工事が下層頭塔そのものの造営にあたる可能性が最も高いと考えられる。

下層頭塔の造営は天平宝字年間

以上のことから、下層頭塔の造営が天平宝字年間に遡り、通説よりも早くから造営がなされていたことが推定できる。

(4) 新薬師寺と頭塔

南寺 = 新薬師寺か

さて、ここで前項までは棚上げにしていた問題、つまり「南寺」とは何かということであらためて考えてみたい。関係史料は2点に限られるのであり、もちろん今まで知られていない寺院である可能性はある。しかし、頭塔付近でそのような寺院を考えることは困難である。むしろ、東大寺南方にある新薬師寺との関係を考えることも可能なのではないか。⁶⁾

そもそも頭塔自体は「東大寺別院」であり、その位置も東大寺の「朱雀之末」と表記され、東大寺の付属施設であることは間違いない。しかし、その一方で、『東大寺要録』6では頭塔は東大寺の末寺である新薬師寺の項の中に記され、位置も「新薬師寺西野」と表現されることもあり、東大寺の下にある新薬師寺との関連で言及されることも多い。

とするならば、頭塔と新薬師寺の関係を考える必要があろう。この観点から新薬師寺関係史料を見直すと、興味深いことがわかる。

造南寺所と造香山薬師寺所

正倉院文書中の一連の造東大寺司告朔解の中に造香山薬師寺所の項がある。この中の別当の記載を見ると、天平宝字6年(762)3月1日のもの⁷⁾と、同年4月1日のもの⁸⁾が主典正六位上弥努連奥麻呂、史生従七位下麻柄勝全麻呂であり、天平宝字7年1月3日のもの⁹⁾が史生従七位下麻柄勝全麻呂と左大舎人正七位下玉手朝臣道足である。つまり、天平宝字4年3月9日の造南寺所解の署名者である二人のうち、麻柄全麻呂は全てについてみえ、玉手道足は7年正月のものにみえるのである。従って、造香山薬師寺所と、造南寺所は同一のものである可能性は高く、少なくとも人的に密接に関連した組織であることは確実である。

下層頭塔は造香山薬師寺所が造営

もちろん、そうであるからといって造南寺所解にみえる造営工事は、その位置の記載から考えて新薬師寺の中心伽藍に関わるものである可能性は低く、頭塔もしくはそのすぐ周辺の工事に関わるとみるべきことは変わらない。ただ、下層頭塔は造東大寺司管下の造南寺所すなわち造香山薬師寺所によって造営されたということになるのである。

推測を重ねることになったが、この想定は現在のところ得られている知見を全て矛盾なく説明できるものと考えられる。

(5) 上層頭塔と実忠

『東大寺要録』7、東大寺権別当実忠二十九箇条によれば、頭塔造営に関わった人物として実忠が挙げられる。しかし、実忠が造東大寺司に関与して東大寺の造営に携わるようになったのは天平宝字4年(760)正月からである。ほぼ同じ時期に開始された下層頭塔の造営に、実忠は関与していたのであろうか。この頃は、例えば東大寺大仏の光背が未完成であり、実忠の指揮で初めて完成するようなありさまであり、彼は東大寺中心部分の造営に忙殺されていた可能性が高い。そもそもそのために実忠が登用されたのであろうから、彼が造東大寺司に奉仕するようになった直後から頭塔のような周辺施設の造営に深く関わったとみるのはやや不自然であろう。下層頭塔の造営開始時点では実忠はこれに関わっておらず、ある時点から関与するようになったのではなかろうか。さらに推測をするならば、仮に先に述べた天平宝字3年□工所解にみえる「南寺」の造営も新薬師寺本体ではなく頭塔に関わるものであるとすると、実忠の関与以前から頭塔の造営が始まっていたということになる。

下層頭塔造営に実忠は関与せず

この視点から発掘調査の知見をふりかえてみると、下層頭塔の塔身が破壊され、全く異なった姿の上層頭塔に造り変えられたことがわかっている。実忠はこの改造にこそ関係していた可能性が強かろう。

実忠は上層頭塔に関与

また、他の実忠の事績をみても、別の人物が手がけて不都合が生じた事業を引き継いで完成させている例が多く、下層頭塔についても石積みが崩壊するなどの根本的な欠陥が生じたので、実忠が改造せざるを得なくなったとみることができる。

さて、「実忠二十九箇条」には「以去景雲元年所造進也」とあって、「造進」の表現からみると神護景雲元年は上層頭塔の竣工時点を示すと解される。そうであるならば着工はそれよりもやや遡るはずである。そこで上層頭塔着工の契機を文献史学の側、主として政治的な面から考えてみたい。

上層頭塔の竣工は神護景雲元年

堀池春峰は、頭塔の造営の意義について、天平宝字8年(764)の恵美押勝の後、国家の安泰を願って造られたものとみている。実忠は押勝の乱に際し、孝謙上皇方にあつて、軍馬の葛を献上するなどの功績があり、乱後の人心の收拾にも積極的だったのであろう(堀池1964)。

恵美押勝の乱と実忠

この説は、頭塔の創建の意義について述べたものであり、下層頭塔の造営が押勝の乱より遡ることになると、若干の修正を要する。しかし、実忠の関与の経緯自体については傾聴すべき説であると考えられ、VI 2 B(1)で指摘するような構造上の不具合をはらんでいた下層頭塔が、押勝の乱の平定を契機に、実忠の関与の下、上層頭塔に改造された可能性は高い。

(6) 東大寺南方における頭塔立地の意義

頭塔造営の目的は、上層頭塔については『東大寺要録』7に「国家のため」とみえており、これは具体的には堀池説のように恵美押勝乱後の国家安泰のためであるとみて、おそらく間違いない。下層頭塔に関しては文献上の情報が少なく、この造営の意義づけについて明らかにすることは容易でない。下層頭塔の造営が開始された時点前後の状況を『続日本紀』でみると、天平宝字4年(760)3月甲戌条によれば、これ以前から光明皇太后が不予となっていたことがわかる。第VI章6Dで指摘するように、下層頭塔は皇太后の病氣平癒のために造営された可

光明皇太后の不予と下層頭塔

性能があるが、本項では、なぜ東大寺南方のこの地が選ばれたのか、逆にこの地に頭塔を造る意義は何だったのか、という問題について考察することにしたい。

実忠による
池造営は
菩提川か

これを考える手がかりとなるのは、『東大寺要録』7、実忠の事績を列挙した29カ条である。ここで頭塔の造営と並んで載せられているのは、天平神護元年(765)に頭塔と同じく良弁の命により東大寺の南の春日谷に堤・池を造ったという記事である。この工事を行った位置は、可能性として東大寺南大門南の吉城川の谷と、さらに興福寺領を隔てて南にある菩提川の谷が考えられる。しかし、現地形から考えて、堤を築いて池を造るには後者のほうがふさわしいと推定される。¹¹⁾

良弁・実忠
による東大
寺南方開発

そうであるとすれば、この工事の位置も頭塔に近接しているのである。『東大寺要録』に、実忠の一連の事業として記されていることからすれば、菩提川からその南の丘陵全体の開発という視点から頭塔の造営を考える必要がある。もちろん、実忠以前から頭塔の造営は行われていたのであって、彼一人の事績に帰するわけにはいかない。むしろ実忠は工事の最終段階で実務的なことを果たしたのであって、これらの事業を主導したのは良弁である。そこで、良弁の命により実忠が集大成した一連の造営全体という枠組みで考えることにする。

そもそも、東大寺大仏殿の南の方角は開発の遅れた地区であった。東大寺正門は平城宮南辺からのびる二条大路に面した西大門であったのに対し、南大門は、中門との間に小丘があって往来に不便であるという理由もあり、あまり重視されていなかった。また、天平勝宝8歳(756)の「東大寺山界四至図」をみると、先述したように吉城川の南には興福寺領松林が広がっており、東大寺にとってはこれより先は手の届きにくい地区であったと思われる。

更に先に述べたように、同図をみると頭塔の記載がないことが注意される。天平宝字4年頃に造営が開始されたとみられる頭塔が天平勝宝8歳の同図に記載されないのは当然であるが、問題は後に頭塔が造営されることになる位置である。同図における頭塔の位置比定については吉川真司の見解がある(吉川1996)。吉川は図に引かれた朱方画線の北から17本目の東西線(すなわち四条大路の延長線)と西から3本目の南北線の交点に比定するが、従うべきであろう。¹²⁾ また、吉川によれば、この辺りの東大寺の寺域境界線は新薬師寺の南から西を回る道路にあたりと考えられるが、それならば頭塔の比定位置は件の寺域を画する道路の西側ということになる。つまり、天平宝字年間に頭塔が造営されることになる位置は、天平勝宝8歳の時点では東大寺の寺域の外側にあたるのである。

東大寺
寺域の拡大

このことは、天平宝字年間に、東大寺の南方において、寺域の外部をも取り込む形で頭塔を造営し、事実上寺域を拡大しようとしたことを示している。そして、良弁の主導による頭塔を含む東大寺南方における造営事業は、天平宝字8年(764)の恵美押勝の乱をはさみ、天平神護元年(765)の春日谷の堤・池の築造と合わせ、実忠により一応の完成を迎えたのである。

以上のように考えるならば、頭塔の造営はこの地域における東大寺寺域拡大を伴う一連の開発事業の中で中核的な位置づけにあったみなすことができる。

B その後の頭塔

奈良時代末
の火災

(1) 平安時代初頭の頭塔

発掘調査の知見によれば、上層頭塔は完成後、奈良時代の末に相輪部分が焼失する。宝亀11

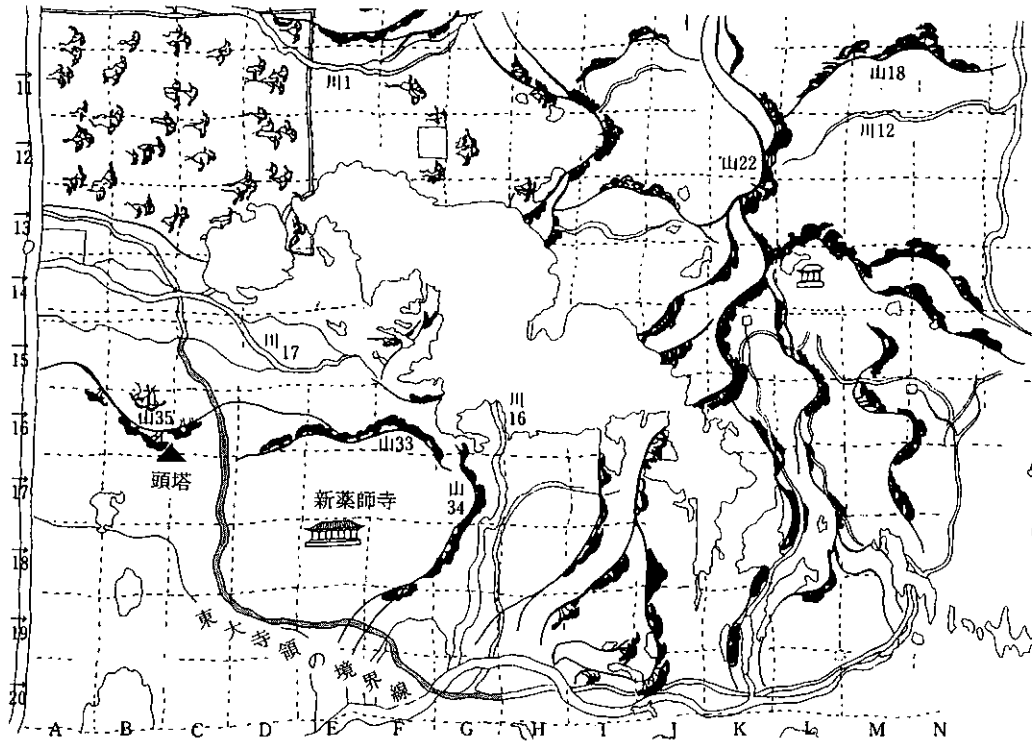


Fig. 49 「東大寺山界四至図」南半部 (吉川1996, 一部加筆)

年(780)正月には新薬師寺西塔をはじめとして多くの寺院の堂塔が雷火で焼失したが、これ¹³⁾と近い時期に同様の雷火で焼失したものであろう。その後、これも発掘調査で明らかになったとおり、9世紀に相輪に代わって六角屋蓋をもつ石塔が頂部に建てられるなどの再整備が行われたが、次第に退転の道をたどることとなる。契機としては応和2年(962)8月に大風により新薬師寺金堂が傾倒したことが考えられる¹⁴⁾。それまで密接な関係を持っていた新薬師寺自体の勢力が衰え、頭塔の維持が困難になったのであろう。

新薬師寺
の衰退

(2) 興福寺菩提院との関係

頭塔が、実忠が造った土塔であるということは平安時代末には忘れ去られたようである。保延6年(1140)の大江親通による『七大寺巡礼私記』、興福寺菩提院の条には、
「菩提院 玄昉僧正所住旧跡也。……興福寺巽方去五町余荒野中、有十三重大墓。以僧正之頭埋此墓、故号頭塔。其墓石多彫刻仏菩薩像者也。……其後天平十八年五月廿三日、僧正為大宰少弐藤原広継之靈、被雷撃之剋、身体散五箇処、以首落地為墳廟。仍号墓云頭塔。」
とみえる。ここに見える石彫の仏菩薩を有し「頭塔」と呼ばれた「十三重大墓」が現在の頭塔であることは明らかであろう。「十三重大墓」の意味については、種種議論があった。しかしながら、9世紀初頭に落雷で焼失した相輪に代わって建てられた六角屋蓋をもつ石塔が発掘調査で出土しており、これが十三重に復原されるとするならば、この石塔のことを示しているとみてよいであろう。

『七大寺
巡礼私記』

この『七大寺巡礼私記』から読みとれることは、第一に頭塔の記載が興福寺菩提院の項にあり、位置も興福寺を起点に示されていること、第二に、頭塔の周りは荒野となっていたこと、第三に頭塔は玄昉の頭を埋葬した墓であるという認識になっていること、などである。

興福寺
菩提院

玄昉の経歴 第三点の玄昉については周知のことであるが、『続日本紀』などを基に簡単に経歴を振り返っておこう。彼は吉備真備とともに養老元年(717)に入唐、天平7年(735)に多くの仏像、経論を携えて帰国した僧であって、帰国後真備とともに橘諸兄政権に重用された人物である。しかし、この待遇は多くの人々の反感を買い、二人を排除すべく、天平12年(740)大宰府で藤原広嗣が反乱を起こすことになる。これはすぐに鎮圧されるが、玄昉は天平17年(745)に筑前観世音寺に左遷されてしまう。翌年その地で死去するが、人々は広嗣の霊に害されたと伝えたとのである。このことが基となって様々な伝説が生まれることとなる。

玄昉伝説 『七大寺巡礼私記』と同様の伝説は『今昔物語集』11-6、『平家物語』7、『源平盛衰記』30、『扶桑略記』天平18年6月丙戌条、『元亨釈書』16などにもみえる。ただし、玄昉の首が落ちた場所については諸説あり、『扶桑略記』、『元亨釈書』は興福寺唐院、『今昔物語集』は奈良(弟子が散り散りになった身体を拾い集めて葬った場所)、『源平盛衰記』は興福寺南大門、『平家物語』は興福寺の庭(延慶本、長門本などは西金堂)とする。場所を特定したものについては興福寺内であることは一致している。

興福寺の拡大 ところで、先行研究ではあまり重視していないが、重要なのは先述の第一、第二の点である。つまり、『七大寺巡礼私記』によれば、頭塔の周囲は既に荒廃し、東大寺の施設としては廃絶しており、興福寺関連の施設として認識されているのである。もともと東大寺との関係の薄かった東大寺南方のこの地域が、興福寺に吸収されていったことが窺える。この地域における東大寺と興福寺の争いの中で理解すべきことであろう。なお、10世紀に興福寺が春日野の松林の地について春日神社と争論したことが史料に¹⁵⁾見え、興福寺がこの地に支配を拡大していったことが示されている(永島1958)。

頭塔は菩提院と関係 さて、玄昉と興福寺の関係は、彼の所持した経論がことごとく興福寺に収められたということから生じたと思われる。¹⁶⁾このことからすると、玄昉伝承において頭が落ちたとされる場所が興福寺内であることは理解しやすい。但し、その場所の多様性をみると、頭塔が玄昉の墓であるという説は今(近世以降)においてこそ流布しているが、これは『七大寺巡礼私記』自体が後世諸書に引用されて広まったことであって、平安時代末から中世初頭にかけては決して一般的なものではなかったことがわかる。つまり、現存諸書を見る限り、頭塔イコール玄昉頭墓説は孤立して『七大寺巡礼私記』があるのみなのである。もちろん、大江親通ひとりが述作したはずはなく、菩提院の項に記されていることからすれば菩提院側が持っていた伝承なのであろう。つまり頭塔が玄昉の墓であるという伝承は興福寺全体で認知されているわけではなく、菩提院に関わって生まれたものなのである。

興福寺菩提院は『七大寺巡礼私記』によれば玄昉の住んだ院であるとされているが、堀池春峰の説のように(堀池1964)実際は平安中期以降、玄昉の菩提を弔うために建立された院であろう。『菅家本諸寺縁起集』菩提院事によれば、菩提院において正暦3年(992)に朝勲上人により法華三十講が創始され、長和2年(1013)3月24日に観音が出現した、とあり、10世紀末から11世紀初頭が拡大の画期であるとみられる。玄昉止住の院家としての創建伝承を持つ菩提院としては、頭塔が玄昉の墓であるという伝承を作り上げることで、新薬師寺の衰退と入れ替わるようにして頭塔を自らが取り込む根拠とし、また逆にこれを供養することで玄昉止住以来¹⁷⁾の法脈を相承する院家であることを主張していったのではなかろうか。¹⁸⁾

(3) 中世の頭塔

『七大寺巡礼私記』の段階では頭塔の周りは荒野であった。しかし、まもなく周囲には人家が建つようになった。

治承4年(1180)の平重衡による焼き討ちで、興福寺は大きな打撃を受ける。その時の被害状況は翌治承5年正月5日付けで興福寺三綱らが作成した「南都焼失注文」¹⁹⁾により知ることができる。頭塔のある地区はそのうちの寺外で焼け残った地区として「但所残禅定院(現在の大乘院庭園のあるところ)并近辺小屋少々、春日山内、新薬師寺西辺小屋少々」とみえる。つまり、頭塔の近辺には小屋が少々建ち並んでいるという景観が想定できるのである。²⁰⁾

降って室町時代には、頭塔のある地区は頭塔郷と称され、興福寺大乘院領小五月郷の一つに編成されるようになる。²¹⁾小五月郷とは大乘院の東方にある天満社(現在は天神社と称される)の小五月会に際し、その費用を徴収される大乘院南方及び東方の郷のことである。その費用は「小五月銭」と称され、間別に徴収されたので「間別銭」とも呼ばれる。天満社はもともと元興寺禅定院の鎮守であるとされるが、治承の焼き討ちの後、興福寺大乘院が禅定院の地に移転したのに伴い、大乘院の鎮守となったものである。比較的古い史料として、「正長元年(1428)領内間別銭納帳」²²⁾に「頭塔<三十九間四尺、慈性院>」とみえ、元亀3年(1572)8月16日小五月郷間別改打帳には「頭塔郷、式間二尺五寸、弥九郎」とみえる。なお、尋尊筆「小五月郷指図」断簡²⁴⁾には頭塔が円形に記されているが、²⁵⁾頭塔郷の記載はない。或いは欠損部(頭塔の東側)に記されていたのかも知れない。

(4) 近世の頭塔と玄昉伝説

18世紀の段階では、頭塔は興福寺賢聖院の管理下にあった。『奈良坊目拙解』(享保20年(1735)完成)巻7には「頭塔今在艸室一字于坂ノ上。興福寺賢聖院支配地也云々」とあって、小規模な堂舎が設けられていたことがうかがえる。第IV章1B(2)で述べたように、発掘調査開始前の地形測量図には西南隅部に小堂宇の建っていた平坦面の痕跡がみられるが、これが「艸室」の跡であろう。また、現在、頭塔南面には7基の五輪塔が立っているが、地輪に記された銘文によれば、そのうちの3基は、欠名(没年も欠失)、英誠(享保7年(1722)没)、秀英(元文元年(1736)没)という三人の賢聖院僧の墓塔である。²⁶⁾また、第277次調査で検出した近世墓地の区画石列に転用されていた墓碑のうち、五輪塔を刻むものは、頭塔が興福寺賢聖院の管理下にあった時期のものである。²⁷⁾

ところが、享保15年(1730)に頭塔は賢聖院(当時の院主は秀英)から日蓮宗常德寺に譲渡され、末寺となった。²⁸⁾これは頭塔寺と称され、このときの常德寺僧日実が開基とされた。この日実の墓石も頭塔南面に残っている。また、第277次調査出土の石碑は、「(南無妙法蓮)華経」とみられる記載からすれば、日蓮宗常德寺に関わるものであろう。

ところで、近世には頭塔が玄昉の墓であるという伝説は広く流布していたようであり、『奈良曝』(貞享4年(1687)板行)や『奈良坊目拙解』にもこの説がみられる。なお、近世にはこの他玄昉の肘を埋めたとされる肘塚(かいなづか)、眉と目を埋めたとされる眉目塚(まめづか)、胴を埋めたとされる胴塚の伝承があり、『奈良曝』や『奈良坊目拙解』にみえている。しかし、中世以前の表記をみると、肘塚は「甲斐塚」「貝塚」であり、「眉目」も「大豆(まめ)」が本来であろうから、頭塔の伝承がまずあって、これに合わせる形で付会したものであろう。『奈良

南都焼打

大乘院領
小五月郷
内頭塔郷興福寺
賢聖院常德寺
へ譲渡近世の
玄昉伝説

坊目拙解』が説くとおり、「頭塔之外三所無正證乎。不足信用。皆以後世ノ疑説也。」としてよ
31)
い。

注

- 1 『大日本古文書』(編年文書) 4巻-411頁。以下、『大日古』4-411の如く略記。
- 2 正倉院文書正集5、『大日古』4-368~370。
- 3 正倉院文書続々修6-1裏、『大日古』10-637。
- 4 正倉院文書続々修15-9裏、『大日古』9-606。
- 5 VI1で述べたように、頭塔の中心は東大寺の伽藍中軸線から約100m西に位置している。仮に「朱雀路」が中軸線に乗っていたとすると、やや外れることになるが、前述のように朱雀路自体がどの位置を通るかは不明であり、また、頭塔本体でなくとも、周辺にある一連の関連施設が朱雀路にあたっていたと解すれば問題なかろう。
- 6 この点について、吉川真司氏の教示を得た。
- 7 正倉院文書続々修38-9、『大日古』5-128。
- 8 正倉院文書続修35、『大日古』5-192。
- 9 正倉院文書続修別集33、『大日古』5-379。
- 10 『東大寺要録』7、東大寺権別当実忠二十九箇条。
- 11 もちろん、現在この位置にある荒池は1888年竣工、鷺池は1908年竣工であるが(吉川1996参照)、同じ位置に8世紀に池が造営されていたことを否定するものではない。
- 12 VI1で述べたように、頭塔の中心は左京東張出部(いわゆる外京)の条坊を基準に考えると四条大路の東延長線上にあり、かつ、東大寺伽藍中軸線から約100m西の地点にある。吉川の比定はこの知見にほぼ合致する。
- 13 『続日本紀』宝亀11年(780)正月庚辰条。
- 14 『東大寺要録』4、及び10所引、村上天皇記。
- 15 『東大寺要録』4裏書所引村上天皇記応和2年(962)7月10日条。
- 16 『扶桑略記』天平18年(746)6月丙戌条。堀池1964参照。
- 17 V4Bで述べているように、発掘調査で、仏龕の前で行われた供養に関わる平安時代から鎌倉時代の土器が出土しており、この時期に頭塔において何らかの儀式が行われていたことが推定できる。土器の時期は11世紀後半を中心とするが、11世紀前半に遡るものもあり、文献上菩提院の活動が知られるはじめる時期に重なる。従って、この儀式は菩提院に関わる可能性がある。しかしながら、この時期の菩提院関係の史料は他にほとんどなく、菩提院が頭塔をめぐるいかなる活動をしていたのかは知ることができない。また、史料検索範囲を興福寺全体に拡大しても、頭塔に関わるものは管見の限り見あたらない。この時期、興福寺では何度も中心伽藍が焼失し、再建の度に供養の儀式が行われているが、人の動きをみると中心伽藍と春日社での行事に限られ、頭塔のような南方で儀式を行っている形跡はみられない。
- 18 先に本文に記したように、玄昉の頭が落ちたとされる場所として頭塔の他に興福寺西金堂、唐院などがある。興福寺西金堂については、『七大寺巡礼私記』によれば、もともと玄昉ゆかりの海竜王寺にあった銀製の釈迦如来立像を永久2年(1114)に移した、とある。また唐院については、『興福寺流記』によれば、玄昉が唐から帰国したときにもたらした五千余巻の経論章疏などをここに安置した、とある。平安時代末に、菩提院も含め、それぞれの院家などが自らの由緒を玄昉に結びつけていく中で、玄昉の頭の伝承を取り込んでいったことがうかがえる。
- 19 『玉葉』同月6日条所引。
- 20 焼け残ったものとして頭塔自体については記されないが、この地区の中で焼けた施設としても見えず、興福寺寺家側としては、木造建築物がないとはいえ、頭塔がどういう状況であったかについては関心を払っていないということが推定される。
玄昉伝説の多様性も考え合わせると、興福寺全体としては玄昉の墓としての頭塔を認知しているわけではないということの傍証ともなろう。
- 21 なお、小五月銭賦課対象としての頭塔郷は文献上みられるが、頭塔そのものが何らかの儀式の場などとして登場することは管見の限り知られない。第V章4Cで、頭塔周辺から出土する土器の様相は13世紀前半を最後として、それ以降近世まで量的に少なくなっており、頭塔の存在意義が薄れていくと指摘するが、そのこととよく対応している。
- 22 『大乘院寺社雑事記』尋尊大僧正記、長祿4年(1460)閏9月26日条所引。
- 23 『大日本史料』10編11。

- 24 『日本荘園絵図聚影』3、東京大学出版会、1988。
- 25 頭塔は四条大路の東延長上に造営されているが、「小五月郷指図」ではそれよりもやや北にずれて記されている。天満社の小五月会に関わるといふ絵図作成の契機に起因することであるが、頭塔が四条大路の延長、あるいは東大寺の南方と意識されたのではなく、天満社との位置関係を意識されたことによるものとみられる。
- 26 それぞれ別掲銘文(9)(8)(10)。
- 27 別掲銘文(11)~(19)。
- 28 別掲銘文(3)。なお、佐藤小吉は別掲銘文(1)(2)に記された紀年を根拠に賢聖院から常德寺への移譲を寛保3年(1743)のこととするが(佐藤1916)、(1)の紀年は、この石碑自体が建てられた年とみるべきであろうし、(2)は明らかに日実の没年である。また、常德寺に頭塔を譲った賢聖院の秀英は元文元年(1736)に没しているので、譲渡の時期はそれ以前としなければならない。銘文(3)の享保15年(1730)に譲渡されたとする記事は、これらの事実と矛盾しない。ところが、享保20年に完成した前掲の『奈良坊目拙解』の記事は頭塔について興福寺賢聖院の支配としており、くいちがいがあふ。その原因は『奈良坊目拙解』のこの部分が享保15年以前にできていたためか、或いは享保15年以前の古い材料に基づいて記されたためかのいずれかであろうと思われる。
- 29 別掲銘文(2)。
- 30 別掲銘文(20)。
- 31 もちろん、近世の伝承とは別に玄昉の本当の墓はいずこかという問題は残る。大宰府で死去した中央官人の遺体の処置方法としては、例えば天平10年度(738)周防国正税帳(正倉院文書正集35・36)に、天平9年6月11日に死去した大式小野朝臣老について「大宰故大式従四位下小野朝臣骨送使」(『大日古』2-131)、天平10年10月30日に死去した大式紀朝臣男人について「大宰故大式正四位下紀朝臣骨送使」(『大日古』2-134)がみえ、任地で茶毘に付された上で遺骨が京に送られたことが知られる。玄昉についても同様であった可能性は高く、墓は平城京周辺に営まれたと思われるが、その位置は行基の墓のように墓誌が出土するものでなければ確定できることではない。なお、現在、福岡県太宰府市観世音寺講堂の西北約50mのところに玄昉の冢と称される石造浮き彫りの宝篋印塔が存在する(『太宰府市史』民俗資料編1993、『同』建築美術工芸資料編1998)。「『太宰府市史』によれば全体の高さ約104cm、塔の高さ約86cmの規模で、「銘はなく造営時期の決定は困難である」が、「貞和年間までは遡らないもののそれよりやや下の時期の所産と考えておきたい。」ということであり、石塔自体は南北朝時代前後のものとみられる。しかしながら、これが玄昉の墓であるという説は『筑前国統風土記拾遺』(青柳種信ら編、文化11年(1814)編纂下命、未完成。筑前国統風土記拾遺刊行会により1973年に刊行される)にはみえるものの、この書の本編にあたる『筑前国統風土記』(貝原益軒編、宝永6年(1709)完成)には記載がなく、18世紀初頭の段階ではあまり流布していなかった伝承であるとみられる。憶測すれば、近世になって頭の墓が奈良にあるという伝承が広まり、これに対応するものを大宰府周辺で求めた結果ではなかろうか。

引用文献

- 足立 康 1944 『『頭塔』に関する一考察』『日本彫刻史の研究』。
- 板橋倫行 1929 「頭塔について」『文学思想研究』9。
- 佐藤小吉 1916 「頭塔山石仏・古墳等調査報告」『奈良県史蹟勝地調査会報告書』34。
- 永島福太郎 1958 「春日社興福寺の一体化」『日本歴史』125。
- 福山敏男 1932 「頭塔の造立年代」『寺院建築史の研究』中(1982)所収。
- 堀池春峰 1948 「東大寺の占地と大和国法華寺についての一試論」『南都仏教史の研究』上(1980)所収。
- 堀池春峰 1964 「奈良の頭塔について」『南都仏教史の研究』下(1982)所収。
- 吉川真司 1996 「東大寺山界四至図」『日本古代荘園図』。

C 頭塔関係年表

和銅	3 (710)	0310	平城京へ遷都する。
養老	1 (717)	0423	行基の民間への布教を禁ずる。 玄昉、入唐する。
神亀	4 (727)		行基、大野寺を建てる。
天平	8 (736)		菩提僊那が来日する。摂津で行基がこれを迎える。
天平	12 (740)	0903	藤原広嗣の乱。
		1215	恭仁宮へ遷都する。
天平	13 (741)	0324	国分寺創建の詔。
天平	15 (743)	1015	盧舎那仏造立発願の詔。
天平	16 (744)	1113	甲賀寺に盧舎那仏体骨柱を建てる。
		1208	金鐘寺及び朱雀路において燃燈供養。
天平	17 (745)	0121	行基、大僧正となる。
		0511	平城京へ遷都する。 盧舎那仏造立を大倭国添上郡山金里で再開。 (『東大寺要録』1)
		1102	玄昉、筑紫観世音寺へ配せらる。
天平	18 (746)	0618	玄昉没。
天平	19 (747)		光明皇后、新薬師寺を造立か。
天平	21 (749)	0202	行基没。
天平感宝 1	(749)	0430	経師等布施充帳(大日古10-637、続々6-1ウ) 銭は「自南寺来者」。
天平勝宝 3	(751)	0525	この直前、南寺鎮御房宛て政所牒草(大日古9-606、続々15-9ウ)
天平勝宝 4	(752)	0409	大仏開眼供養。 菩提僊那が開眼導師となり、行基の弟子の景静が都講となる。
天平勝宝 8	(756)	0502	聖武天皇没。
		0609	「東大寺山堺四至図」。 頭塔の記載なし。
天平宝字 3	(759)	0628	□工所解(大日古4-368~370、正集5) 南寺派遣の仕丁の月粮申請。
天平宝字 4	(760)	01	実忠、良弁の目代として造寺司の政を奉仕。 天平神護2(766)まで。(『東大寺要録』7)
		0302	菩提僊那没。
		0309	造南寺所解(大日古4-411、続修22) 東大寺南朱雀路に当たる墓を破壊することになり、供養のための 写経料物を申請する。
		0313	これ以前から光明皇太后不予。

- 0607 光明皇太后没。
- 天平宝字 8 (764) 0911 惠美押勝の乱。
西大寺造営発願、百万塔発願。
実忠、軍馬の鬃を献上。
- 天平神護 1 (765) 実忠、良弁の命により東大寺南春日谷に堤・池を造る。
(『東大寺要録』 7)
- 神護景雲 1 (767) 実忠、良弁の命により塔を造る。
「塔」・「新薬師寺西野」(『東大寺要録』 7)
「石塔」・「新薬師寺西野」(『東大寺要録』 6)
「土塔」・「東大寺朱雀之末」(『東大寺別当次第』)
- 宝亀 11 (780) 0114 新薬師寺西塔など、雷火で焼失する。
- 応和 2 (962) 08 新薬師寺金堂、大風で傾倒する。
- 正暦 3 (992) 菩提院法華三十講創始 (『菅家本諸寺縁起集』)。
- 長和 2 (1013) 0324 菩提院に観音出現 (『同上』)。
- 保延 6 (1140) 『七大寺巡礼私記』(大江親通) 菩提院の項。
頭塔は興福寺の巽五町あまりの荒野の中にあるとする。
玄昉の頭を埋めた墓であるとの説がみえる。
cf. 『今昔物語集』 11、『平家物語』 7、『源平盛衰記』 30
『扶桑略記』、『元亨釈書』等。
- 治承 4 (1180) 1228 平重衡、南都を焼き討ちする。頭塔のある地区は焼け残る。
- 正長 1 (1428) 0728 頭塔、興福寺大乘院領小五月郷の一つとして見える (慈性院管理)。
(『大乘院寺社雑事記』 尋尊大僧正記長禄 4 閏0926条所引
「正長元年領内間別銭納帳」)
- 享保 15 (1730) 06 頭塔、興福寺賢聖院 (秀英) から日蓮宗常德寺 (日実) に移譲される。
常德寺末寺として「頭塔寺」と称される (頭塔所在石碑銘)。
- 元文 1 (1736) 0708 賢聖院の秀英没する。
- 寛保 3 (1743) 0818 常德寺の日実没する。

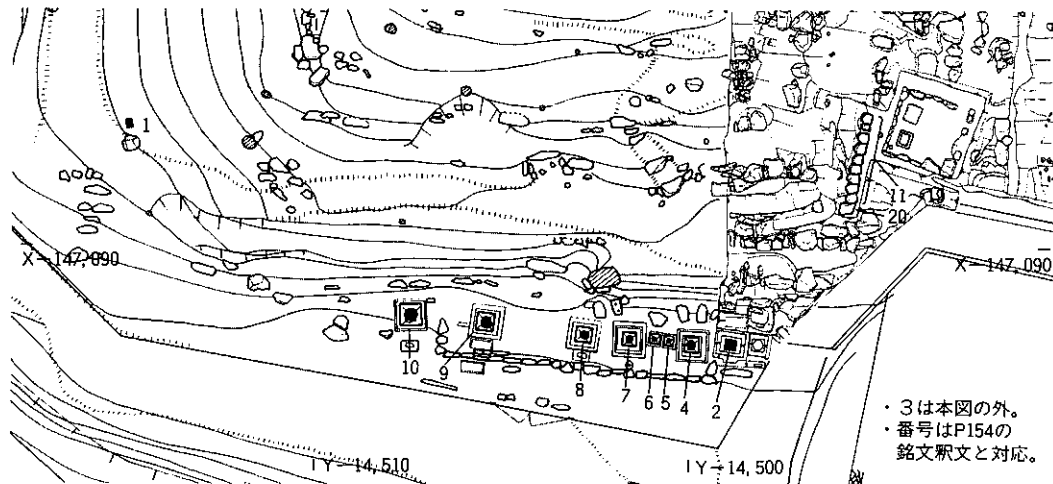


Fig.50 石碑・石塔類位置図 (1 : 200)

頭塔所在石碑・石塔類銘文釈文(抄)

一 頭塔南面所在のもの

(1) 南西隅石柱

(右面) 自天平十八丙戌至寛保三癸亥一千歳建吊之也

(正面) 南無妙法蓮華經 賜紫僧正玄昉之御頭塔

(左面) 從賢聖院主法眼秀英學士永代于常德寺讓賜也

(背面) 皇帝天長武將地久経王広布萬民快樂 感得開基 日実聖誌

(2) 南面東より二つ目の墓石(日実墓石)

(右面) 頭塔寺者法華靈場常德寺末寺定置也

寛保三癸亥載八月十八日行年七十二歳叔

(正面) 当山開基弘法院日実聖人

(左面) 宝永七庚寅年二月十四日

慈父 一公院元真日隆居士

悲母 清涼院妙瑛日生信女

延宝六年六月十四日

(背面) 菊地肥後守隆恭齋隆真也宣説三千

座護国寺玄講於当所宗祖之旧跡常

徳寺鐘鑄鐘樓堂建立加庫裏修覆也

賜紫玄昉頭塔寺感得元文五申秋移

摂州久々知村広濟寺而庫裏再建印之

(3) 南側石段下石碑

(右面) 師日龍日体天元真日実地妙瑛日隆

権大僧都英訓大和尚仲光正有六親

皇帝天長武將地久経王広布共期仏慧

南無妙法蓮華經南無釈迦牟尼仏

(正面) 頭塔寺永于常德寺感得主日実也 (台石正面) 日実

南無妙法蓮華經日蓮大士隆真

京頂妙寺遂聖為開會祖焉弘法院

(左面) 享保十五庚戌六月從賢聖院御讓賜訖

(宣力) 本願之施主 常德□住日□聖人

□說式千八百□東常以日実同妙智

当寺感開主□下布施太兵衛同父母

(背面) (省略)

(4) 南面五輪塔東から一番目

(正面) 法印大和尚位権大僧都 盛兼学乘房

寛永三年 丙寅 八月廿三日

(5) 南面五輪塔東から二番目

(正面) 光眷宗古

慶長十五年 庚戌 八月二日

(6) 南面五輪塔東から三番目

(正面) 妙薫禪定尼

慶長十四年 己酉 八月四日

(7) 南面五輪塔東から四番目

(正面) □□□□□□□□□□

(8) 南面五輪塔東から五番目

(右面) 享保七年 壬寅 一月十九日

申剋婦寂行年六十八歳

賢聖院住 俗姓矢田氏

(正面) 法印権大僧都大和尚位

英誠学内房 (遺弟九)

(左面) 梵漢筆者□□□□□□□□□□

(師力) 秀英

石□大工東向中町

佐治兵□□□□□□□□□□

(衛力)

(9) 南面五輪塔東から六番目

(右面) 賢聖院

(正面) □□□□□□□□□□□□□□□□

(左面) 慶□□□□□年□月十八日

(10) 南面五輪塔東から七番目

(右面) 元文元年七月八日

俗姓 久□氏 戒主

(正面) 法眼和尚位 秀英学真房

二 第二七七次調査出土のもの

(11) 寛永廿一年 三月三日

妙空禪尼 □□□□□□□□□□□□□□□□

(12) 寛永□□□□□□□□□□□□□□□□

妙蓮□□□□□□□□□□□□□□□□

九月□□□□□□□□□□□□□□□□

(13) 明暦二丙申 十月十九日

淨月寿清 □□□□□□□□□□□□□□□□

(14) (明暦) 年九 三月三日

徳眷宗□□□□□□□□□□□□□□□□

三月三日

(15) 寛文二年 周屋清心信 □□□□□□□□□□□□□□□□

黄七月八日

(16) 寛文七〇年 八月十四日

勝慶尊禪房擬講

(17) 延宝三年 □□□□□□□□□□□□□□□□

秋月妙慶信 □□□□□□□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□

(18) 延宝六年 六月十日

涼覚坊 □□□□□□□□□□□□□□□□

(19) 甲戌 二月廿九日

清誉榮尊 □□□□□□□□□□□□□□□□

(20) 僧正玄昉之旧跡

(右面) □□□□□□□□□□□□□□□□

(正面) □□□□□□□□□□□□□□□□

(左面) 三十番神鎮座頭塔寺

6 頭塔造立の構想と事情

頭塔の造立構想を考察するには、仏教の經典や教理、当時の仏教界の動向についての深い理解が必須であり、門外漢に至難であることは言うまでもない。しかし手を拱いてばかりもいられないので、今後の考察の足掛かりを得るべく、ごく初歩的な学習だけでもしておきたい。下層頭塔はともかく、上層頭塔が東大寺と密接な関係の元に造顕されたことは諸先学が明らかにしてきたから、まず当時の東大寺の教理的傾向を知るために東大寺大仏の造顕思想を一瞥し(A)、それとの連関のもとで上層頭塔の教理的構想(B)と造顕の事情(C)について考察し、最後に下層頭塔の造顕事情について憶説を述べる(D)。

A 東大寺大仏の造顕思想

すでに東大寺大仏が完成していたにもかかわらず、なぜあらためて何らかの教学を表現する建造物を造る必要があったのか。大仏の造顕思想と頭塔のそれとの異同に注目せざるを得ない。

まず大仏の造顕思想を見よう。大別して①華嚴經説、②梵網經説、③華嚴經・梵網經併用説がある。このように論が割れる原因は、天平勝宝8歳(756)から天平宝字元年(757)にかけて刻入された大仏銅座・蓮弁線刻画の図相が、華嚴經所説の蓮華藏世界ではなく梵網經所説の蓮華台藏世界に主として基づくと見られる(小野 1915・1916)ことによる。もっとも、当時の梵網經解釈上支配的だった玄暁の疏は華嚴・梵網兩經の説く世界を区別していないから、蓮弁線刻画には華嚴經所説のものも含まれるとする説(狭川 1954・1968)があり、また近年、大智度論の説も用いていることが判明したが(松本 1986)、蓮弁線刻画の典拠が梵網經主体という点は動かないようだ。問題は、それが蓮弁に先駆けて完成していた大仏本体の造顕思想と同じか否かである。①華嚴經説、②梵網經説、③華嚴經・梵網經併用説の順で、どう考えているか纏めよう。

蓮弁線刻画

①華嚴經説。華嚴經が説く重々無尽の十蓮華藏世界の図示は不可能なので銅座には梵網經の述べる一相の世界を表し、華嚴經の説く重々無尽の関係は石造蓮座・銅座・蓮弁毛彫の蓮座の三重で表現した(北河原 1928)。銅座に梵網經の図相が刻入されたのは開眼会の後であり、大仏造立当初の精神の忠実な継承ではなく、当初はあくまで華嚴經に基づいたと見る(家永 1937・1948、田村 1999)。

大仏本体の造顕思想

②梵網經説。蓮弁線刻画の図相から、ただちに大仏が梵網の教主と説く(小野 1915)。

③華嚴經・梵網經併用説。大仏造顕事業に深く関与した仏家たる道璿の教学は、梵網經と華嚴經が同一思想に立つと考える天台の教理によっているから、大仏の仏身についても、二經同仏(境野 1931)ないし単一教主では割り切れない(井上 1966)。そもそも奈良時代人は華嚴と梵網の盧舎那を判然と区別しておらず大仏は双方と関係するが、天台の教理を持ち出すのは苦しい(大屋 1937)。

天平8年以降すでに道璿の教学があるのは確かとして、梵網經の重視がいつからかについては諸説ある。家永三郎は天平勝宝6年(754)の鑑真の渡来による「律の勢力進出」を契機に突如梵網經が重視され初め、華嚴一乗で一貫していた聖武太上天皇の死(天平勝宝8歳)がそ

梵網經の重視

れを促進したと見ていた（家永 1937）。石田瑞麿は天平勝宝3年（751）の道瑠の律師就任の前後から、毎正月の梵網経講説・読誦が始まるなど、重要な国家行事の中に梵網経が登場し重視され始めたとみる（石田 1963）。ただしそれは僧尼令と甚だしく齟齬する内容の戒本としての側面からではなく、元正上皇（～天平20年）、太皇太后藤原宮子（～天平勝宝6年）・聖武上皇（～天平勝宝8歳）などの死を契機に親霊追善功德の経として見直されたからで（田村 1999も同説）、梵網経と華嚴経の近親関係による教主の結合もそれを背景とすると説く。孝謙天皇による「有菩薩戒。本梵網経」の勅は天平勝宝8歳に出されるが、その背後に鑑真らの啓発努力があったとみる説もある（堀池 1963）。家永も、梵網経との連関は考えていないが、蓮華蔵世界を往生の対象たる浄土とする観念があり、蓮弁線刻図が聖武上皇追福の浄土変として造顕されたとみている（家永 1937・1948）。大仏開眼会の前後から梵網経の、とくに第一・二十・三十九軽戒にみえる功德（根本 1985）を期待した重視が顕著になったことは確かなようである。

教説的環境

道瑠の教学、玄暁の疏、鑑真の天台学によって、華嚴・梵網二経同仏説が広まっていたところへ、皇室で梵網経が親霊追善功德の経として見直され、現実の問題として華嚴経の説く蓮華蔵世界海を絵画表現することが困難という事情もあったので、それを簡略化した梵網経の蓮華台蔵世界を蓮弁に刻すことになったのであろう。要するに大仏本体の造頭時には華嚴経に依ったが、蓮弁線刻図は主として梵網経に基づいており、天平末から天平勝宝年間の中に華嚴経と梵網経を厳密に区別しない教説的環境が成立していたとみられる。

B 上層頭塔の造顕構想

法華経の要素

第V章2で松浦正昭は、上層頭塔の造像構想が華嚴経を主体としつつも法華経を含むと指摘した。なぜ法華経の要素が入っているのだろうか。東大寺の華嚴教学と法華経との関わりが問題となろう。上層頭塔を造顕したのは実忠と認めて良い。ただし実忠は類稀な実務家ではあるが（筒井・杉山 1963、清水 1967、森 1971、佐久間 1975、松原 1975）、教学研究上の業績があったように見えないから、多数の石仏を配する全体構想の立案に当たっては、教学上の指導者がいたはずである。

法華経信仰は日本への仏教伝来の初期から盛んで、聖徳太子は法華義疏を著した。7世紀末に造られた長谷寺の銅板法華説相図は見宝塔品に基づく優作として著名である。奈良時代においても、存在した註疏の数からみて法華経研究はきわめて盛んだった（石田 1930）。しかし、そうした一般的隆盛から頭塔の造像構想に法華経が入ったわけではあるまい。

良弁の動向

ここで注目すべきは、実忠にとって師であり、頭塔造営を命じたほかならぬ良弁が、天平18年（746）からかどうかは疑わしいものの、承和13年（846）まで連綿と続いた法華会を創始し東大寺での法華経研究を開始したと伝えられることであり、天平18年には良弁、天平勝宝3年（751）には東大寺三綱が法華経を書写している（堀池 1955）。法華経の表現を実忠に直接指示したのは良弁かもしれない。かりにそうだとすると、良弁は教理よりも実務や悔過等の方面を本領とする人であったようだから（石井 1994、平岡 1994）、法華経の重視に当たっては良弁を動かした原因があったのではないか。

良弁はもともと法相宗の僧であったが、聖武天皇による盧舎那仏造立の発意が明らかとなり、華嚴経の教理的研究の必要性が皇后宮周辺から誘発されたのを受けて（堀池 1973）、かつて新

羅に留学し「海東華嚴の祖」義湘の門流から華嚴宗を正統に相承した大安寺の審詳に、仏陀跋陀羅訳六十華嚴を金鐘寺で講ぜしめた(天平12年10月創始)。その一方で、新羅との関係が険悪化していた国際情勢を背景に、審詳の新羅色から距離をとるべく(田村 1999)、実叉難陀訳八十華嚴も講説に取り入れるなど、目配りの行き届いた活動を心掛けた。法華経研究も「名僧を屈請して」開始したのであろうし(石井 1994)、目的も『東大寺桜会縁起』には皇室のためとしか記していないが(堀池 1955)、皇室の意に沿ったものであっただろう。

華嚴経講説

華嚴教学においても唐の法蔵(鎌田 1993)、新羅の元曉を始めとして法華経を重視し研究を行ってきた。金鐘寺で華嚴を講じた審詳、あるいは標瓊(石田も 1930)も法華経の研究を始めていたが、彼らは天台の教義を導入してはいない(石井 1994)。法華経の信仰・研究の地盤が以前からあったにせよ、ことさらに法華経を表に出すとなるといかなる教理が入っているであろうか。さきに、東大寺大仏本体の造頭は華嚴経に依ったが、蓮弁線刻図は主として梵網経に基づいており、天平末から天平勝宝年間(750-755)の間に華嚴経と梵網経を厳密に区別しない教説的環境が成立していたことに注意を促しておいた。ここで重要なのは、天台の教理では梵網経と華嚴経が同一思想に立つと考えていることであり、華嚴教主としての東大寺大仏の銅座に梵網経所説の図が刻入された背景には天台の教理の尊重があったとみられる(井上 1966)。

天台の教理

では、そうした事態に至った背景にはいかなる契機があったのだろうか。

天平8年(736)に伝戒師招請に応じて唐より来朝し、大仏開眼会の咒願師を努めた道璿の教学が深い関係を持つとする説(井上 1966)はどうか。彼は華嚴の日本への初伝章疏の人と言われたが、むしろ梵網経の戒律思想に造詣が深く、梵網経の註をするのに天台の教理に多くよったという(常盤 1928、島地 1929、井上 1966)。これは梵網戒の研究が天台学・華嚴学に付随して行われた唐の実状(石田も 1930)の反映とも言えよう。もっとも当時の日本での梵網律研究は、新羅の元曉の註疏などを主としており、法蔵や天台の思想系でなく新羅系のものであったとする説(石田も 1930)があるのに加え、道璿の来朝後も天平勝宝3年(751)の律師就任までは戒師としての能力を発揮する状況が整わず孤高の状態にあったようだから(石田も 1963)、道璿の天台に対する知識がどの程度影響を与えたのかは検討の余地がある⁵⁾。

道璿の教学

やはり本格的な天台教学の導入となると鑑真に注目せざるを得ない。鑑真はすでに揚州の仏教界において四分律学の大家であり天台学の学匠でもあった(石田も 1963、塚本 1964)。彼の戒律は四分律と梵網菩薩戒との併習に基盤をすえたものであった(石田も 1963)。鑑真が梵網経に造詣があったことは、鑑真が開いた律宗の根本道場としての唐招提寺金堂本尊として、彼の死後ではあろうが、梵網教主盧舎那仏が安置されたことでも明らかで、彼の梵網経への深い造詣は天台学の研究からきているという。来朝に際してもたらした書物は天台法華三大部(法花玄義・文句・天台止観法門)の初伝である(山口 1963)。鑑真が伝戒者として東大寺に戒壇を創立するにあたって華嚴宗と接触を持つことになり、それを契機に律と華嚴との結合が天台と華嚴との結合に発展した可能性がある(石田も 1930)という。天平勝宝7年(755)に完成した東大寺戒壇院の壇上には、『法華経』見宝塔品に基づいて、内部に釈迦如来と多宝如来を並座で安置する法華多宝塔が置かれた(石田も 1963)⁷⁾。

鑑真の教学

法華多宝塔

こうして見ると、聖武上皇の死の直後、華嚴教主としての東大寺大仏の銅座に梵網経所説の図が刻入されたこと、法華の信仰を明示する多宝塔がほかならぬ東大寺に出現したことの背景

に天台の教理があって、それが鑑真の教学と深い関係を持っている蓋然性が強い。聖武上皇さらには光明皇太後の死後、鑑真は藤原仲麻呂の庇護の元にあり（堀池 1965）、唐招提寺へ移るにあたって一部の反発を買いもした（『延暦僧録』思託伝）。しかし鑑真の死（天平宝字7年）あるいは仲麻呂の乱後も、天平宝字8年（764）孝謙上皇発願の西大寺造営に鑑真の高弟思託・普照らが関係しているから（堀池 1963・67）、鑑真系の人脈が疎んじられはしなかったようであり、法華経の尊重、天台教学も仏教界に浸透を続けたと思われる。鑑真の高弟で師の死後も東大寺と僧綱にとどまった法進の教学（島地 1924、石田み 1979）が、最澄によって道璿とともに日本天台宗の立宗の礎とみなされた（根本 1985）のも重要だろう。こうして見ると、上層頭塔における法華経の重視も、東大寺戒壇院における法華多宝塔の出現と同じ教会的背景によると考えられる。良弁や実忠は教界の趨勢に従ったのであろう。上層頭塔の造願そのものの事情は次項で考えよう。

C 上層頭塔の造願事情

天平宝字4年（760）6月の光明皇太後の死後、天平宝字6年4月に保良宮滞在中の孝謙上皇の病床に侍って宿曜秘法を修し上皇の寵を得た道鏡の進出によって、政界では藤原仲麻呂・淳仁天皇の権力が凋落し、仏教界においては形而上学的・哲学的な法相・華嚴教学よりも加持祈禱・悔過による呪術的密教的仏教が前面に登場した（堀池 1957）。

東大寺では、天平宝字元年（757）の橘奈良麻呂の乱を契機に藤原仲麻呂が造東大寺司の官人を仲麻呂派に入れ替えたり、越前国坂井郡壘田百町の一円化を不許可にしたことなどによって、寺家と仲麻呂の対立が始まっていた（岸 1966）。道鏡の進出後、造東大寺司でも天平宝字8年（764）正月に吉備真備が長官になって反仲麻呂色が鮮明となり、同年9月の仲麻呂の乱に際しては、真備自身の軍略で反乱軍を鎮定した。寺家側では上座の安寛が正倉院に蔵された兵器を内裏に運びさえた（佐久間 1958）。かつては仲麻呂と親しかったらしい良弁（岸 1966）も反仲麻呂派になっているとする説（佐久間 1975）もある。かの実忠は、乱に際し軍馬秣を献上したり、乱後は道鏡が造願を立案した可能性が高い（堀池 1957）百万塔を収める小塔院のモデルケースを作製したり、西大寺御齋会の廻幢を立てるなど、称徳天皇・道鏡寄りの活動を行った。実忠による上層頭塔の造営を、仲麻呂の反乱に起因した百万塔・小塔院の造願と軌を一にするもの、具体的には皇室の安泰、皇緒なき女帝の延命長寿、国家の守護を願うのが目的（堀池 1957・1967）とみる学説がある（堀池 1957・1964）。造営の時期からみると、この説がいまだに最有力と考えざるをえない。

ただし以下の問題が残る。①なぜBで示したような教会的内容（華嚴経を主体としつつも法華経あるいは天台教学の影響がある）をあらためて表現する必要があったのか、②なぜ建造物が立体曼荼羅のごとき塔でなければならなかったのか、③なぜ下層頭塔の改修にとどめず新造に近く改作する必要があったのか、④なぜ造営地点を変えずに下層頭塔の場所を踏襲したのか。

①について。次項で述べるように、下層頭塔はもともと新薬師寺の西方に新薬師寺の造営組織が造ったものとみられ、それが表現する教義も上層とは異なっていた可能性がある。それを東大寺で主流となった最新の教義で塗り替えたのではないか。

③の理由を知るには実忠の他の事績の質を見なければならない。実忠は『東大寺要録』所収

の「東大寺権別当実忠廿九箇條事」によれば、(a) 神護景雲年間(767~769)には百万塔を収める小塔殿造営に際し、大工らの造様がはなはだ醜かったので改め、(b) 天平宝字7年(763)から宝龜2年(771)までの「造大仏光所」の造営で国中連公麻呂の指導辞退を受けて光背を完成させ、(c) その光背が大きくて大仏殿の天井につかえる事態に際しては、光背を切り縮めるという大工等の意見を退け、天井を切り上げて光背を立て、(d) 宝龜2年(771)には大仏殿に副柱を立てる工事を辞退した「長上大工等」に代わって造営に成功した、といった事績が知られている。いずれも、仲麻呂の乱以後、西大寺造営などに重点が移り、東大寺造営の機能と熱意を低下させていった造東大寺司の仕事を、東大寺三綱側として肩代わりし、その杜撰な点を尻拭いしたとみなせる(清水 1967、松原 1975)。

実忠の事績

第VI章5A(3)で古尾谷知浩が述べたように下層頭塔の造営は造南寺所の仕事と推定できる。この造南寺所は造東大寺司の出先機関であるから下層頭塔造営も造東大寺司が関与した仕事ということになるが、設計上の欠陥があるのに加えて施工が杜撰で、土木工事としての出来が悪いことは第VI章2B(1)で指摘した。具体的には、基壇上面が水平でなく、第一段石積の各辺が一直線にならず、積み石間に大きな隙間があり、石積が高すぎる、といった欠点であるが、特に最後の点は竣工後ほどなく崩落などの深刻な事態を引き起こしたのではないか。けっきょく実忠による上層頭塔への改造も、上記(a)~(d)と同様に、寺家側による造東大寺司の仕事のやり直しと評価できることとなる。

④については次項で述べる。

D 下層頭塔の造顕事情

本書では、下層頭塔の造営を天平宝字4年からと考えている。下層頭塔の構造とくに仏龕の数や位置についての情報がきわめて限られることを承知の上で、あえて下層頭塔造顕の理由について憶説を述べたい。

まず下層頭塔の構造に注目しよう。下層頭塔には大きな仏龕が東面中央にある。北面での有無は不明だが西面中央にはない。小仏龕はともかく大仏龕が東面にしかない可能性がある。この東仏龕にはいかなる像が安置されたのか。第V章2で松浦正昭が明らかにしたように上層頭塔の東面には法華経の世界が表現され、E1c石仏は多宝三尊である。しかし法華経の影響は上層のみと考えられ、以下に述べる下層頭塔と新薬師寺との関係を勘案すると、下層東仏龕には東方瑠璃光浄土の薬師如来を安置したとみても、あながち無稽と言えないのではないか。

東面大仏龕

次に下層頭塔の位置に注目すると、東大寺南大門のほぼ朱雀の方角に当たり東大寺の軸線を意識したのは間違いない。しかし広大な東大寺地の中でなく、わざわざ南に外した場所である(吉川 1996)。なぜこのような場所を選定したのだろうか。この場所は新薬師寺金堂推定位置の西北西にあたるが、ここより南は低地であり眺望の良い高台としては頭塔の位置が東大寺地に近い最南端といえる。新薬師寺を意識して目いっぱい南に下げたと見るべきで、本来は新薬師寺の真西に設定したかったのではないか。東大寺と新薬師寺の双方を意識した占地である。

造営地点

第VI章5A(3)で述べたように下層頭塔の造営は造南寺所の仕事と推定できる。この「南寺」が新薬師寺を指すのか、頭塔を中心とする一郭のみを指すのかが問題だが、注目すべきは造南寺所に所属する官人で造香山薬師寺所と重複する者がいることである。造香山薬師寺所は、

造営主体

天平宝字6～7年の新薬師寺造営に際して、造東大寺司の組織下にある一機構という形で登場する（清水 1967）。造南寺所と造香山薬師寺所はともに造東大寺司の出先機関であり、造南寺所の方が資料に登場する時期が早いから、造南寺所が造香山薬師寺所に移行したか、そもそも同じ組織かであろう（古尾谷による）。そうとすれば下層頭塔は新薬師寺を造ったのと同じ組織が造営したことになる。

光明皇太后との関係

以上のことから、東大寺と新薬師寺の双方に深く関わる人物である光明皇太后と下層頭塔との関わりが問題となってくる。そもそも聖武天皇による盧舎那仏造頭発願は光明皇后の勧めが背景にあったらしい（岸 1967）。新薬師寺は天平19年（747）、光明皇后が聖武天皇の病氣平癒を祈って創立したとされる。

ここで注目すべきことがある。本書では、天平宝字4年3月頃に東大寺南朱雀路に当たる墓を破壊した前後から下層頭塔の造営が始まったと見ているが、⁹⁾『続日本紀』によれば3月13日に皇太后不子により社に平復を祈らせており、3ヶ月後の6月7日には死去している。したがって、下層頭塔造営開始の3月の時点で皇太后の病状は相当深刻だったようだ。

孝謙太上天皇との関係

下層頭塔の造営開始と光明皇太后の死去がかりに関連するとすれば、下層頭塔が、光明皇太后の病氣平癒を薬師如来を本尊として祈願する施設として創立されたとは考えられまいか。¹⁰⁾そもそも光明皇后が聖武天皇の病氣平癒を祈って創立したのが新薬師寺であるが、彼女の娘たる孝謙太上天皇が母のために発願し、母ゆかりの東大寺・新薬師寺双方との関係で造営地点を決めたのではないか。¹¹⁾施工が杜撰で土木工事としての出来が悪いのは、工事を急いだためともみられる。荒唐無稽ではあるが、あえて提案しておく。また、下層頭塔を通常の本塔ではなく特殊な土塔とした事情にも触れておく。第IV章7Dで述べるが、頭塔は中国の塔を意識した建造物の可能性がある。天平宝字年間に為政者の中国模倣熱が高まったことを勘案すれば、当時としてはバタ臭い斬新さを意図したとも考えられるだろう。

前項で、上層頭塔造願の目的に言及したが、そうした目的を持つ塔をまったくの新造でなく下層頭塔の改造という形で造った理由は、本項で推測したように下層頭塔が孝謙=称徳女帝ゆかりの施設だったことに一因があるのではなかろうか。

注

- 『大智度論』は『摩訶般若波羅密經』の注釈書であるが、多数の經典と比喻譚を引用し、仏教の術語と思想の百科全書的な性格ももっていた（加藤 1983）。松本伸之が明らかにしたように大仏の蓮弁線刻画に『大智度論』を典拠とする部分があるとしても（松本 1986）、教学的背景まで『大智度論』として良いかは疑問である（この点については松浦正昭の教示による）。なお、松浦正昭が第V章2で上層頭塔N3c石仏をジャータカの尸毘王本生譚と推定した。この物語は『大莊嚴經論』などにもあるが、『大智度論』第一・四・三十五が詳しく述べているから、上層頭塔石仏の造像にあたって蓮弁線刻画刻入時と同様に『大智度論』を参照したのかも知れない。
- 『華嚴經』が重々無尽の十蓮華藏世界の相を説くのに対し、『梵網經』が一相の蓮華藏世界を説くにとどまるが、彫刻によって十蓮華藏世界を表現するのが困難なため、『梵網經』の意により、一相の蓮華藏世界を彫刻したという考えは、大屋徳城の説とされている（狭川 1954・1968、井上1966、奥村 1977、松本 1986）。しかし大屋は「又、此盧舎那が華嚴の盧舎那で梵網の盧舎那でないといふについて、華嚴經も梵網經も共に蓮華藏世界を説くが、華嚴は重々無盡の十蓮華藏世界の相を説くに反し、梵網は一相の蓮華藏世界を説くに止る。然るに、彫刻に依って、十蓮華藏世界を表現することは困難であるから、梵網經の意に依り、一相の蓮華藏世界を彫刻したので

ある。否元は今の蓮座、蓮弁の外に今一つ別に石造の蓮弁があって、それに今の蓮弁と同じ様な彫刻があったことは信貴山縁起絵巻の大仏殿の絵に依って明かである。又盧舎那の光背に十六体の化仏のあることは八業二身を表現し、華嚴別教一乗を表示するものという説がある。(東大寺にいふ一説) 此説の前段は一応の理ありとするも、…という引用の中で示しているのであり(大屋 1937)、もとより大屋の説ではない。引用文が長く「此説」がどこからどこまでを指すのかわかりにくい上に、「東大寺にいふ一説」としか書いていないので、他の研究者の誤解を引き起こしたのだろう。私の調べた限りでは、「此説」は北河原公海が「華嚴教主としての大仏」で述べた考えと近い(北河原 1928)。

- 3 実忠がいくつかの法会を執行し、延暦9~17年(790~798)、大同元~弘仁6年(806~815)の2度にわたり華嚴供大学頭を勤めているから、教学面でも優秀な能力を持っており、とくに密部經典に明るかったとする説がある(山岸 1980)。たしかに華嚴供大学頭は華嚴宗の最高責任者で、華嚴教学の振興に当たる立場である。しかしそもそも良弁にさえ華嚴教学的章疏が現存せず、良弁なきあと、彼の直門だった実忠・等定・正進・忠慧・永興・良慧・良興・標瓊・鏡忍・安寛らにも華嚴の著作は現存せず、華嚴学者として名を馳せた学僧も出ていない(平岡 1994、石井 1994)。華嚴宗の教学的衰退は明らかだったようだ。
- 4 良弁が華嚴経講説を始めた場所は、平安初期の『円融要義集』には「金鐘道場」、『東大寺要録』所収の『東大寺華嚴別供縁起』には「金鐘山寺」と記す。羅索堂(今日の法華堂)と現存しない千手堂を金鐘寺の建物とみるのが有力な説である。しかし吉川真司は金鐘寺を東大寺丸山西遺跡にあて、羅索堂・千手堂は福寿寺を構成する堂宇で、華嚴経講説が始まったのも福寿寺だとした(吉川 2000)。かりに羅索堂が福寿寺に属し、ある時点から華嚴講が羅索堂で行われるようになったとしても、福寿寺で華嚴講が始まったとまで言えるのか疑問がある。吉川は良弁が羅索堂で華嚴経講説を興起したとするが、『円融要義集』・『東大寺華嚴別供縁起』ともに羅索堂とは記していない(堀池 1955)。また、『円融要義集』では「一紫衣青裙神僧」、『東大寺華嚴別供縁起』では「紫袈裟青裳」の沙弥が良弁に夢告を与えたとするが、堀池春峰は神僧が玄昉を暗示し、玄昉が良弁に華嚴経研究を指示したと解した(堀池 1973)。吉川はこれを受けて、玄昉は福寿寺本願光明皇后のブレンであるから、華嚴経講説と光明皇后および福寿寺との深い関係を想定した。ところが、華嚴にかかわる事跡がなく、直門から華嚴学者をだしていない玄昉が、同じ義淵一門とはいえ、良弁に華嚴研究の必要性を説くことはありえないとする説(石井 1994)もあり、説得力がある。また吉川は、良弁が作成に関与した「東大寺山堺四至図」に旧福寿寺の堂宇のみが描かれ、旧金鐘寺堂宇が記されていないことを強調し、福寿寺と良弁との密接な関係を示唆するが、吉川説では金鐘寺(中山寺)は天平勝宝2年の落雷以後荒廃しているわけだから、天平勝宝8歳の四至図に描かなくても当然であり、ただちに良弁と福寿寺との関係を示すものではない。
- 5 最澄の円戒思想に影響を与え、その思想基盤としての役割を果たした先行思想として、道璿を高く評価する説(常盤 1928・1943)は、広く常識化してきたらしい。道璿の梵網戒と鑑真の「瑜伽戒」が対立し(常盤 1928)、鑑真の来朝が道璿の律師退任の原因となったとする説(佐久間 1960)もある。これらは、道璿と鑑真の関係を際立たせ両極的対立関係に置いて、鑑真と最澄の関係が希薄なのに対し、道璿が『血脈譜』に名を掲げられていることを重視する見解である。しかしむしろ、道璿と最澄との戒律上・思想上の連繋はさして緊密ではなく、鑑真や法進に学ぶところと大差無かったとみるべきらしい(石田み 1963)。

なお、鑑真の戒律は四分律宗の伝統の中では捉えられない新しい性格を持ち、彼の建てた戒壇には法華多宝塔が安置され、菩薩戒の授戒と具足戒の授戒が同一戒壇上でなされ、梵網戒をあわせもっていたが、彼の戒を「瑜伽戒」と呼ぶのは根本的欠陥があるという(石田み 1963)。
- 6 美術史家の論には、唐招提寺金堂本尊の盧舎那仏を華嚴教主とするものもあるが(杉山 1967)、天台学の研究から『梵網経』に深い造詣を有した鑑真の思想基盤からみれば、梵網教主とすべきであろう。松浦正昭の教示によると、東大寺大仏と唐招提寺本尊の印相が異なるのはそのためだという。
- 7 『七大寺巡礼私記』には東大寺戒壇院の壇上に高さ1丈5尺の六重金銅塔があったと記すが安置仏には触れていない。問題は当初から釈迦・多宝二仏並座の多宝塔があったかどうかである。鑑真将来の阿育王塔様金銅塔がまず置かれ後に多宝塔に替わったとする説もある(横超 1942)。

多宝塔が正方形平面の下層の上に塔身が円形の上層を載せる形に定型化するのには平安時代の下層のように、法華経見宝塔品に基づき釈迦・多宝二仏を安置する多宝塔は平安時代前半にはないらしい。清水擴によれば、天台宗における多宝塔の本尊は、①最澄の法華思想に基づく法華経と多宝仏（9世紀初～10世紀末）、②円仁による天台密教化を受けた胎藏界五仏（9世紀後半～）を経て、③第18代天台座主良源による法華復興を受けて、ようやく11世紀初頭以降に釈迦・多宝二仏並座に落ちついたのであって（初例は藤原道長が寛弘2年（1007）に造立供養した木幡・浄妙寺多宝塔）、釈迦・多宝二仏の造頭と二仏を安置する仏堂の建立自体が、良源の門下・恵心僧都源信が永延2年（988）に再興した叡山如法堂以降だという（清水 1983）。如法堂では法華経を安置する小多宝塔の左右に釈迦・多宝像を配し、多宝塔と釈迦・多宝二仏並座像の組合せの初例であって、しかも見宝塔品でなく如来神力品が典拠だと言う。清水は東大寺戒壇堂伝来の釈迦・多宝像の扱いに苦慮したようで「実年代は奈良から平安」と幅をもたせた。この像については戒壇院創建期まで上がらず奈良末～平安初とする説（上原 1968）が強いが、頭塔E5b石仏の発見によって、奈良時代後半に確実に二仏並座像が存在することが判明した。また石田瑞麿は戒壇上に多宝塔を安置する教義的必然性を検討し、天台教学を受けた鑑真が多宝塔を戒壇上に安置するのは当然とみる（石田 1963）。なお、頭塔E5b石仏は宝塔を表現しない二仏並座像であるが、同類はすでに北魏時代に登場しており、出現の背景も考察されている（久野 1988）

- 8 下層東面仏龕に薬師浄土を表現した可能性は、古尾谷知浩の発案である。孝謙天皇の代、天平勝宝年間になって薬師信仰が一層鼓吹されたのも（西川 1977）、教養的環境として重要であろう。天平宝字年間には新薬師寺の整備充実期でもある。
- 9 時間的には菩提僊那の死（2月25日）の直後ではあるが、直接の関係は認め難い。
- 10 天平宝字6年3月の「造東大寺司告朔解」の香山薬師寺の項に「遷立壇所辛確一具」とあり（古5-130）、新薬師寺には「壇所」なるものがあつたようだ。同年4月および翌年正月の「造東大寺司告朔解」には壇所の掃浄および守のことを記し（古5-194・380）、何らかの工事または工事に伴う作業が行われていたと予想される（西川 1977）。移動可能な木製壇ではなく常設の施設があつたと推定できる。天平宝字4年10月16日の「随求壇所解」（古4-433・437）にも「壇所」の記載があり、これが正倉院文書において修法との関連を窺わせるものの初見であるが、これは東大寺関係である。

この「壇所」を、大きな円形土壇を内陣に収める現新薬師寺本堂に当てる説（西川 1977）が有力であるが、現本堂の年代は奈良時代末～平安時代初とみるのが通説で（岡田 1977）、天平宝字年間まで上げ得るのか疑問があろう。下層頭塔そのものを「壇所」と一致させるに足る証拠はないが、下層頭塔が薬師如来を本尊に密教的修法を行う「壇所」を含む施設であつた可能性を提唱したい。

- 11 本項で薬師浄土と推定される下層頭塔と孝謙太上天皇を結び付けた点について古尾谷知浩は、光明皇太後の死後の供養としては梵網経と浄土経が用いられたこと、天平勝宝年間に孝謙天皇が皇太後の平安のために造つたのが不空罽索観音図の曼荼羅であつたことを指摘し、孝謙と薬師信仰に距離があることを指摘した。しかし梵網経の使用は、Aですでに指摘したように、天平末年以降に梵網経が親霊追善供養の経として重視されていた趨勢によるのであろうし、浄土経の使用は光明最晩年の阿弥陀信仰への傾斜と関わるのだらう。しかし死後の追善供養と生前の病氣平癒祈願とは異なるから、薬師如来を本尊とする施設を造営することもあり得るのではなからうか。

参考文献

- 家永三郎 1937 「東大寺大仏の仏身をめぐる諸問題」『史学雑誌』49-2。
 家永三郎 1948 「東大寺大仏銅座華藏世界図の問題」『東大寺法華堂の研究』。
 石井公成 1994 「奈良朝華嚴学の研究—寿靈『五教章指事』を中心として—」『奈良仏教の展開』論集 奈良仏教1。
 石田端麿 1963 『日本仏教における戒律の研究』。
 石田端麿 1979 「鑑真来朝のもたらしたもの」『大法輪』昭和54年2月号。
 石田茂作 1930 『写経より見たる奈良朝仏教の研究』。
 井上 薫 1966 『奈良朝仏教史の研究』。

- 上原昭一 1968 「釈迦如来座像・多宝如来座像」『奈良六大寺大観』10。
 大屋徳城 1937 『寧楽仏教史論』。
 岡田英男 1977 「本堂」『大和古寺大観』4。
 奥村秀雄 1977 「東大寺大仏蓮弁毛彫図の研究」『東京国立博物館紀要』12。
 小野玄妙 1915 「東大寺大仏蓮弁の刻画に見ゆる仏教の世界説」『考古学雑誌』5-8。
 小野玄妙 1916 『仏教之美術及歴史』。
 加藤純章 1983 「大智度論の世界」『講座・大乘仏教2 般若思想』。
 鎌田茂雄 1993 「華嚴教学におよぼした法華経の影響—『華嚴五教章』を中心として—」『法華経の受容と展開 法華経研究Ⅻ』。
 岸 俊男 1966 「東大寺をめぐる政治的情勢—藤原仲麻呂と造東大寺司を中心に—」『日本古代政治史研究』。
 岸 俊男 1967 「県大養橘宿禰三千代をめぐる憶説」『末永雅雄先生古稀記念古代学論叢』。
 北河原公海 1928 「華嚴教主としての大仏」『寧楽』10。
 久野美樹 1988 「二仏並座像考」『MUSEUM』446。
 境野黄洋 1931 『日本仏教史講話』。
 狭川宗玄 1954 「寧楽仏教の一断面—東大寺大仏蓮弁毛彫蓮華藏世界私考—」『南都仏教』1。
 狭川宗玄 1968 「東大寺大仏蓮弁毛彫蓮華藏世界」『古美術』21。
 佐久間竜 1958 「東大寺僧安寛について」『続日本紀研究』5-11。
 佐久間竜 1960 「戒師招請について」『南都仏教』8。
 佐久間竜 1975 「実忠伝考」『名古屋大学日本史論集』上巻。
 島地大等 1924 「東大寺法進の教学に就て」『哲学雑誌』443。
 島地大等 1929 『天台教学史』。
 清水善三 1967 「平安時代初期における工人組織についての一考察」『南都仏教』19。
 清水 擴 1983 「多宝塔についての史的考察」『建築史学』1。
 杉山二郎 1967 『天平彫刻』。
 田村円澄 1999 『古代日本の国家と仏教』。
 塚本善隆 1964 「中国仏教史上に於ける鑑真和上」『南都仏教』15。
 筒井寛秀・杉山二郎 1963 「実忠和尚覚書—造仏所研究のうち(二)—」『美術史』49。
 常盤大定 1928 「伝教大師の法祖道璿の日本仏教史上に於ける位置を闡明す」『寧楽』10。
 常盤大定 1943 「道璿律師の日本仏教史上における位置」『日本仏教の研究』。
 西川新次 1977 「新薬師寺の歴史」『大和古寺大観』4。
 根本誠二 1985 「『扶桑略記』と授戒」『日本宗教史研究年報』6。
 平岡定海 1994 「日本華嚴の展開について(抄)」『奈良仏教の展開』論集奈良仏教1。
 堀池春峰 1955 「金鐘寺私考」『南都仏教』2。
 堀池春峰 1957 「道鏡私考」『芸林』8-5。
 堀池春峰 1963 「鑑真大和上東征の意義」『歴史評論』160。
 堀池春峰 1964 「奈良の頭塔について」『大和文化研究』9-5。
 堀池春峰 1965 「鑑真を廻る貴族の動向」『大和文化研究』10-9。
 堀池春峰 1967 「恵美押勝の乱と西大寺小塔院の造営」『日本歴史考古学論叢』。
 堀池春峰 1973 「華嚴経講説よりみた良弁と審詳」『南都仏教』31。
 松原弘宣 1975 「実忠和尚小論—東大寺権別当二十九ヶ条を中心に—」『続日本紀研究』177。
 松本伸之 1986 「東大寺大仏蓮弁線刻画の図様について」『南都仏教』55。
 森 蘊 1971 『奈良を測る』。
 山岸常人 1980 「東大寺二月堂の創建と紫微中台十一面悔過所」『南都仏教』45。
 山口光円 1963 「鑑真大和上と天台教学」『大和文化研究』61。
 横超慧日 1942 「戒壇について(下)」『支那仏教史学』5-3・4。
 吉川真司 1996 「東大寺三堺四至図」『日本古代荘園図』。
 吉川真司 2000 「東大寺の古層—東大寺丸山西遺跡考—」『南都仏教』78。

7 仏塔としての頭塔の系譜

頭塔は土を積み上げて塔身を造り、石積と石敷で覆い瓦を葺いた特異な仏塔である。日本に類例は少数ながら存在する (A)。なぜ当時一般的だった木造塔にしなかったのか、その事情の解明は容易ではないが、こうした特異な塔の系譜の追究は、造営の背景の穿鑿にも有効であろう。これらの塔の系譜に関する既往の説には南方系説がある。それをあらためて検討する (B) とともに、中国系・朝鮮系の可能性についても考察しよう (C・D)。

A 日本の類例

大野寺土塔 a、大阪府堺市土塔町・大野寺土塔

大野寺は行基が建立したいわゆる四九院の一つで平安時代の『行基年譜』には神亀4年(727)起工と記し、鎌倉時代の『行基菩薩行状絵伝』には本堂・門のほか土塔が描いてある。現在は真言宗に属し、創建期の遺構は数個の礎石と土塔のみである。土塔の現状は一辺54~59m、高さ9mの方墳状を呈す。『行基菩薩行状絵伝』には斜面に線を引いて段を表し、頂上には宝珠と露盤を描くが現存しない。1952年に無届けの土取りで東北部4分の1が破壊された際の緊急調査では、13段に築き各段上に瓦を葺いたこと、「日干し煉瓦」を積み上げて枠とした中に土を積んでいることを確認している(藤沢 1962)。翌53年に国指定史跡となり、1997年以降、堺市教育委員会が継続的に発掘調査しており、遺構については以下の成果を得た(堺市教育委員会 1999)。

- ①瓦積み基壇が存在する。
- ②各段の立ち上がり位置には基底部付近から粘土ブロックを積み上げて壁状とし、ブロック間に土を積む。
- ③壁の立ち上がり部には丸瓦ないし平瓦の凸面を外に向けて立てている。
- ④各段の上面には平瓦・丸瓦を葺いている。
- ⑤頂上部はひどく破壊されているが、凝灰岩を用いた施設があった。
- ⑥土塔の周囲には、盛土工事前に土塔の範囲を明示するために掘った溝が巡る。

上記③④の知見によって従来の復原案、すなわち、段がなく横線の区画が有るのみで隅棟だけに丸瓦を葺き他の部分は平瓦を並べたとする説(井上 1959)、各段の立ち上がり部分に瓦積み基壇状に瓦を積んだとする説(岡本 1990)は成り立たなくなった。塔身が扁平で各段の立ち上がりが低いので全体的印象は頭塔と異なるであろうが、各段の上面に若干の傾斜をつけ瓦を葺く点は頭塔に近い。②の粘土ブロック積み上げ技法は、行基が築造した狭山池の堤でも用いられており(狭山市教委 1999)、古墳時代以来の土囊積み上げ技術(大阪府文化財調査研究センター 1998)の系譜を引く可能性があり、行基が動員した土木技術者(土師氏など)の技術系譜を窺わせる重要な要素である。

土塔とその周辺からは、奈良時代の人名を範書きした瓦が多量に出土することで大正年間以来著名であった。人名には和泉・河内・摂津の氏族や僧尼、一般民衆の名が見え、行基の土塔建立に際して、各階層の人が瓦を寄進したことを示す。瓦を寄進した知識集団は瓦製作工人と別集団らしい(近藤 1999)。文字瓦のカバネの表記は土塔の造営期間(厳密には文字瓦の製作・寄進年代)の手がかりとなり、天平宝字3年(759)の改姓令以前とする説(東野 1980)と、以前から以後に及ぶとする説(森 1957、吉田 1987)に分かれ、下限を宝亀元年(770)以後

堺市教委の
調査成果

土木技術者の
系譜

とする説もある(井上 1959)。とくに開始期については、生存中か死後か決め手がない(井上 1959)、行基の晩年かまたは死後(吉田 1987)などの説が有力だった。しかし、斜面に葺かれた丸瓦・平瓦の製作技法は奈良時代前葉を下るものではなく、「神亀四年□卯年二月□□□」の銘がある軒丸瓦の出土から、土塔の完成は神亀4年からさほど下らないと考えて良くなった(近藤 1999)。

b、岡山県赤磐郡熊山町・熊山遺跡

吉井川の東側にある熊山山頂(標高508m)の南の峯上に位置する石積遺構である。方形で基壇上に3段に築く。東大寺や唐招提寺の戒壇に形が似るためか「熊山戒壇」という俗称があるが戒壇ではない。1937年に盗掘され頂部の竪穴に納めてあった遺物が四散した。第二次大戦後に陶製筒形容器と三彩釉小壺の存在を知った梅原末治が遺構・遺物を紹介し特殊な塔と論じた(梅原 1950)。その後、近江昌司が石積遺構の性格と年代、陶製筒形容器の用途を詳細に検討した(近江 1973)。1973～74年には調査と修復が行われた(熊山町教委 1974・75)。

熊山遺跡

基壇・塔身ともに石のみで築き、外に現れる石積や仏龕は偏平な割石を小口積みし、内部には小振りの石を詰め込んでいる。基壇および各段の上面が水平で、各段の出が深い点で頭塔とは異なる。基壇は方11.7～11.9m、塔身の一辺は下から順に、7.7～8.0、5.0～5.4、3.7～3.8m、高さは順に0.8～1.0、1.2～1.3、1.1～1.2mである。2段目の中央に高さ65～90、幅62～73、奥行90～136cmの仏龕を設ける。頂部の竪穴は下部方形、上部隅丸方形で径75～85cm、深さ2mである。創建年代は筒形容器(8世紀後葉)、三彩釉小壺(8世紀中葉)の年代観から「8世紀後半には完工した」との説がある(近江 1973)。

B 南方系説

南方系説は、頭塔やAで紹介した諸塔の外見がインド・ミャンマ・やインドネシアの仏塔に似ているという判断に基づいている。石田茂作・森蘊・斎藤忠らが古くから唱えてきた。

石田茂作は頭塔の「おし潰したような塔形」がインドの塔・ミャンマの泥塔に類似し(石田 1958)、仏塔の発展方向のうち、垂直に伸びる傾向が中国に、雛壇式に横に広がる傾向が南伝し、後者が婆羅門僧正(菩提僊那)・仏哲の来日に伴って伝来したとみる(石田 1972)。

森蘊はインドで12世紀頃に成立した『ヴィシュヌ寺院曼荼羅図』の諸尊配置を8世紀頃からの伝統と仮定したうえで、それと頭塔石仏の配置との類似に注目し、W1d石仏の表現法(釈迦を表現しない)とも合わせて「インドの要素」の充満を考え、実忠がインド人であった可能性まで考えた(森 1971)。

斎藤忠は、方錐状の段築式で低平な塔が中国・朝鮮にないのに対し、東南アジアにはあると指摘した。具体的には、①ジャワのボロブドール。中核が土盛りで、各段に歩道があり、龕を設けて石仏を配すなど頭塔に類似点があり、建造年代も近い。②カンボジアで10世紀頃発達するヒンドゥー寺院のピラミッド形基壇の構築技術は8世紀まで遡って良い。③古代ミャンマの方錐状階段式泥塔。これらの存在を根拠に、頭塔・土塔・熊山仏塔を南海を通じた東南アジア系と認め、僧侶による情報の流入を考えた(斎藤 1972)。

吉田靖雄は斎藤の説を受け、土塔を造営した行基ないし弟子の中に南海仏教と接触した者があったと想定し、行基と菩提僊那との親交、行基の菩提に対する、さらには菩提が体現するイ

インド仏教への深い関心の存在を考えた(吉田 1987)。

成立は困難

結論的には、南方系説は無理な点が目立ち、成立は困難と考える。

①、菩提僊那はインド人であるから、インドの仏塔の知識をもたらした可能性はある。しかし、インドの仏塔の基本形は半球状の覆鉢を主体とした覆鉢塔であって、インド内でも時代が下るにつれて、またガンダーラや新疆へ伝播するにつれて、覆鉢を乗せる円筒形の台基やその下の方形の基壇が高くなったのは事実だが(関野 1922、足立 1928・29、水野 1936、Franz 1980)、基壇が段台状にはならない。そもそも菩提が入唐したのは陸路・西回りと推定され(堀池 1995)、海路・東南アジア経由ではない。東南アジアにかりに段台状基壇の塔があったとしても、菩提がその知識を有した可能性は小さい¹⁾。菩提が経由したガンダーラや新疆に視野を広げても段台状基壇は少ない。

②、かりに菩提僊那や林邑僧仏哲が知識源としても、彼らの来日は天平8年(736)であるから、土塔の造営がそれ以前に遡るのなら、頭塔はともかく土塔と彼らは無関係となる。この場合、土塔の年代を神亀4年(727)に近い時期に限定できるのかが問題である。

③、そもそもポロブドール²⁾の方形段台はストゥーパを乗せる基台・基壇に当たるが、頭塔の7段の階段状部分は屋根があり基壇は別に有るから、中国系樓閣形層塔の塔身に当たり、両者を区別する必要があるだろう(D参照)。また土塔・頭塔は瓦葺だが、南方系の仏塔であれば瓦を葺かないのではないかという指摘がある²⁾。

ポロブドールの年代

④、ポロブドールの造頭は、775~815年(Lohuizen-de Leeuw 1980)、790~860年(千原 1983)などと考えられており、大野寺・土塔はおろか頭塔よりも下りそうである。それでもポロブドール以外に7・8世紀の類似した仏塔があれば良いのだが、ポロブドールの印象が強烈で類例が多いように思うと錯覚であって、東南アジアで8世紀以前に、方形段台をもつ仏塔が盛行していた証拠はない。インドネシアの研究者は巨石文化の石積テラス遺構がポロブドールの原型と考えており(千原 1983、坂井 1998)、もしそうなら方形段台をもつ仏塔がもっとあっても良さそうだが、今のところ、ポロブドールの形態はインドネシアの仏塔では孤立した存在である。カンボジアやミャンマに視野を広げると、両地域ともに方形段台が盛行したのは確かだが、年代ははるかに下り問題にならない³⁾。

C 朝鮮系説

朝鮮にも方形段台状の塔が4例ある⁴⁾。

安東石塔洞

a、慶尚北道・安東郡・北後面・石塔洞(秦 1971)

安東市の北西17kmの山奥、名山として知られる鶴駕山の北斜面に当たり、狭隘な盆地の西端にある。すぐ西に深い谷、北側に石塔寺という小寺院がある。周囲の眺望はきかない。片岩系の割り石を積んで方形の塔身を造る。石積は5重で1~3重はほぼ正方形だが、4・5重は東西が長い長方形を呈す。平面規模は第1段から順に13.2×13、10.8×10.9、7.7×8.2、5.9×5.5、2.6×2.1m、高さは順に130、120、100、80、100cmである。仏龕はない。頂上には石を盛り上げて板石を立ててあるが後世の仕事であろう。石積は大きめの割り石を前面を揃えて石垣状に積み上げ、裏込として小振りの石を雑な方法で詰め込んでいる。

義城石塔洞

b、慶尚北道・義城郡・安西面・石塔洞(秦 1971)

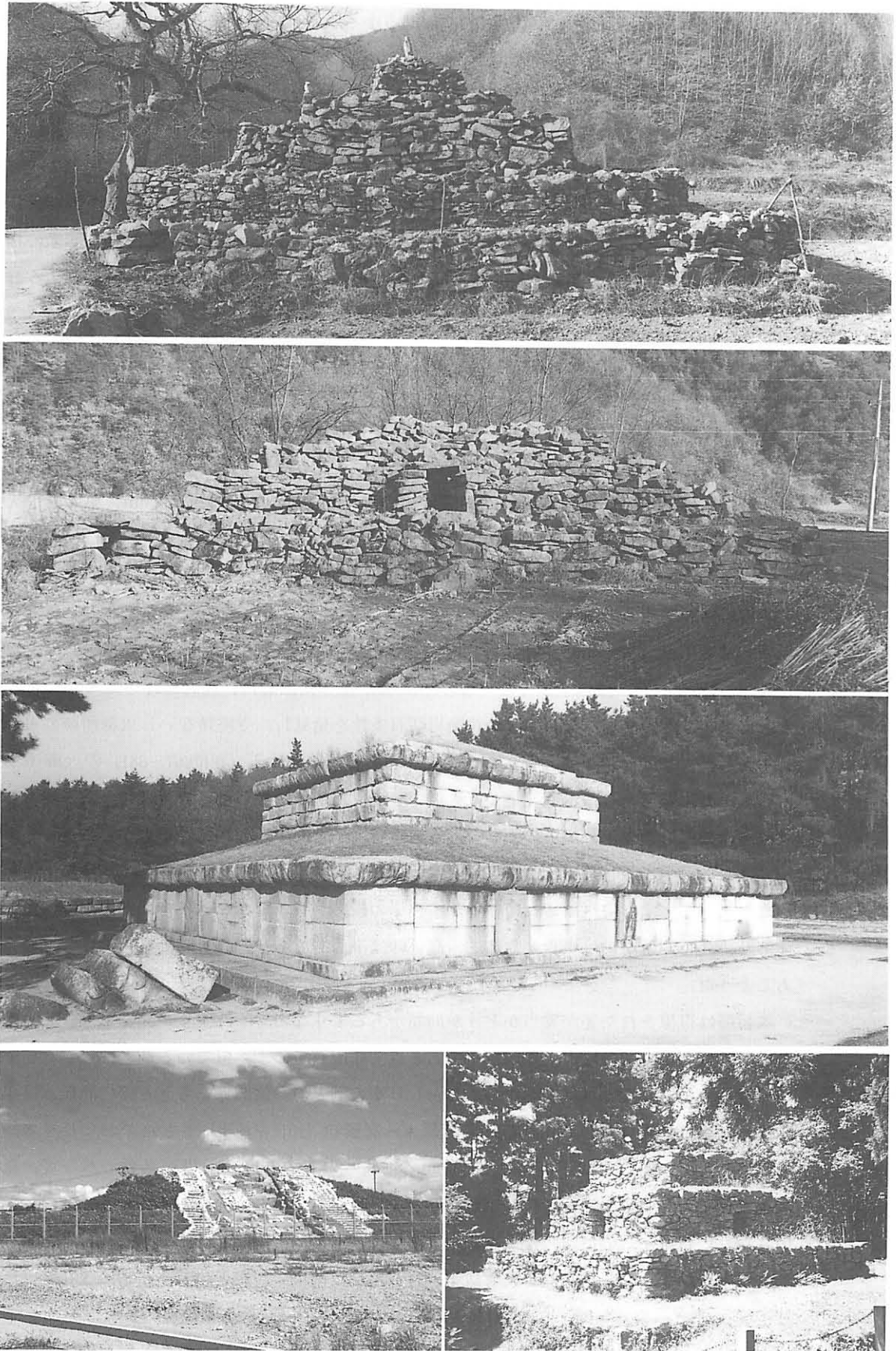


Fig.51 頭塔の類例 1 安東石塔洞、2 義城石塔洞、3 慶州陵旨塔、4 大野寺土塔、5 熊山遺跡

義城市の西北西5.5kmの山奥で、南北に伸びる小さい谷の西斜面にあり、やはり周囲の眺望はきかない。割り石を積んで南北に長い長方形の塔身を造る。東に下がる斜面にあるため、東が7段、南・北が6段、西が5段である。段が1周するのは3段目以上で、3段目から順に11.6×11.1、9.5×8.4、6.7×5.4、5.1×3.5、3.6×1.7mの平面規模で、高さは順に90、85、75、50、40cmである。東面の下2段を傾斜を正すための基壇と見る説もあり、東面の2段を加えた高さは5.1mである。4重目の中央に仏龕を設け、現状では東と南に石仏座像が安置してあるが、かつては西にもあった。龕の天井は板石で覆っている。頂上は窪んで崩れ本来の状況は不明である。割り石を用いた築造方法は安東塔と同じだが、積み方は雑で、外に見える石積と裏込の差は安東塔ほど明瞭ではない。

仏龕に石仏

伝仇衡王陵

c、慶尚南道・山清郡・今西面・伝仇衡王陵（秦 1971）

山清市の西北6.3kmの山間にある。地元では新羅の將軍・金庚信の曾祖父で金官国最後の王・仇衡王の陵と呼んでいるが、①②との類似から石塔と考える研究者が多い。山の急斜面を利用し、東向きに自然石を7段に積み上げる。各層ともおよそ方形ではあるが、隅はやや曲線をなし、頂上部は楕円形である。前面中央で総高11.15m、第1段の長さ20.6m、第4段中央には42×47×65cmの龕室がある。

陵 旨 塔

d、慶尚北道・慶州市・陵旨塔（斎藤 1938、申 1975）

陵旨塔は雁鴨池の東南1.5km、狼山の西麓にあり、善徳女王陵や四天王寺の北方に位置する。崩壊して古墳状（23×21m、高4.5m）になっていたのを、1937年に斎藤忠が調査し、頂上から1.5m下で、切石を3段以上積んだ一辺5.8mの方形壇を検出した。蓮弁を浮き彫りした板石、十二支像を浮き彫りした板石のほか花崗岩切石多数を発見し、寺院跡ないし火葬所跡の可能性を示唆した。1969～75年に黄寿永らが発掘調査を行い、文武王（在位661～681）の火葬の場所に建てた石造基壇をもつ木造建築が、火災で全焼した跡地にあらためて造営した塔と推定した。調査者は善山桃李寺・華嚴塔のような五重あるいは三重の塔と考えているようである。その後整備され、二重で下段（方23.3m）の四周に十二支石像を配し、各段の上縁に蓮弁を浮き彫りした石材を巡らす形に復原されているが、復原の根拠が明かではない。十二支像には法量上2種あり、高さが低いのは表現が立体的、高いのは平面的であり、二次的に集められた可能性があるようだ。

年代が問題

陵旨塔は復原された姿が妥当かどうか問題があるようなので除外するが、安東・義城・山清の塔は、割り石積みで各段の上面が水平である点で熊山石塔によく似ているから、後者が朝鮮系の可能性も考慮しなければならない。しかし日本の例との系譜関係を考える際の問題点は年代である。義城の塔は石仏の年代観から新羅末～高麗初（10世紀前半）とされており日本の例より下る（秦 1971）。ただしこれは、石仏が塔創建時のものという前提が必要であって、発掘調査されておらず塔の創建年代の手がかりがない現状では、系譜関係を速断することはできない。かりに新羅からの情報の流入を想定する場合、7世紀後葉～8世紀初頭に、新羅と唐との対立抗争が始まり、新羅が対日友好政策を打ち出した結果、新羅との交渉が密になり特に仏教界でそうであったが（関 1955、田村 1972、洪 1975、田村 1980、鈴木 1988）、それを下るにつれ日本と新羅との関係が険悪となったことが重要である。熊山石塔が8世紀後半以降に下るなら新羅との関係は考えにくいであろう。

日本の例との系譜関係は別にしても、新羅において方形段台状の石塔が出現した理由も重要な問題である。安東塔・義城塔は安東ないしその近傍にある。新羅では石塔が主流であり塼塔は少ないが、安東は塼塔が集中する地域である。後述するように頭塔や土塔が塼塔の模倣として出現したのであれば、新羅の方形段台状石塔も一般の層塔状石塔ではなく塼塔との関係で出現した可能性があるだろう。

D 中国系説

中国系と見る場合、二つの考え方があり得よう。

①、頭塔の復原の仕方によっては、いわゆる台榭建築的な構造となる。第VI章3B(5)で紹介した奈文研A・B案に近い。台榭建築とは版築で建物の芯となる高い台・段台を造り、その周囲に木造の部屋や廊下を設けて屋根を差し掛ける建築(関野 1956、田中 1980)であるが、その系譜と見る説である。ただし、中国で台榭建築がいつまで造られたのか、唐代にもあり得るのかが問題である。台榭建築は戦国時代から前漢代に盛行したが、すでに前漢の武帝が台榭建築としての神明台とともに木造楼閣の井幹楼を造ったことが画期となって、後漢以後に木造楼閣が流行し(田中 1999)、台榭建築は衰退に向かったようである。北魏洛陽城の永寧寺木塔(516~534年に存在)は、日干煉瓦で造った塔芯の周囲に殿堂式回廊をめぐるものであるが、塔芯の中には角材を縦横に組んでおり、塔芯が段台状の形態ではなく、塔芯に直接屋根を差し掛ける構造でもないから(中国社会科学院 1996)、台榭建築ではない。そして東魏の孝静帝が天平元年(534)に鄴への遷都にあたって洛陽の凌雲台などを解体し、北周の武帝が建徳6年(577)に北齊を滅ぼして鄴の銅雀台・金虎台・冰井台を破壊したのが最後となって、隋唐代には衰滅したようだ(関野 1956)。こうして見ると唐代には台榭建築は存在せず、8世紀に日本に伝わる可能性もない。

②、塼塔に発想源を求める説。B③で述べたように、南方系仏塔の方形段台はストゥーパを乗せる基台・基壇に当たるが、頭塔の7段の石積には屋根があり基壇は別にあるから、中国系楼閣形層塔の塔身に当たり両者は似て非なるものである。したがって基壇でなく塔身の形状どうしで比較する必要がある。その点で大野寺土塔・頭塔が瓦葺であるから南方系ではありえず、中国の塼塔の影響を受け、それを低平に表現したものに当たるとみなす上原真人や浅川滋男の説は説得力がある。現存する唐代の塼塔は瓦を葺いていないようだが、統一新羅期の安東新世洞七層塔と安東東部洞五層塔は瓦葺で、唐代の塼塔にも瓦屋根があったことは十分推定できる。

B・C・D①で検討したように南方系・朝鮮系・中国台榭建築系のいずれも難点があり、結局、中国の塼塔を発想源と見るのがもっとも妥当であろう。ただし、平城宮第一次大極殿院の塼積擁壁を挙げるまでもなく、日本でも塼は多用しており、塼塔そのものを造り得たにもかかわらず、大野寺土塔では土のみ、頭塔では土・石で築いており、決して塼塔ではないのがこの説の難点である。しかし、素材は異なるものの、軸組でなく素材の単純な積み上げで造る工法、瓦を葺くものの軒の出がほとんどない形状、木造塔の場合よりも明瞭に現れる各層のセットバック、などから発想源として塼塔を考えるのは無理ではあるまい。

なお、大野寺土塔や頭塔の段台状部分が基壇ではなく、あくまで塔身であるという主張には反論があるだろう。日本の塔も含む中国系楼閣形多層塔の塔身は、その上にストゥーパに由来

台榭建築

塼塔

塼塔が
発想源

する半球形の覆鉢を乗せるから、塔身自体がそもそも基台・基壇に当たると見る考え⁷⁾だ。

しかし楼閣形多層塔の塔身が多重基壇に由来するとしても、すでに北魏において、日本で普通に見られるような軒の出が深い屋根を持つ木造多層塔が確立しており（雲崗石窟第1・2・39窟の中央塔、第2・5・6・11・14・39窟の浮き彫りに例がある。）、塔身とは別に露台としての基壇を持つから、以後の楼閣形多層塔の塔身はもはや基台とは呼べない。埴造多重塔の場合は軒の出が浅く、軒の形状も木造塔とは異なるから、それをガンダーラや新疆の仏塔の多重基壇を水平に区分する線形や持送りの後身と見れば（足立 1928・29）、木造塔より基台の特徴を多分に残すとは言える。しかし、北魏あるいはそれを大きくは下らない河南省嵩嶽寺塔（関野 1922）には多重基台の雰囲気が残るとは言え、唐代に至れば埴塔でも木造塔の塔身と同様にもはや基台とは言い難い。頭塔の石積も、低平ではあるが仏龕上には屋根を乗せており、確たる基壇が別にあるから、7段の部分はあくまで塔身であって基壇ではない。

情報の
流入契機

大野寺土塔や頭塔の造営者が、木造塔にせずあえて方錘階段状の「土塔」とした直接的事情は不明ながら、そうした形態を知り得た前提について考える。かりに埴塔を発想源とした場合、埴塔に関する情報は、いつから何を契機に流入したのであろうか。7世紀後葉の遣唐使中断期＝新羅との友好期に新羅の埴塔の様相が伝わった可能性もないわけではない。しかし、唐からの影響の方がより大きかったと考える。大宝2年（702）に出発し慶雲元・4年（704・707）に帰国した遣唐使は、33年ぶりに再開した遣唐使であって、その帰国直後から矢継ぎ早に平城遷都の準備が始められた事実から、彼らがもたらした唐に関する生情報が、支配者層に強烈なインパクトを与えたことがつとに指摘されている。以後、数次の遣唐使が政治的方面に限らず文物についても多くの新情報をもたらしたが（東野 1979・87・88、中井 1987）、入唐留学僧や渡来僧が、日本で6世紀末以来慣れ親しんだ木造軸組の楼閣形多層塔とは異なり、唐土で盛行していた埴塔に関する知見をもたらした可能性は高い。もっとも日本で埴塔そのものや埴塔風の塔の造営が定着しなかったことは確かだが、行基が大野寺土塔の造営に際して、あるいは造東大寺司に指示を出し得る立場の人間が下層頭塔の造営に際して、より強く大陸色を打ち出せる造形として意識したのではないか。行基の場合、そこに盛り込むべき仏教的理念に関わり、中国を突き抜けて天竺を意識していた可能性すらあるだろう。頭塔も同様かもしれないが、天平宝字4年頃という創建年代を勘案すると、平城宮第一次大極殿院の解体後、宝字の大改作で新造した宮殿が唐長安城大明宮麟德殿の模倣であったように（奈文研 1982）、為政者の中国かぶれが一時的に表面化した時期であるのが符合するのではなかろうか。

為政者の
中国模倣熱

注

- 1 南伝仏教に関する文物や知識自体は、南海貿易を一手に引き受けていた新羅経由で流入するルートがあっただろう（杉山 1968、鈴木 1988）。良弁が新羅経由で入手した南伝系密部の多目多臂図像をもとに東大寺法華堂の不空罽索観音像を造立したという説もある（杉山 1968）。
- 2 上原真人が筆者に直接指摘した。氏は頭塔を中国系とみている。ただし、「南方系の建造物なら瓦を葺かない」という論法に反論は可能だ。第二次大戦前のいわゆる帝冠様式（代表例は東京国立博物館本館、九段会館（旧軍人会館）、京都市立美術館）が、鉄筋コンクリートのビルの上に見事な本瓦葺の屋根を載せているように（飯島 1996）、ある建築様式のイメージが伝わった場合、部分要素を交換する、あるいは在来の要素を付加するといったことは起こり得る。ポロブドールのように、段台基壇の壁面に設けた仏龕に仏像を置く建造物の情報のみが伝わった際に、仏龕の上になじみ深い瓦屋根を葺いてしまったという交換は有り得るだろう。また、3代將軍家光の頃に長

崎の通事島野兼了がアンコールワットを描いた図面(杉山 1968、斎藤 1975)では、建物や塔は木造瓦葺のように描かれている。自身は石造と知っていても、他人にイメージを伝える絵では、なじみのある仕方を書いてしまったと思える。これも変換の一種であろう。ちなみにアンコールワットの屋根は、切石を繋ぎ合わせて蒲鋒形曲面に造り聖なる大蛇ナーガの胴を模し、表面にナーガの鱗の文様を施している。回廊の屋根を合わせると、巨大なナーガがとぐろを巻いて本殿を守護しているように見えるという(町田編 1968)。ただし土塔や頭塔の系譜に関しては、段台状基壇を持った南方系仏塔の情報が8世紀以前に日本に流入したとは、下記④の根拠によって考え難い。

- 3 ミャンマでの仏塔の発展を、建造物の編年研究(千原 1983、田村1987)を参照しつつ略述する。インドや東南アジアの宗教建造物では増拵(マウルディ)が行われることが多く、現状が創建期の形態と一致する保証がないが、確かめる術もなく、規模はともかく形態に大きな変更はないと仮定して話を進める。結論的にはミャンマにおける方形段台の出現は11世紀第3四半期に下る。

ピュー族の築いた大規模都市遺跡シュリ・クシュトラ(4~9世紀)には東南アジア最古の仏塔3基が現存する。7~8世紀の造頭で、円形ないし多角形の段台基壇を持ち、ポーボーデー・パゴダの覆鉢は円筒形で頂部のみが低い円錐形、バヤーマー・パゴダとバヤーチー・パゴダはラグビーボールを半裁した形。平頭を欠き傘蓋が小さい。この異様に縦長で裾が広がらない覆鉢のストゥーパはピュー型と呼ばれるが、インドのサルナートのデーメク塔(6世紀頃)の系譜ではないかと私は考えている。

ミャンマ最初の統一王朝たるパガン王朝時代(11~13世紀)に数段階を経てミャンマの仏塔が完成する。11世紀初頭のブーバヤー・パゴダ、ンガチュエ・ナダウン・パゴダはピュー型で、円形ないし多角形の段台基壇、砲弾形の覆鉢をもつが、シュリ・クシュトラの塔と異なり、傘蓋部が大型化し高い円錐形となり、覆鉢上半と連続的につながる。覆鉢上半以上については、以後この形で定型化する。11世紀第3四半期のローカナンダ・パゴダ、ミンカパー・パゴダではピュー型の趣をまだ残し、8角形段台基壇で覆鉢が縦長だが、覆鉢の下半が裾広がりとなり、定型的な鐘形覆鉢が成立する。ほぼ同時期のシュエサンドー・パゴダでは、2重の8角形段台を5重の方形段台上に乗せる基壇が出現するが、基壇に対して覆鉢が小振りでもまだ縦長である。やや遅れて1089年頃に完成したシュエジーゴン・パゴダでは、3重の方形段台上に1重の8角形段台と1重の円形段台に乗せる基壇であるが、シュエサンドー・パゴダとの差は、覆鉢の径が太くなり大型化したことである。このシュエジーゴン・パゴダの形が、以後のミャンマ仏塔の原型となった。12世紀末のダンマヤジカ・パゴダ、13世紀末のミンガラゼディ・パゴダなどパガンを代表する仏塔も、細部に差はあるがシュエジーゴン・パゴダを踏襲する。ミャンマ最後のコンバウン王朝のミンドン王が、首都マンダレーに1857年に建設したクトードー・パゴダの中心塔はシュエジーゴン・パゴダを直模したのである。

もちろん仏塔の基壇の形は14世紀以後も変化を遂げた。段台状基壇の段数が増えるとともに上面が斜面となり、平面も8角形のみに変化すると、最終的にはヤンゴンのシュエダゴン・パゴダ、スレー・パゴダ、あるいはペーグーのシュエモードー・パゴダのように、覆鉢の下半と一連の8角錐状となるに至った。

なお筆者は国際学術交流「南アジア仏教遺跡の保存整備に関する基礎的研究」の一環として、1999年1月24日~2月4日に安田龍太郎・森本晋とともにミャンマを訪問し、上記のパゴダのほとんどを観察することができた。

カンボジアの真臘期(7~9世紀)、アンコール期(802~1431年)の方形基壇の建物は基本的にヒンドゥー教の祠堂であって仏塔ではないが、東南アジアにおける方形段台基壇の例として引かれることが多いので、触れておく。方形段台の多重基壇上に祠堂を設けるのは「堂山型式」と呼ばれ、宇宙の中心の聖なる山=マハーメール(須弥山)を象徴する(千原 1983)。

クメール王インドラヴァルマン1世(在位877~889)が、はじめて本格的都城ハリハララヤを建設し、その中心に881年に築いたバコンは、明確にマハーメールの象徴であり、大規模な5重基壇をもつ。それに先行する879年創建のプレア・コーの基壇は1重にすぎない。次の王ヤシヴォアルマン1世(在位889~910)が築いた新都ヤショグラブラ(第1次アンコール)の中心寺院ブノム・バケー(900年頃)は6重基壇である。しばらくの不安定期を再統一したラージェンドラバルマン2世(在位944~968)がアンコールに築いた東メボン(952年)は低平な3重基壇、プレ・ループ(961年)は急な3重基壇である。以後については省略するが、カンボジアにおいて方形段台基壇が本格化するのは9世紀末であろう。

- 4 筆者は1998年12月16日~17日に安東塔・義城塔・陵旨塔を観察することができた。実見に際して

は韓国・国立文化財研究所の鄭桂玉、安東民俗博物館の孫祥洛、国立慶州文化財研究所の南時鎮の各氏のお世話になった。山清塔については東亜大学の沈奉謹教授にご教示頂いた。

- 5 真の台榭建築と、高い基台上に単層の建物を乗せただけで台の周囲に木造の居住空間を持たない建築とを区別する必要があるが、文献史料に「○○台」と記載してある場合は判別が難しい。関野雄の「台榭考」でも明瞭に区別してはいない。なお台榭建築については浅川滋男の教示を得た。
- 6 上原・浅川からの直接の教示による。
- 7 楼閣形多層塔の塔身の起源については、いくつかの説がある。①、基壇が高いガンダーラ式仏塔の形が絵画や彫刻によって伝わり、それを模倣した磚塔がまず成立し、しだいに基壇部分が発達して多層塔となり、これが中国在来の楼閣建築と合して木造多層塔となった(関野 1922)。②、ガンダーラや新疆で発達した円柱形ないし角柱形の高い多重基壇の形を木材で模倣するうちに、在来の木組手法、建築的伝統が加わってきて、在来の木造楼閣に近付いた(足立 1928)。③、①②説では各層を単なる基壇にしないで室にする理由が説明できないと批判。インドのストゥーパが南北朝に伝わる以前にガンダーラのヴィマーナ(四角な高層建築の頂上に小ストゥーパを乗せた形から出発する塔廟)形が伝わり、それが漢代以来の神仙思想と結びついた高大な木造観台建築と結びついて楼閣形の仏教寺院が形成され、ストゥーパと仏殿を兼備していたが、後に塔とは別に仏殿ができたのでストゥーパの意味のみとなった(村田 1940・52・54)。④、高昌で見られる有龕角柱形高塔が、在来の木造楼閣と結合して仏龕を持つ楼閣形多層塔(Nischenpagode)が成立した(Franz 1980)。⑤、漢代以来の宗教的・象徴的機能を持つ建築、具体的には明堂、神仙思想に基づき承露盤を乗せた台、2基一対の闕、と同類の高塔建築を仏教が取り入れた(Ledderose 1980)。

以上の説はそれぞれに問題がある。①説では中国の仏塔で磚塔が木造塔より先に出現したのかどうか。②説では、ガンダーラ・新疆風の木造塔(各層に屋根を持たない形となろう)が楼閣風より先に実際に出現したのかどうか。④説では、挙げられた高昌の諸例がヴィマーナでなく確かに仏塔だとしても、年代が判然とせず、北魏の楼閣形木造塔に先行する保証がない。⑤説について。楼閣形多層塔が在来の木造楼閣の形を取り入れていることは、日本の研究者が第二次大戦前から指摘しており(関野 1922、足立 1928、水野 1936、村田 1940)、なんら目新しい説ではない。Ledderoseの指摘の問題は、明堂・台・闕には台榭建築や高い基壇上の単層建築もあり得て、楼閣形多層建築とは限らないこと。単にそうした建築が存在しただけでは、ストゥーパとそれを結合させた必然性が理解できないことで、①～④の諸説はいずれもその点に関わるものであった。③説の問題点は濱島正士がすでに指摘している。つまり、2重以上にも仏像を安置した理由、ヴィマーナ(マハーボディ寺)の相輪と雲崗石窟の塔の相輪との形態の差、現存最古の北魏嵩嶽寺塔がヴィマーナ系とは見られぬ点である(濱島 1998)。第2点については、現状のマハーボディは19世紀末にミャンマー人が大改修した姿であり、その相輪には中世ヒンドゥー寺院のカジュラーホ型シカラ(神谷 1996)先端部の影響が看取され、古代のヴィマーナの相輪の例とはしがたいこと、ピハール出土円板に表されたヴィマーナ(マハーボディに似る)の頂上には小ストゥーパを表現しており(村田 1940)、こちらをヴィマーナの相輪の例とすべきこと、を指摘しておきたい。

以上のように、楼閣形多層塔の起源については今後も検討を要する。ただし塔身の起源に限れば、①②④は高基壇ストゥーパ説、③がヴィマーナ説であるが、村田氏もヴィマーナの起源について、「高塔形の台上にストゥーパをおいたのが初期の形」と述べており、塔身のルーツについては結局大差がなくなってしまい、高大な基台・基壇説に落ちつく。

参考文献

- 足立 康 1928・29「北魏塔婆様式の系統に就いて」『国華』450～452・455・459～462。
 飯島洋一 1996『王の身体都市』。
 石田茂作 1958「頭塔の復原」『歴史考古』2。
 石田茂作 1972『塔 塔婆・ストゥーパ』日本の美術77。
 井上 薫 1959『行基』。
 梅原末治 1953「備前熊山上の遺跡」『吉備考古』86。
 大阪府文化財調査研究センター 1998『蔵塚古墳』。
 近江昌司 1973「備前熊山仏教遺跡考」『天理大学学報』85。
 岡本敏行 1990「大野寺の土塔復原」『千葉乗隆博士古稀記念 日本の社会と仏教』。
 神谷武夫 1996『インド建築案内』。

- 熊山町教育委員会 1974 『熊山遺跡 岡山県赤磐郡熊山町史跡熊山遺跡緊急調査概報』。
- 熊山町教育委員会 1975 『熊山遺跡 岡山県赤磐郡熊山町史跡熊山遺跡石積遺構修理報告』。
- 近藤康司 1999 「和泉・大野寺の造瓦集団と知識集団」『瓦衣千年 森郁夫先生還暦記念論文集』。
- 斎藤 忠 1938 「狼山麓の一遺構址」『昭和十二年度古蹟調査報告』。
- 斎藤 忠 1972 「わが国における頭塔・土塔等の遺跡の源流」『大正大学研究紀要』57。
- 斎藤 忠 1975 「島野兼了のアンコール・ワットの図について」『図録東洋仏教遺跡』。
- 堺市教育委員会 1999 『堺市文化財調査概要報告書』80。
- 堺市教育委員会 1999 『史跡土塔発掘調査現地説明会資料』。
- 坂井 隆 1998 「群島部（マレー語世界）の考古学」『東南アジアの考古学』。
- 狭山市教育委員会 1999 『狭山池』。
- 杉山二郎 1968 「日本とアンコール」『アンコール・ワット』世界の文化史蹟6。
- 杉山二郎 1968 『大仏建立』。
- 鈴木靖民 1988 「新羅・渤海との文化交流」『図説検証 原像日本』4。
- 関 晃 1955 「遺新羅使の文化史的意義」『山梨大学学芸学部研究紀要』6。
- 関野 貞 1922 「南北朝時代の塔と健陀羅塔との関係」『建築雑誌』427。
- 関野 貞 1922 「嵩嶽寺十二角十五層磚塔—現存支那最古の磚塔—」『建築雑誌』428。
- 関野 雄 1956 「台榭考—中国古代の高台建築について—」『中国考古学研究』。
- 田中 淡 1980 「先秦時代宮室建築建築序説」『東方学報』52。
- 田中 淡 1999 「漢代の建築」『よみがえる漢王朝』。
- 田村圓澄 1972 『アジア仏教史日本篇1 飛鳥奈良仏教』。
- 田村圓澄 1980 『古代朝鮮仏教と日本仏教』。
- 田村克己 1987 「パガンと黄金の仏塔」『アンコールとボロブドゥール』世界の大遺跡12。
- 千原大五郎 1983 『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』。
- 坪之内徹 1979 「大野寺の方錘形塔婆遺構と知識瓦」『摂河泉文化資料』14。
- 東野治之 1979 「奈良時代遣唐使の文化的役割」『仏教芸術』122。
- 東野治之 1980 「備後宮の前廃寺の文字瓦」『草戸千軒』84。
- 東野治之 1987 「文化の様相」『古代を考える 奈良』。
- 東野治之 1988 「遣唐使と唐・西域文化」『図説検証 原像日本』4。
- 中井真孝 1987 「宗教と学問」『古代を考える 奈良』。
- 奈 文 研 1982 『平城宮発掘調査報告』XI。
- 濱島正士 1998 「永寧寺九重塔と日本の仏塔」『北魏洛陽永寧寺』奈良国立文化財研究所史料47。
- 藤沢一夫 1962 「土塔」『大阪府の文化財』。
- 堀池春峰 1995 「婆羅門菩提僧正とその周辺」『奈良仏教と東アジア』。
- 町田甲一編 1968 『アンコール・ワット』世界の文化史蹟6。
- 水野清一 1936 「六朝芸術における漢代の伝統」『東洋史研究』1-4。
- 村田治郎 1940 『支那の仏塔』。
- 村田治郎 1952 「中国の樓閣形塔婆の起源」『日本建築学会研究報告』18。
- 村田治郎 1954 「中国仏塔の起源私解」『日本建築学会研究報告』27。
- 森 蘊 1971 『奈良を測る』。
- 森 浩一 1957 「大野寺の土塔と人名瓦について」『文化史学』13。
- 吉田靖雄 1987 『行基と律令国家』。
- 秦 弘燮 1971 「所謂方壇式特殊形式の石塔数例」『考古美術』110。
- 秦 弘燮 1974 「所謂方壇式特殊形式の石塔数例補」『考古美術』121・122。
- 申 榮勲 1975 「陵旨塔の構成」『考古美術』128。
- 洪 淳昶 1975 「七・八世紀における新羅と日本との関係」『新羅と飛鳥・白鳳の仏教文化』。
- 中国社会科学院考古研究所 1996 『北魏洛陽永寧寺』。
- Franz,H.G. 1980. Stupa and stupa-temple in the Gandharan regions and in Central Asia, The Stupa : Its Religious, Historical and Architectural Significance, Wiesbaden.
- Ledderose,L. 1980. Chinese prototype of the pagoda, The Stupa : Its Religious, Historical and Architectural Significance, Wiesbaden.
- Lohuizen-de Leeuw,J.E. 1980. The Stupa in Indonesia, The Stupa : Its Religious, Historical and Architectural Significance, Wiesbaden.

8 凝灰岩製六角屋蓋石塔の復原

第IV章2 B(3)・第VI章2で述べたように、奈良時代末に頭塔の頂上に立っていた刹柱が落雷で廃絶し、平安時代初頭に凝灰岩製六角十三重石塔に建て替えたと推定できる。根拠は、第199次調査でN7 a石仏前から出土した大型屋蓋1点、第277次調査で採集した同形の小型品1点、心柱痕跡の上で発見した凝灰岩製台石という物的証拠に加えて、『七大寺巡礼私記』が記す平安時代末の頭塔の状況たる「十三重の大墓」が、十三重の何らかの施設の存在を示唆し、それが石塔にふさわしいと判断したからである。ここでは、奈良・平安時代の六角塔の類例を調べ(A)、奈良時代の六角十三重石塔の代表例たる奈良市田原町の「塔の森石塔」を復原し(B)、それを参考に頭塔石塔の復原を試みる(C)。

A 奈良・平安時代の六角塔¹⁾

(1) 頭塔石塔の類例

①正倉院蔵三彩塔(橋崎 1975)

現状では、基座・基壇および7枚の屋蓋からなる。各部はそれぞれ分離し、銅線の心柱が基壇より屋蓋の中心を縦貫し、各部を連結する構造になっており、相輪・軸部(塔身)は失われている。基座は一辺7.7cm・厚1.7cmの正六角形の板状。基壇は一辺4.5cm・高さ3cmで、地覆・葛を削りだし東はない。屋蓋は長径6.3~8.2cmで、屋蓋の各辺はやや内湾する。軒先面は隅棟に向かって反り上がる。上面中央に六角形の作り出しがあり、その隅から屋蓋の隅に向かう突線で隅棟を表現する。隅棟は軒先に向かってわずかに反りをもつ。隅棟の先端は、外傾するものと内傾するものに分かれる。屋蓋の下面には六角形の基部(塔身)と、それと相似形をなす1~2段の造り出しで垂木を表現する。屋蓋7枚は、銅線を通す孔径の大小、上面作り出しの中心から隅に向かう刻線の有無によって2組に分類でき、本来五重塔が2基あったと推定されている。心柱には最上層屋蓋と相輪の境目らしき場所に小孔が穿っており、基壇上面からその小孔までの間に最下層塔身と5枚の屋蓋が収まるとすれば、塔身の高さは約2.5cmとなる。

五重塔か

②正倉院蔵石塔(橋崎 1975)

白大理石製で、基壇と最上層屋蓋が遺存する。三彩塔の基壇および第七層屋蓋と同大である。おそらく中国の作で三彩塔の原型と推定できる。

③平城宮馬寮東方地区(第239次調査)出土黄釉塔(巽 1994)

屋蓋断片が1点ある。築地塀で周囲を囲み、桁行5間の正殿、同11間の後殿、同21間の東西脇殿、計4棟の礎石建物を整然と配する区画の、正殿S B15750の東妻近辺の瓦堆積層から出土した。一辺2.9~3.0cm、高さ1.5cmの正六角形に復原できる。屋蓋の特徴は①②とよく似る。上面の屋根部の釉下には瓦列を表したと思われる軒先に直交する針書き線が部分的に観察され、六角形作り出しの心柱を通す孔の脇には素地焼成前に針で「五」と刻む。五層目を表すのだろう。下面の垂木を表現する作り出しは3段で、各造り出しの角は隅に向かって反りを持つ。全面に釉を施し、上面は黄褐~暗黄褐色に、下面は明黄褐色に発色し、下面の基部と第一段目の境には三叉トチンの目跡をとどめる。

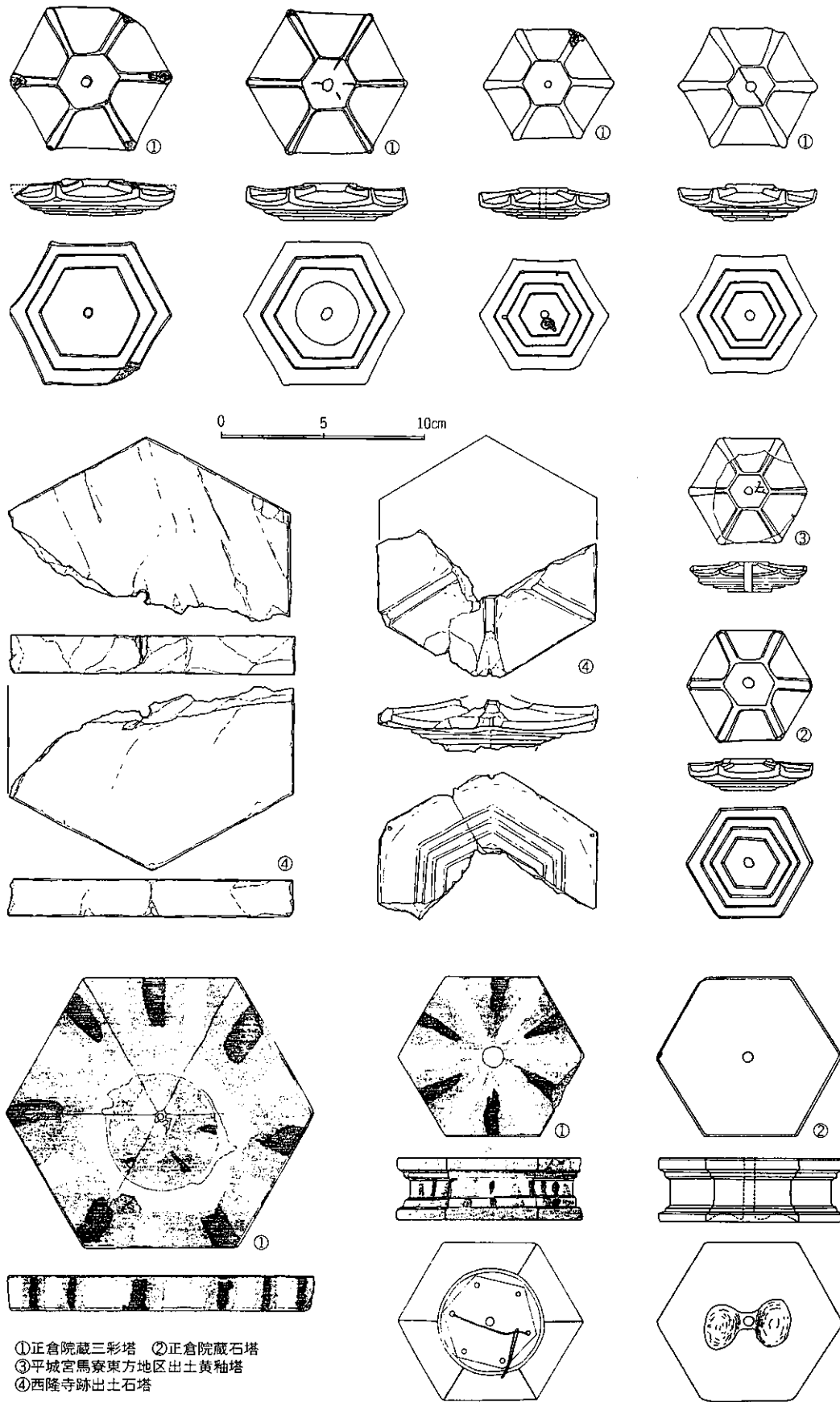


Fig.52 六角屋蓋石塔関連資料 (1:3)

④西隆寺跡（平城宮第306次調査）出土石塔（次山 2000）

金堂南側の遺物包含層から出土した。屋蓋と基座がある。屋蓋は一辺6.1cmの六角形で、1/2を欠失する。花崗岩製で雲母片を多量に含む。上面には隅棟を、下面には4段に垂木先を表現する。隅棟先端の内側には、径1.2mm、深さ4.5mmの小孔をそれぞれ1孔ずつ穿ってある。破断面で観察するかぎり、孔径は一定で、中心に向かってわずかに傾斜する。おそらく風鐸あるいは瓔珞状のものを装着していたのであろう。基座は、一辺7.9cmの正六角形、厚さ1.9cmの板状で約1/2を欠失する。風化が著しく判別が困難だが、花崗岩系の石材の可能性はある。上面と側面は丁寧に研磨してあり、下面は荒い状態である。中心からわずかにはずれた位置に、心柱を通すための径5mm程の貫通孔がある。

⑤奈良県奈良市塔の森石塔についてはBで詳述する。①～④は⑤や頭塔石塔と形態が類似した小型品だが、ほかの図像や遺構なども(2)で一瞥しておく。

(2) 図像・瓦塔・遺構の例

図像 奈良県長谷寺蔵の銅板法華説相図の塔は、7世紀末の製作で現存最古の六角塔遺品であるが、第3層上に3本の相輪を立てる特殊な多宝塔で屋蓋がない。東大寺大仏蓮弁の蓮華蔵世界図にも六角ないし八角堂の描写がある。

瓦塔 福島県須賀川市上人壇廃寺と愛知県猿投古窯跡で土した。上人壇廃寺は塔を南、金堂を北に配する古式の伽藍配置で、南基壇上の覆屋に瓦塔を納めたらしい。瓦塔は小片のみだが復原案によると三重で、径76cm、高さ35cmの高い基台があり、初層塔身は径42cm、高さ17cmと太めである。屋蓋は照り起りをもつ（永山倉造 1981）。年代は手がかりに乏しいが、8世紀説がある（松本 1983）。猿投古窯跡例は斗栱の小片2点のみで軸部や屋蓋は不明であるが、9世紀とみられる（松本 1983）。

建築遺構 和歌山県かつらぎ町佐野廃寺には掘立柱建物遺構がある。寺は7世紀後半の創建で塔を東、金堂を西に置く法起寺式伽藍配置と推定されている。六角形建物は講堂の東北にあり、長径6m、一辺3m。中心柱があるので、回転経架をもつ経蔵とみる説がある（藤澤 1981）。奈良県当麻町加守寺跡には長六角形基壇建物の遺構があるが、単層の仏殿に復原でき塔ではない（近江 1997）。

厨子 建物以外の構造物では厨子がある。西大寺の薬師金堂・弥勒金堂には六角の仏殿様厨子があったと推定され（堅田 1991）、当麻寺の曼荼羅厨子は長六角形である。

建築技術の点では、六角建物の方が八角建物より困難であるという。六角建物は現存建物で30数棟あるが、ほとんど室町以降であり、鎌倉以前では現存建物、遺構、文献に見える例ともに八角建物がはるかに多い（田中 1943、菅谷 1973、堅田 1991）。建築技術に拘泥する必要がない石塔や瓦塔ではむしろ六角の方が多い。では両者の性格はいかなるものであろうか。

八角建物でも仏寺の場合、故人の追善供養堂が多いようであるが、前期難波宮の八角殿の場合、楼閣、仏殿、鐘楼、中国の明堂・封禪の制における八角方壇の影響（網干 1975）、転輪蔵（藤澤 1981）、孔子など聖賢をまつる聖堂（堅田 1991）、など様々な説がある。六角の例では、①～④は平城宮の中枢部や寺院の屋内に置いたと推定でき、特定人物の念持仏的礼拝の対象、⑤は立地からみて先祖供養塔の可能性が強い。問題の⑥頭塔出土例は、故人追善供養、先祖供養とは考えがたく、あえて六角塔とした理由は定かではない。

B 塔の森石塔の復原

(1) 現 状

塔の森石塔は、奈良県奈良市田原町長谷に所在する。田原から南に3km下り、長谷集落を過ぎ天理市との境界のすぐ北から西へ山道に入り、日吉神社を過ぎてさらに400mほど尾根を登り、急な石段を頂上まで上がった所の平坦地にある。平坦地は50×25mほどの広さを有し、その西部に石塔が建ち、東半部には神社があるが、平坦地の広さから見て、かつては石塔に伴う仏堂などが建っていた可能性が十分にある。

辺鄙な立地

石塔は本来、二重基壇と十三重の塔身を有したが、現状では下成基壇上に初重の塔身と屋蓋6枚を重ねている。塔身部が割れていない個体を適当に選んだようで、現状の高さは約240cmである。他の残欠は脇に置いてあり、上成基壇および塔身部が大きく割れているか小片の屋蓋で、重ねることが困難なものである。現状の六重塔も基壇・塔身・屋蓋相互で心が合わず、向きも揃っていないのに加え、塔全体がやや傾いており、倒壊の心配がある。大正6年(1917)の時点では13枚を3群に分けて積むことができたようで(西崎 1917)、その後に崩壊が進行したのであろう。早急に保存処理を行う必要がある。

崩壊が心配

(2) 特徴と復原²⁾(Fig.53-1・2)

下成基壇は一辺58cm、長径116cm、復原高29cmで、側面に格狭間を削り出す。格狭間は比較的残りが良い。格狭間の頂部は合掌を組まずに離れる肘木式(石田 1941)である。肘木状部は分厚く下側には小振りの突出部を2ヶ所設ける。脚部は肘木状部に比して華奢で爪先は丸みを帯びる。基壇の側面どうしの境界には束がない。もとは地覆と葛があったと推定できるが欠失し斜面状となっているが、復原図では地覆と葛を補った。葛の厚さは判るが、地覆は地中に埋没しており不明である。正倉院蔵三彩塔を参考に葛と同じ厚さにした。上成基壇は一辺40cm、長径80cm、高さ20cmで、側面に格狭間を削り出すが残りは悪い。下成基壇の格狭間とよく似る。中央に素弁の6弁蓮華文を肉厚に浮き彫りする。側面どうしの境界にはやはり束がない。葛があったと推定できるが欠失する。格狭間と下面の位置関係からみて地覆はなかったと推定する。

初重塔身は一辺30cm、長径60cmの六角柱状をなし、各面は、両側縁と下方を額縁状かつ上搾まりに高くし、窪んだ部分の中央に素弁の8弁蓮華文を肉厚に浮き彫りする。

屋蓋は、径が塔身の径の2倍以上あるため軒の出が深く、軒裏を平らでなく斜めに作る点で、天平勝宝3年(751)の紀年銘がある奈良県明日香村竜福寺の方形多層塔と共通し古式である。頭塔石塔と異なり、n重目屋蓋とn+1重目塔身を一石から造り出す。塔身はやや上搾まりに作り、中央に方形の柄がある。屋蓋の上面には突線で隅棟を表現する。隅棟と屋蓋面は軒先に向かってわずかに反りをもつ。軒口はぶ厚く、垂直に近いがやや内傾した面をもち、上下縁は隅に向かってなだらかに反り上がる。この真反りは屋蓋を重ねると印象的な優美さで、中世以降の石造十三重塔の軒先の硬さと対照的である。第二~十二重の屋蓋の下面中央には、下の塔身を受ける六角形の作り出しがあり、その中央に柄穴を穿つ。第一重下面には作り出しがなく、軒下面よりへこんだ平坦面をなし、第1重塔身を直に受ける。第十三重下面には、六角形に土手状隆起をめぐらせ、その中に第十二重塔身をはめ込んでいる。すべての屋蓋の下面には隅木を突線で表現するが、頭塔石塔やA(1)で紹介した①~④の諸例と異なり垂木の表現はない。

屋蓋の特徴

第十三重を除く12枚の屋蓋は、頭塔石塔と異なり相似形ではない。屋蓋面の勾配は初重が27%で、上ほど緩くなり十一重は14%である（十二重は不明）。塔身の高さも二重が12cm、十二重が4cmで上ほど低くなる（十三重は不明）。勾配と塔身高が不明のものは、上下の個体の中間付近の値と推定した。屋蓋径の復原は、縁辺部の破損がひどい屋蓋（五・七・十・十二重）もあり十全とは言い難いが、屋蓋径の遞減率が一定で途中で変化はしていないと推定し、屋蓋径が不明のものは、その上下の屋蓋の軒先引通し線に接する大きさとした。

相輪の復原

相輪については、古代の類例が乏しく復原の拠りに窮する³⁾。平安時代に下れば、福島県磐梯町・慧日寺伝徳一廟五重塔（9世紀か、磐梯町教委 1983）、京都府長岡京市・西陣町遺跡出土相輪（11世紀中頃、木村 1985）がある。前者は壺形の覆鉢の上に平頭を表現する凸帯があり請花は無い。後者は鎌倉時代以降に定型化する形の先駆形態ともいえ、側面が直線的となり請花をもつ。塔の森石塔は(3)で述べるように奈良時代の作であるから、徳一廟五重塔よりさらに木造塔の相輪基部に近い形態にすべきと考え、覆鉢を半球形とし上開きの平頭を乗せ請花はなしとした。輪の椽管からの出も大きくし、水煙と匏形を乗せた。

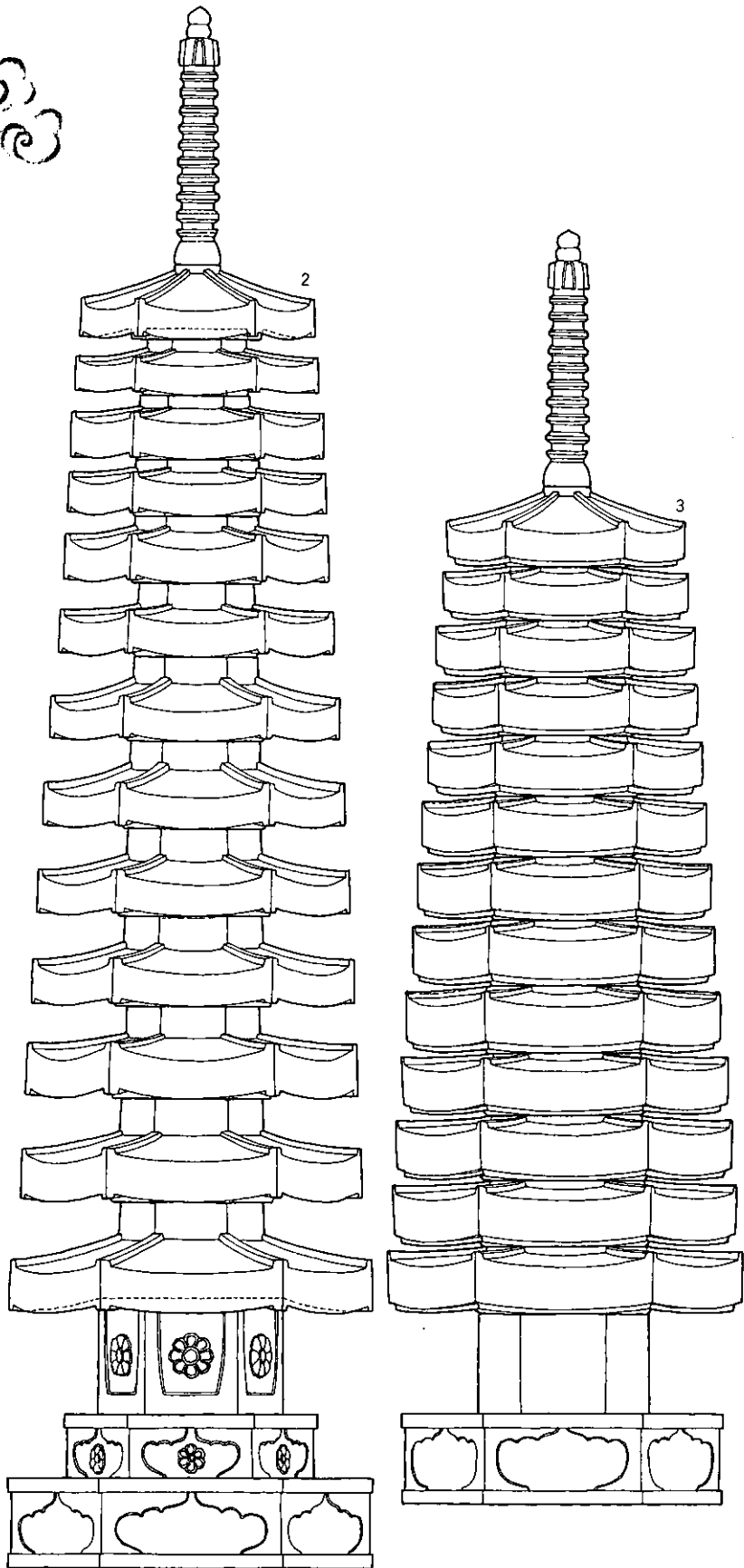
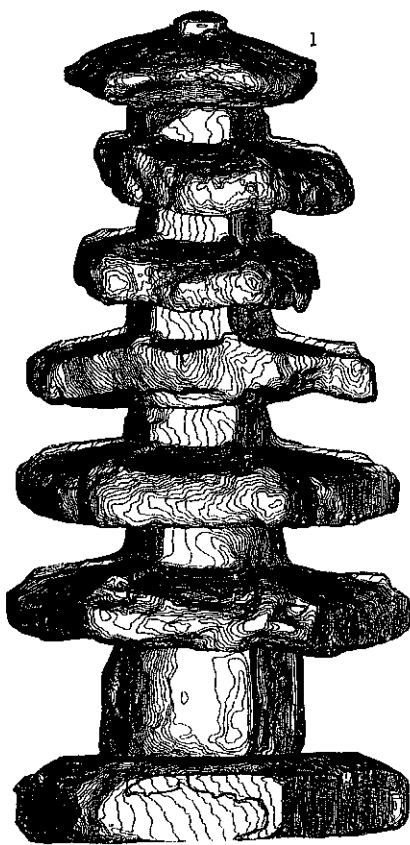
各部材の計測値から側面形を描き、欠損部分を推定して作成した復元図がFig.53-2である。屋蓋径・屋蓋勾配・塔身高の上方への遞減が相まって、安定感があり、すっきりした美しい姿と言えるだろう。

屋蓋の遞減率

先に屋蓋径の遞減率は一定で途中で変化はしないと推定したが、古代の石塔の屋蓋の遞減率について少し述べておく。遞減率のわかる8・9世紀の石塔の例は乏しい。大阪府太子町・鹿谷寺十三重塔は軒先の残りが悪いが、塔身では遞減率が一定と見える箇所とわずかに先搾まりに見える箇所とがある⁴⁾。この塔は岩山彫り抜きの特異なもので、一般化できるか問題がある。10世紀の奈良県明日香村・於美阿志神社十三重塔は、第十一重までしか残っていないが遞減率は一定である（奈良県文化財保存事務所 1970）。木造塔では、法起寺三重塔（慶雲3年（706））、法隆寺五重塔（8世紀初頭）、薬師寺三重塔（天平2年（730））、海龍王寺五重小塔（8世紀中頃）、当麻寺三重塔（東塔、8世紀後葉）、元興寺極楽坊五重小塔（8世紀後葉）、室生寺五重塔（9世紀前半か）、当麻寺三重塔（西塔、9世紀後半か）、醍醐寺五重塔（天曆5年（951））、海住山寺五重塔（建保2年（1214））、明王院五重塔（貞和4年（1348））、興福寺五重塔（応永33年（1426）頃）、瑠璃光寺五重塔（嘉吉2年（1442））、教王護国寺五重塔（寛永21年（1644））などを見る限り、遞減率を一定とするのが普通で（太田編 1984）、談山神社十三重塔（享祿5年（1532））でも初重・二重は大きい⁵⁾が三重以上は遞減率が一定である（奈良県教委 1966）。平安時代前半までは石塔も木造塔に倣って遞減率を一定とするのが主流だったのではなかろうか。ところがその後には新傾向が生じる。奈良県奈良市・般若寺の十三重石塔（建長5年（1253））では二重以上の笠石軒先の引通し線は弓なりに彎曲した曲線状に上重を小さくしている（岡田 1977）。以後の多重石塔、たとえば滋賀県米原町・松尾寺九重塔（文永7年（1270））、京都府宇治市・宇治川浮島十三重塔（弘安9年（1286））、奈良県都祁村・観音寺十三重塔（正平7年（1352））などでも同様の傾向がある。平安時代後半以降に定型化した石造十三重塔では、軒の出が浅くなり全体に寸胴・丈高となる。その印象をやわらげ姿を良くするために、下方の屋蓋径を大きくするのではなく、上方の屋蓋を小さくする方策、しかも途中から遞減率を増大させ先搾まりとすることによって、安定感があり高く聳える雰囲気醸成を図ったのではなかろうか。



- 1. 塔の森石塔現状写真測量図
- 2. 塔の森石塔復原図
- 3. 頭塔石塔復原図



0 50 100cm

Fig.53 塔の森石塔・頭塔石塔復原図 (1:22)

(3) 年代

奈良時代
後半

塔の森石塔の年代は奈良時代後半とするのが通説であり(川勝 1978)、肯定できると思う。格狭間の形状が有効な手がかりとなる。正倉院蔵の箱類の床脚、東大寺法華堂弁財天像台座(8世紀中葉)、唐招提寺金堂須弥壇(8世紀後葉)、同毘盧遮那佛像台座(8世紀後葉)、東大寺蔵金銅菩薩半跏像(8世紀後葉)、坂田寺仏堂須弥壇縁石(天平神護元年(765)~延暦15年(796)頃)など、奈良時代後半を中心とする諸例と類似している。Cで触れる平安時代初頭を下る格狭間の例と比較すれば、奈良時代後半まで上げて無理はないであろう。

C 頭塔石塔の復原

(1) 現状

大胆に復原

屋蓋の破片2点がこのころ。P L.78-1は全体の3分の1ほどを残す大型、2は半分弱を残す小型品である。塔の森例との最相違点は塔身部の立ち上がりを作り出さない点である。上下面中央の六角形作り出しに柄も柄穴も無い。屋蓋部分は類似するが勾配が緩い。下面に隅木を作り出さないが、垂木の表現がある。頭塔からは大小の石塔片多数が出土しており、基壇・塔身・相輪を含む可能性もあるが、一具の物を特定できなかった。これ2点だけから十三重石塔を復原するのはいささか大胆・暴挙だとは思いますが、試案を出したい。

(2) 復原の実際 (Fig.53-3)

まず問題は現存する2点がそれぞれ何重目に当たるかである。それによって復原する塔は、塔の森石塔より大きくも小さくもなる。P L.78-1の復原長径が113cmで塔の森初重の118cmと大差ないことから試みに初重とした。塔全体があまり大きくなると、頭塔本体とのバランスを失うのではないかと危惧したからだ感覚的ではある。屋蓋径の通減率を塔の森石塔と合わせ、二重以上の径を塔の森の各重と同じと仮定すると、P L.78-2は十一重目となる。

屋蓋の勾配

屋蓋の勾配は、塔の森石塔では下方ほど急な傾向があるが、頭塔石塔では初重と十一重とで勾配に差がないため、他の重も同じと考えざるを得ない。かりに上方ほど緩くしようと試みても、初重の勾配が8%では、かりに上方ほど緩くしたところで大差なく効果も出ない。

塔身の扱い

塔の森石塔は屋蓋と塔身を一石で造る。頭塔石塔には塔身の作り出しがないから、塔身を表現するには、別作りの板状の塔身を屋蓋の間に挟む必要がある。図上では可能だが、実際に径32・厚4cm~径48・厚12cm程度の板材12枚を上下面平坦に作ることに、計26枚の薄い部材を重ねて安定する加工精度を得るのも容易ではなからう。この理由から二重目以上に塔身がなかったと考えた。一見談山神社の木造十三重塔風となる⁵⁾。

初重塔身径は、初重屋蓋下面の作り出しの径に合わせて塔の森より小さくした。塔の森では初重塔身と上成基壇の各面に厚肉の蓮華文を刻出するが、やや特殊と考えるのでなしとした。

基壇は塔の森は二重基壇だが試みに一重とした。基壇径は塔の森の下成基壇に合わせると大きすぎるため、木造建築と同様に初重軒先より少し内側に入るように決めた。

格狭間

基壇側面には塔の森と同様に格狭間を入れた。頭塔石塔は平安時代初頭と推定でき、奈良時代後半の塔の森石塔とは時期差があるので、違いが出るように多少手を加えた。平安時代後期の格狭間は宇治平等院鳳凰堂・平泉中尊寺金色堂など例が多いが、平安時代前期の例は極めて少ない。当麻寺当麻曼荼羅厨子台座(奈良末~平安初)、興福寺南円堂前燈籠(平安初頭、国宝

館展示)、法華寺十一面観音像台座(承和7年(840)頃か)などを参考に、①肘木状部を細くし、②肘木状部下面の括れを浅くし、③脚部もやや薄くし爪先に角をつけた。

塔の森石塔と比して屋蓋勾配の通減が少ないため、単調さはまぬがれない。また屋蓋どうしが接近しすぎせこましい印象が強い。それを緩和しようとするれば、塔身を挟みこむしかないが、薄いと無理があり、厚くすれば層数を減らさないと高くなりすぎる。しかしそれでは「十三重大墓」の解釈が難しくなるので、Fig.53-3をあえて案として示しておく。

注

- 1 本項の執筆に際しては、平成元年度重要文化資料研究協議会(1989年11月、奈良国立博物館)における井口喜晴の研究発表「正倉院宝物三彩小塔と奈良時代の石製小塔」を参考にさせて頂いた。
- 2 復原に際して写真測量と手作業による実測・計測・拓本を2回行った。実測は上成基壇と地上にある屋蓋1点のみとし他は計測にとどめた。写真測量の参加者は伊東太作・西村康・内田和伸、手作業の参加者は、1995年8月30日が内田和伸・白杵勲・岩永省三、2000年9月6日が古尾谷知浩・石橋茂登・豊島直博・岩永省三である。
- 3 古代の相輪の表現の例としては、材質を問わなければ、法隆寺金堂多聞天像持物の原始宝篋印塔(木造彫刻、7世紀中頃)、兵庫県加西市古法華石龕仏三重塔(石造浮彫、7世紀後葉)、長谷寺銅板法華説相図の多宝塔(青銅製浮彫、8世紀初頭)、法隆寺百万塔の相輪(木造彫刻、8世紀後半)、東京都東村山市回田出土須恵質五重塔(瓦塔、奈良時代)、静岡県三ヶ日町宇志出土土師質五重塔(瓦塔、平安時代)などがある。しかしこれらは特殊であったり、表現が細かすぎたりして、凝灰岩で大きめに表現する石造相輪のモデルとはしにくい。
- 4 大阪府近つ飛鳥博物館にある模造品では、軒先引通し線はかなりの先搾まりに復原してある。
- 5 ただし談山神社の塔には、二重以上にも薄い塔身はある。西山和宏の教示によれば、椽皮葺き作業などの工事を行うためには隙間が必要で塔身を設けざるを得ない。しかし頭塔石塔の場合は屋蓋どうしを直接重ねてしまっても問題ない。

参考文献

- 網干善教 1975 「中尾山古墳の多形についての私見」『史跡中尾山古墳環境整備事業報告書』。
- 近江俊秀 1997 「加守廃寺の発掘調査」『仏教芸術』235。
- 岡田英男 1977 「十三重石塔」『大和古寺大観』3。
- 太田博太郎編 1984 『塔婆Ⅰ』日本建築史基礎資料集成11。
- 堅田 修 1991 「八角堂—その成立と性格—」、「六角堂の性格—大谷廟堂を手がかりとして—」『日本古代寺院史の研究』。
- 川勝政太郎 1978 『日本石造美術辞典』。
- 木村泰彦 1985 「長岡京跡右京第130次(7ANKNC地区)調査概要—右京五条三坊十四町・西陣町遺跡—」『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集。
- 菅谷文則 1973 「八角堂の建立を通じてみた古墳終末時の一様相」『論集終末期古墳』。
- 巽淳一郎 1994 「小塔部品」『平城宮跡発掘調査部発掘調査概報1993年度』。
- 田中重久 1943 「日本に遺る円堂の研究」『日本に遺る印度系文物の研究』。
- 次山 淳 2000 「金属製品・銭貨」『奈良国立文化財研究所年報 2000—Ⅲ』
- 永山倉造 1981 「六角瓦塔」『上人壇廃寺跡発掘調査概報』。
- 奈良県教育委員会 1966 『重要文化財談山神社塔婆修理工事報告書』。
- 奈良県文化財保存事務所 1970 『重要文化財於美阿志神社石塔婆修理工事報告書』。
- 檜崎彰一 1975 「三彩塔」『国華』982。
- 西崎辰之助 1917 「塔の森の石塔婆」『奈良県史蹟勝地調査会報告書』4。
- 磐梯町教育委員会 1983 『伝徳一廟保存修理工事報告書』。
- 藤澤一夫 1981 「難波宮八角建築の性格」『難波宮址の研究 第七 論考篇』。
- 松本修自 1933 「小さな建築—瓦塔の考察—」『文化財論叢』。

9 石材の調査

(1) はじめに

頭塔の調査で検出された石材・石造物には基壇・塔身を構成する石積・石敷の礫群と石仏、心柱礎石、頂上の五輪塔下から検出した台石、六角十三重石塔の屋根、多数の小石塔群がある。これらの石材について岩石種の同定などをおこなったので報告する。なお、岩石種の同定には肉眼観察と一部の試料については、薄片を製作して偏光顕微鏡観察を実施した。また、石材の採取地等を調べるため周辺地域のフィールド調査も同時におこなった。

(2) 調査結果

①：基壇・塔身を構成する石積・石敷の岩石礫群は、加工の痕跡が観察されず自然石をそのまま利用している。岩石種は花崗岩類・安山岩・凝灰岩・チャートなどさまざまである。花崗岩類は細粒から粗粒に至る黒雲母花崗岩や両雲母花崗岩、そしてペグマタイト質花崗岩・片麻状黒雲母花崗岩・縞状片麻岩などの「領家花崗岩類」で、石積・石敷の岩石礫群中では大半をしめている。安山岩は灰色を呈し、その新鮮な断面は黒色である。風化した表面には、長石が欠落して生じた微細な凹状（柱状）を成している。剝落小片を使って薄片を製作し、偏光顕微鏡下で観察した結果、両輝石安山岩と同定できた。石基はガラス質、斑晶は自形の斜長石・輝石（普通輝石とシソ輝石）が顕著で、一部に角閃石も少量ではあるが観察された。

凝灰岩は白色から淡黄土色を帯びており、高温型石英が顕著で2mm大前後におよび「榛原石」と良く似た岩相を示す流紋岩質溶結凝灰岩である。チャートは量的には少なく青灰色と白色が入り混じった礫である。これらの岩石は、堆積岩の粒度段階区分（Udden, 1914; Wentworth, 1922）によると、石積岩石礫の大半は巨礫（boulder）に分類され、1m大におよぶ礫も少量は存在する。石敷岩石礫の大半は粗礫（cobble）の上限付近に分布する。また、Pettijohn's roundness gradesにしたがって円摩度について分類したところ、石積・石敷の岩石礫群は亜円礫～円礫（subrounded-rounded）に分布し、大半の礫は亜円礫となる（Fig.54）。

これらの岩石のうち、花崗岩類は奈良市東部に分布している基盤岩類と同種のもので、能登川・岩淵川などに見られる巨礫を利用したものと推定される。また、両輝石安山岩は、奈良市東部の三笠山（若草山）から御蓋山にかけて分布し、俗称「カナンボウ」（三笠安山岩）と呼ばれているものである。頭塔付近では春日野礫層や河川礫に見られ、これらの礫を採取したものと考えられる。いずれの岩石礫も能登川などの河川礫から採取して、大きな礫は石積に、比較的小さな礫は石敷に利用したものと推定される。凝灰岩に関しては、室生層群地獄谷累層に「榛原石」と良く似た岩石が産出しており、これらの礫を利用したものである。

②：石仏・仏龕は、前述の細粒ないし中粒の所謂「領家花崗岩類」が使われていた。岩質としては、細粒から中粒の黒雲母花崗岩・両雲母花崗岩、アプライ

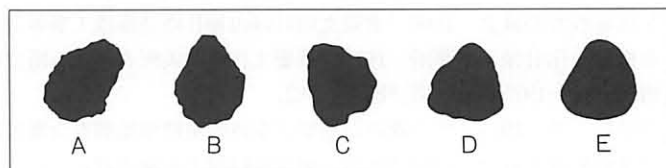


Fig.54 円摩度の分級図 A: angular, B: Subangular, C: Subrounded, D: rounded, E: well rounded

ト質花崗岩、ペグマタイト質花崗岩、片麻状花崗岩、縞状片麻岩などで、粗粒の黒雲母花崗岩や2～3mm大におよぶ柘榴石を含む中粒黒雲母花崗岩も見られた。全体的には均一な粒度をもつ花崗岩類が使用されているが、なかにはペグマタイト質花崗岩や片麻岩類など石彫としては材質的には良くない岩石も使用されていた。なお、心柱礎石については詳しい観察が行えなかったので担当者に詳細を聞いた結果、花崗岩類であると推定できた。

③：頂上の五輪塔下から出土した台石、六角十三重石塔の屋根、多数の小形な石塔群については、不明な小片を除くとすべて火砕岩類であった。台石は風化して角がとれて丸みを帯びているが、比較的堅牢で全体として黄土から灰色を呈しており、一見「榛原石」に似ている。観察の結果、2～3mm大におよぶ透明感の良好な高温型石英が顕著で、黒雲母・長石が散在している。偏光顕微鏡観察の結果、石基はガラス質、斑晶は石英・長石・黒雲母で石英が優勢、溶結構造が認められ、この岩石は流紋岩質溶結凝灰岩に同定できた。この付近では奈良市東部に分布する室生層群地獄谷累層に見られる凝灰岩類である。特に地獄谷石窟仏 (Fig.55) 付近や春日山石窟仏の階段下 (Fig.56) に良好な露頭が見られる。また、六角十三重石塔の屋根も台石と基本的に同種の岩石であるが、含有鉱物の粒径はやや小さい。多数の小形な石塔群の岩石については、二つのタイプがある。一つは前述の「榛原石」タイプで堅牢な凝灰岩、他は全体に含有する石英・長石などは細粒で、黒雲母が顕著である凝灰岩。後者のタイプは風化が進んでいることもあるが、固結度はやや低い。偏光顕微鏡観察では、弱い溶結構造が示されていることから流紋岩質溶結凝灰岩に同定できる。この凝灰岩も室生層群地獄谷累層に属し、春日石窟仏 (Fig.57) を構築する凝灰岩と同じ特徴を示す。

流紋岩質
溶結凝灰岩

いっぽう、今回の発掘調査で出土した凝灰岩のなかには用途が不明な板状の石材がある。これらはすべて二上層群ドンズルボウ層に見られる流紋岩質凝灰角礫岩で、黒色の溶結凝灰岩礫や灰色の流紋岩礫、パミスを含有しており、中部～上部層の凝灰岩に推定できるもので、古墳時代には石棺材として、奈良時代には宮殿・寺院の基壇化粧石として多量に利用されている。

流紋岩質
凝灰角礫岩

(3) まとめ

今回の発掘調査で出土した岩石について調査した結果、いずれも頭塔の近辺に産出する石材が使用されていた。これらの岩石は平城宮跡などでも出土しているが、今後詳細な調査が進めば、多量に利用されはじめる時期などが推定できる可能性はある。いっぽう、用途不明な石材はすべて奈良市東部に分布する岩石ではなく、やや離れた二上層群ドンズルボウ層産の石材であることから、近辺の遺跡で使われていた凝灰岩が再利用された可能性も考えられる。

近辺に産出
する石材

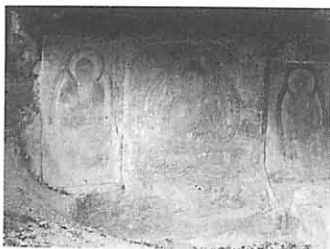


Fig.55 地獄谷石窟仏



Fig.56 溶結凝灰岩露頭



Fig.57 春日山石窟仏

10 頭塔下古墳を取巻く古墳の様相

A 大和盆地北部の大型古墳

佐紀盾列古墳群

現在の奈良市街域にほぼ相当する大和盆地北部は、北になだらかな平城山丘陵を控え、その南に佐保川をはじめとする北東西の三方から注ぎ込む大和川の支流が貫流する平坦地が広がる。当地の古墳としては、その平坦地へ張り出した低丘陵上に東西に分布する佐紀盾列古墳群が、際立った存在として広く知られている。五社神古墳、佐紀陵山古墳など4世紀後半の造営に始まって5世紀中ごろにかけてほぼ一世紀のあいだ200mを超える巨大前方後円墳が造営され続け、周辺に中小規模の古墳から埴輪棺墓に至るまで各階層の墓が数多く造られた畿内有数の古墳群である。5世紀になると、より巨大な古墳が河内・和泉に造られるようになるが、そうなるまえの前半期は少なくとも大王を中心とした畿内ヤマト政権の中核的造墓地であったと考えられている。

それに関連した生活遺跡についても、これまでその一端が平城宮下層遺構などに垣間見られてきたにすぎなかったが、近年の山稜町遺跡の調査例などからよりダイナミックな当地の歴史が明らかになりつつあり、各地からの搬入土器・外来系土器の多さは、南の纏向遺跡と並んで政治性の高さを見せつけている。

ところが、当古墳群は5世紀中ごろのウワナベ古墳、ヒシャゲ古墳の築造を最後にほとんどすべての造営を停止してしまう。平城宮跡の整地土に含まれる須恵器や埴輪から、5世紀末から6世紀はじめにかけての中小規模の古墳が宮の東半を中心にいくらかは存在していたことが推察できるが、それでも前代からの凋落ぶりは否定できない。大型古墳の群形成は東乗鞍古墳やウワナリ塚古墳などがある奈良盆地東部の天理市北部に引き継がれることとなるのである。

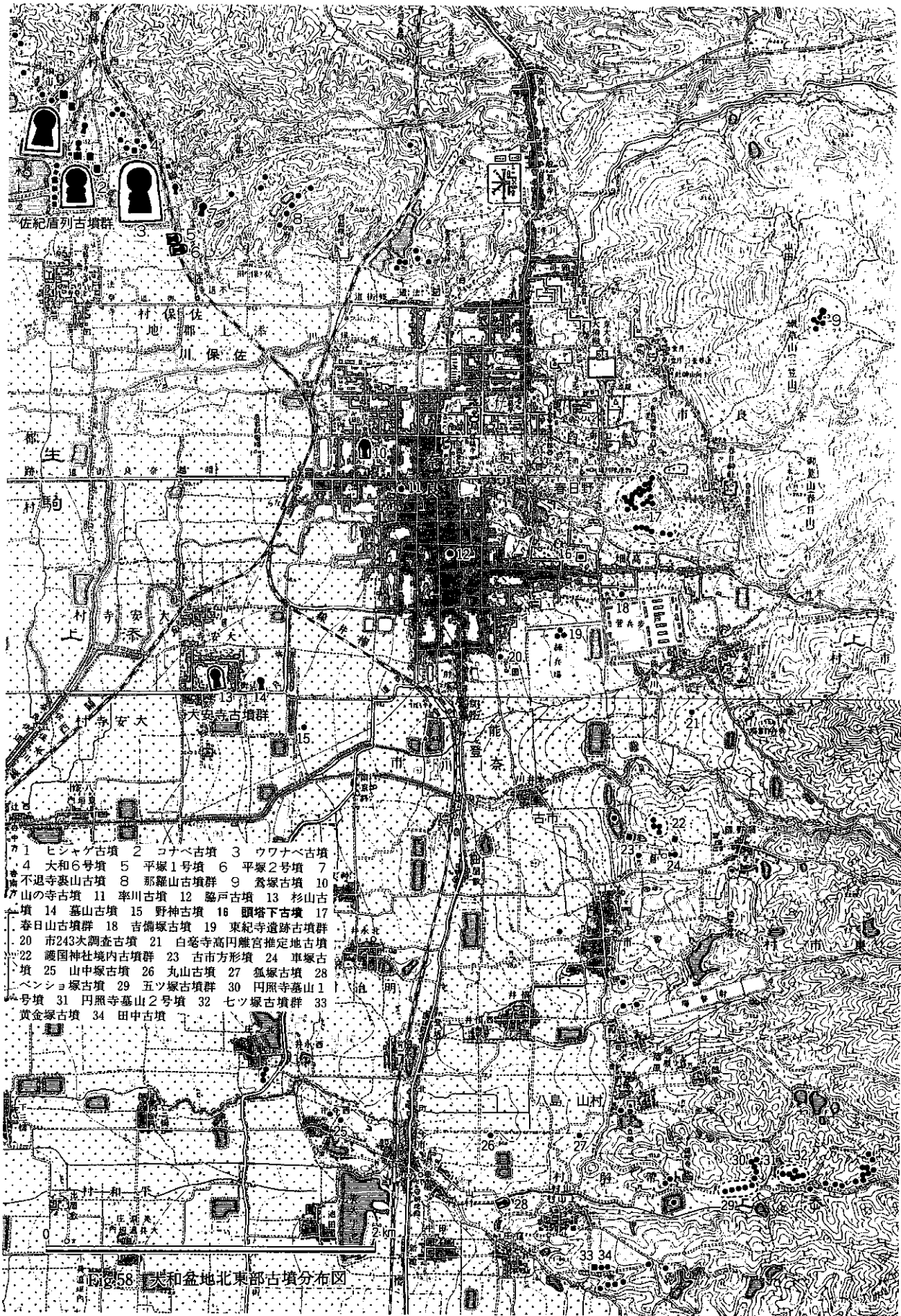
独立した造墓活動

こうした巨大古墳や大型古墳の造墓地の移動には大王家を含む諸豪族の盛衰が表われていると見て誤りなからうが、細かく見ていくとそうした大型古墳の存在によって目立たなくなっているのはいるが、単独で形成される大型古墳や中小規模墳が独立した動きをみせていることが読み取れる。それらの前史は4世紀に溯る若草山に築かれた鶯塚古墳にも溯って考えることが許されよう。そして、頭塔下古墳もそうした佐紀盾列古墳群以外の造墓活動の中で評価されるべきものである (Fig.58)。

B 盆地北東部の古墳の動態

大安寺古墳群

盆地北部でも頭塔に近い現奈良市街地周辺に限ると、大安寺域にある杉山古墳が全長154mの大型前方後円墳として5世紀中ごろに比定される在地の最有力者の墓として注目される (奈良市教育委員会 1997)。それに続いて男子人物埴輪頭部を出土した約80mの墓山古墳、前方後円墳の可能性も残されているが、古式の家形石棺 (舟形石棺) を竪穴式石室に納めた野神古墳などが造営されたこの地域が、南山城エリアでいえば車塚古墳を中心とする久津川古墳群、摂津豊島地域でいえば御獅子塚古墳を中心とする桜塚古墳群に対応させうる5世紀の中核域であったことがわかる。



山村・八島
地 区

この時の配下の勢力では、古くに発掘された円照寺墓山古墳や比較的最近調査されたベンシヨ塚古墳(森下浩行 1991)などが築かれた東山麓の山村・八島地区がもっとも注目され、とくに武器武具を多く副葬する古墳が目立っている。

これら5世紀の一大在地勢力のその後についてはこれまでまったく不明であった。しかし、近年の奈良市教育委員会による調査の進展によって、開化天皇陵に比定されている山の寺古墳(伊達 2000)に近いところに、率川古墳や脇戸古墳(三好美穂 1994)といった比較的大きな古墳が6世紀前半にかけて営まれていたことがわかってきた。これらには埴輪が供給されており、大安寺古墳群の後裔ないし、かわって当地の支配権を勝ち得た新たな勢力の奥津城と見られよう。ここでは、その立地がより頭塔下古墳の造られた地点に近づいていることに注意しておきたい。

能登川
扇 状 地

一方、頭塔近辺でも市街地部分の調査によって、たとえば東紀寺遺跡で見つかった一辺約10m余りの方墳のようなものが能登川の扇状地に古墳時代後期より前に存在していたことがわかってきた(奈良国立文化財研究所編 1994)。さらに、敷石を施した区画施設をもった南紀寺遺跡は畿内でも傑出した豪族居館と見られ、方墳の被葬者との関連を考えるには無理がある。それよりも、大安寺域の古墳群を造営した勢力や、今述べた率川古墳や脇戸古墳の造営勢力との直接的関係を想定することが妥当かもしれない。

このように、頭塔下古墳が築かれる前段階に、奈良盆地北東部にもそれなりの勢力が実体をもって存在していたのである。そして、この状況の延長上に当地域に横穴式石室が導入されたのが6世紀でも中ごろと見られ、やはり、細かいグループに分かれて造墓活動が見られた。しかし、先に見た5世紀の動向からすれば、佐保川と能登川によって挟まれた範囲が相対的に中心的位置を占めていたことは明らかであり、頭塔下古墳まさにその範囲に含まれる。

ところで当地の6世紀以後の様相としては、春日山古墳群でさかんな群集墳形成がある程度判明している。当古墳群は調査されたのが戦後まもなくのことで、けして十全なものとはいえないが、盆地北部の群集墳の情報はきわめて少ないうえ、調査されてある程度の内容のわかるものはごく限られる状況にあるので、頭塔下古墳を考える上でもやや詳しくその様相に目を配っておくことが必要であろう(末永・尾崎 1949)。

C 春日山古墳群の再検討

3 群構成

今日、春日山古墳群と総称される春日野一帯に広がる古墳群は、方300mの範囲に大きく3群に分かれて分布する古墳群である。それぞれの支群のあいだには菩提川の2本の支流によって開折された谷状地形があり、北から南に向かって御料園支群、鹿園支群、飼料園支群にわけて理解できる。このうち、古墳群の内容のわかるのは北の御料園支群の1基と南の飼料園支群の数基であって、その他は未掘ないし、破壊がひどいかでデータが不十分なものである。さらに、現地の様子がわかりにくいことと、実体のわかる古墳が少ないことなどから、鹿園支群と飼料園支群とのあいだで認識の混乱が生じている。たとえば、1983年刊行の奈良県遺跡地図第1分冊には飼料園支群の存在が欠落している(奈良県 1983)。このような状況に鑑み、2000年8月18日に踏査し、地形の現況と古墳群の分布の対応を試みた。そうして作成したのが、Fig. 59である。地形測量をしないのではなく、地形図と目測によるものであるため、多少の

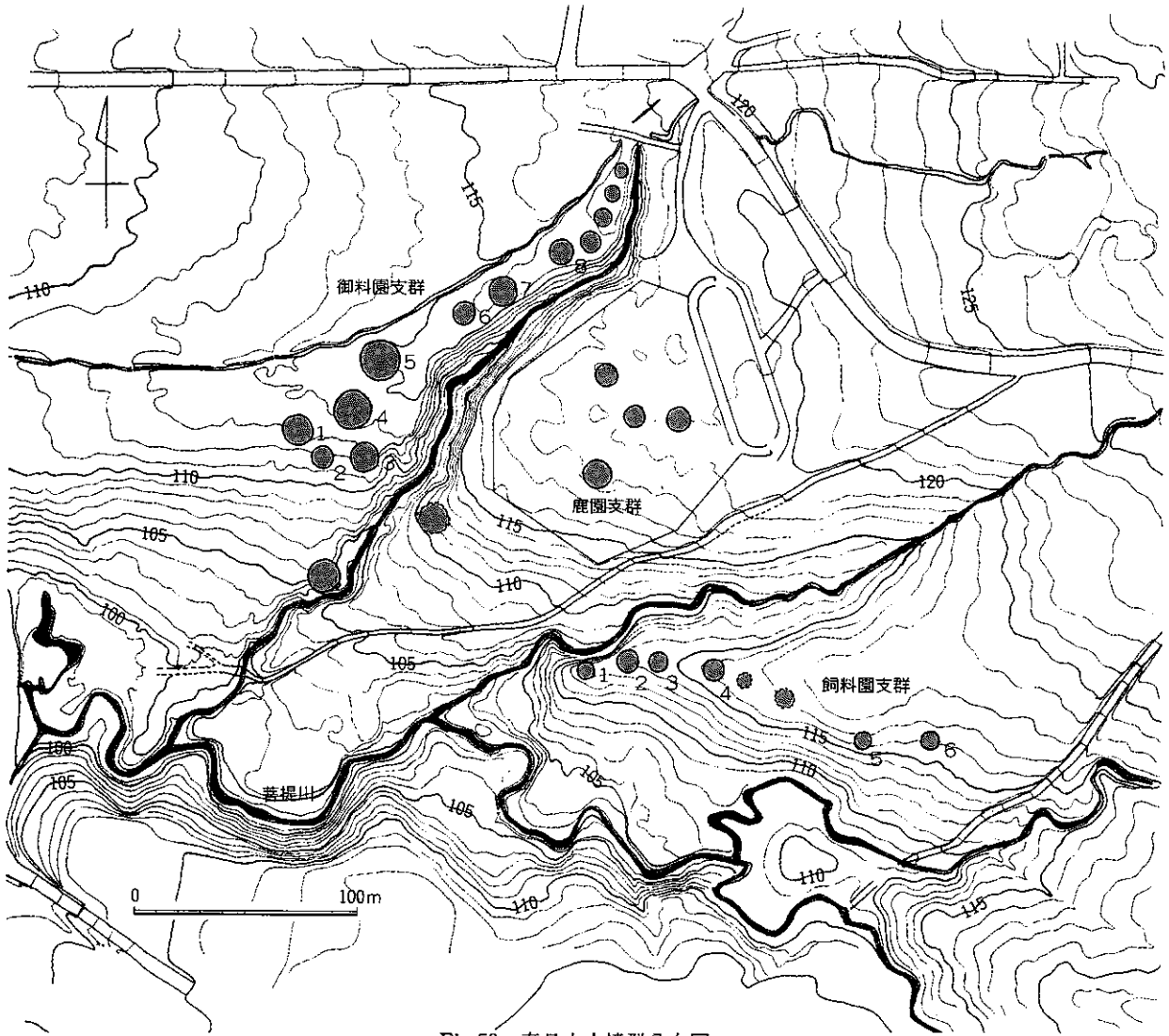


Fig.59 春日山古墳群分布図

くるとは含んでいるが、現時点では当古墳群の現状をもっとも正しく表したものである。なお、その踏査時の感じでは小さな土の隆起箇所はさらに多く認められ、古墳の総数はさらに増える模様でもあり、詳細な分布調査が必要であることが痛感された。

そうした制約があるが、北から順に見ていくと、御料園支群は南西に流れる川に開折された標高115m前後の段丘南縁に列状に並ぶ古墳群といえ、墳丘も10m前後に達するものから数mのものまであり、本来後者が前者の回りに点在するかたちをとっていたように見える。そのうち1号墳のみ報告がなされているが、それによると主軸が南北の竪穴式小石室で長さ約3.1m、幅約1.0mを測る。出土した土器は再利用時のものと思われ、古墳の年代が決めがたいが、飼料園の同様な規模の石室と似たような時期のものかと思われる。しかし、石室の掘形が検出されなかったこと、幅が狭いことなどからより新しい時期のものである可能性がある。

御料園支群

鹿園支群は御料園の古墳群と異なり、段丘平坦面に面的に広がるものであり、性格上明らかに異なるもので、立地的にはより優位に見える。これらに対しては何ら学術的な調査はなされていない。

鹿園支群

もっとも南に位置する飼料園支群は、鹿園とのあいだに西流する小川と、飼料園の南辺を西流する菩提川によって挟まれた舌状地形の、稜線に沿って列状に営まれた4基の古墳と台地南

飼料園支群

斜面の2基の古墳からなる。これらは西から1号墳、2号墳と名づけられており、もっとも東の6号墳のすぐ東に春日大社の築地が南北に走っている。

石室の構造

これらはいずれも礎床をもった小型の石材を組み合わせた竪穴式石室とされるが、遺存状況の比較的良い2号墳と3号墳は、いずれも東西主軸の石室西小口に他辺とは異なる石積みが見られ、他辺は裏込めの石材をもたず、すぐに掘形がくるなどの点で、たとえば横口構造をとるような簡略な横穴式石室として認識してよいものも含まれているのではと思われる。

新古の
2時期

遺物の残りは比較的よく、出土土器から全体としてみた場合、1～3号墳の尾根筋上で東西主軸に造られた西側の石室群と、5号墳しか詳細がわからないがそれを含めて南斜面に造られた南北主軸の石室群とに分けられそうである。そして、前群からは6世紀中ごろに、そして後群からは6世紀末ないし7世紀初めに位置づけ可能な土器群が鉄器をともなって出土している。この時期差にしたがって石室は細長くなる傾向が読み取れる。

土器以外の遺物には大刀と鉄鏃がある程度であるが、前群がほぼ頭塔下古墳と平行する時期のものということになる。

このように見てくると、春日山古墳群全体では、飼料園の東西主軸石室の古墳群がもっとも早い時期のもので、未発掘の鹿園支群もその時期まで溯るものと思われる。これに対して、飼料園の南斜面の縁に並ぶ古墳群とやはり台地南辺に並ぶ御料園の諸古墳がより新しいものと考えてよいだろう。

D 頭塔下古墳の位置づけ

以上の様相を踏まえて、頭塔下古墳を位置づけてみよう。まず、古墳の立地は能登川の扇状地に張り出した中位段丘の南辺に位置しており、春日山古墳群の御料園と飼料園支群の一部に一致する。しかし、時期的には飼料園の東西主軸の一群に対応する。また、石室は一回り規模の大きい片袖式石室であり、石材も大きく、また玄室幅を長さの2分の1に設計した規格的なものである。出土遺物も面繫一式分の馬具をはじめ、充実した内容になっている点で、明らかに春日山古墳群の各古墳より優位にあるといえよう。頭塔下古墳、飼料園1～5号墳、御料園1号墳、護国神社境内4号墳の石室規模を比較しよう (Fig.60)。

春日山古墳
群より優位

石室規模一覧

- | | | |
|----|----------|------------------|
| 1. | 頭塔下古墳 | 3.05×1.5m |
| 2. | 飼料園1号 | 2.6~2.7×1.1~1.2m |
| 3. | 2号 | 2.5~2.8×1.1~1.4m |
| 4. | 3号 | 2.5~2.7×1.0~1.2m |
| 5. | 4号 | 2.2×1.1m |
| 6. | 5号 | 2.5~2.6×0.8~1.1m |
| 7. | 御料園1号 | 3.1×1.0m |
| 8. | 護国神社境内4号 | 2.5×1.55m |

このように、頭塔下古墳は春日山古墳の一般的な古墳群とは一線を画した上位階層の墳墓で

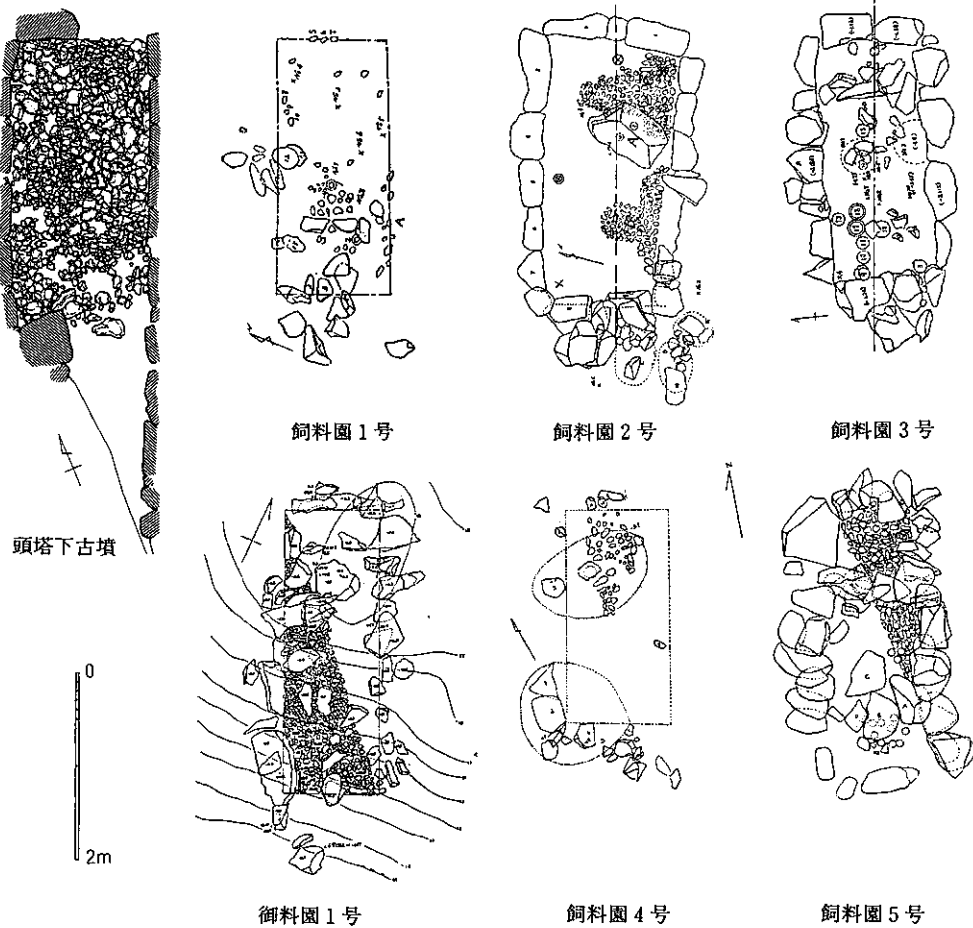


Fig.60 石室規模比較図 (1:80 飼料園・御料園は末永・尾崎(1949)を一部改変。)

あり、春日山古墳群を含む一帯を勢力基盤におく有力家長の墳墓といえよう。

しかしながら、頭塔より1500m南、能登川をはさんで別の段丘上にある護国神社古墳群（鹿野園古墳群）の中に、ある程度内容が判明する古墳があり、頭塔下古墳と同じ右片袖式で群中最大、頭塔下古墳とほぼ同規模を誇る第4号墳から、より豪華な金銅装馬具が出土している。ここでは計4基の横穴式石室をもつ古墳が知られており、明らかに頭塔下古墳とは別の系譜と見られる。

護国神社古墳群

この一帯は、4世紀後半の古市方形墳以下、中規模の古墳が時代を超えて見られる地域でもあり、頭塔下古墳のある能登川の扇状地に基盤を置く勢力とは異なるグループと見られる。ちなみに、5世紀に武器武具を多く出土した山村・八島地域では、五つ塚古墳と呼ばれる横穴式石室墳がやはり台地南辺に列状に築かれたが、それとも異なる集団の勢力圏と見られる。

山村・八島地域

このように見てくると頭塔下古墳は、奈良盆地北東部に割拠した古市地区や八島・山村の勢力とともに、かつては5世紀に大安寺古墳群を擁立し、6世紀にはその命脈を保ちながら能登川扇状地の比較的狭い地域を拠点に活動した勢力の築いた古墳と位置づけることが可能である。その内容の比較からすれば、春日山古墳群の被葬者たちを傘下に置いたこともあったと見られる。しかし、7世紀以後の動向ははっきりせず、近接して古墳が頭塔近辺に造られ続けたことよりも、可能性としては頭塔下古墳の末裔が春日山古墳群中に葬られることになったことも十分考えられよう。

現在、頭塔下古墳周辺の造墓活動を示す調査例はいっさい上がっていない。しかし、頭塔の基壇内各所から当該期の土器が多数破片のかたちで出土しており、その中には台付壺など副葬品特有の器種もあることから、もともと頭塔下古墳の周囲にあった古墳を破壊しながら盛土を調達したために紛れ込んだか、あるいは、頭塔下古墳以外にも頭塔基壇に埋もれた古墳があり、それにとまなう土器が出土したとみることが許されよう。

そうした場合、先に検討したように、それらの土器にはわずかに先行する可能性があるものがある一方で、下限は6世紀後半を下るものはなかった。つまり、頭塔下古墳の周囲にははっきり7世紀に入る古墳が群のかたちで存在した可能性が少ないといえるのである。6世紀代の群集墳が整理統合されて7世紀の地域の限定された終末期群集墳になることがここでもあったのであろう。

推測を重ねるならば、頭塔下古墳の周囲にもいくつか同規模の古墳が存在していたが、けして数は多くなく、また長期にわたるものではなかったとみられる。それはまた、頭塔下古墳の被葬者が同じ時期の春日山古墳群の被葬者よりもより限定された上位身分のものであったと考えられるとした先の子想に符合する。

中堅首長の古墳

このように、頭塔下古墳は南の護国神社境内4号墳とならび、6世紀の盆地北部の在地勢力を代表する中堅首長の古墳として位置づけられよう。かつ、前代からの系譜を考えれば、6世紀においてはもっとも由緒のある伝統制力として君臨していた一族の墳墓であったということが許されよう。それにあえて氏族を比定するならば、古墳の造営時期にほぼ該当する敏達朝頃に春日氏から大宅・粟田・小野・柿本などの諸氏が分枝したという岸俊男の指摘(岸1960)が参考になる。つまり、横穴式石室をもった群集墳の分布を氏族に対応させてみるのが可能であり、古市地区の護国神社古墳群を大宅氏の、そして頭塔下古墳をやや離れている感があるが拠点が白豪寺付近にあったとされる春日氏一族の墳墓として考えることができよう。なお、白豪寺周辺の発掘調査でも同規模の横穴式石室が単独で1基だけみつまっている(寺沢・松田1983)。

春日氏一族

この考えは、春日氏か大宅氏かの二分にあえて対応させたものであるが、その検証はさらなる資料をもってして行わざるをえない。

参考文献

- 岸 俊男 1960「ワニ氏に関する基礎的考察」『律令国家の基礎構造』(『日本古代政治史研究』所収)。
 末永雅雄・尾崎彦仁男 1949「春日山古墓の調査」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』第3輯。
 末永雅雄ほか 1978『奈良市史』考古編。
 伊達宗泰 2000「開化陵は前方後円墳なのだろうか」『古代学研究』150。
 寺沢薫・松田真一 1983「奈良市百豪寺町高円離宮推定地調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1981年度。
 奈良県教育委員会 1983『奈良県遺跡地図』第1分冊改訂。
 奈良国立文化財研究所編 1994『東紀寺遺跡』。
 奈良市教育委員会 1997『史跡大安寺旧境内』I。
 三好美穂 1994「元興寺旧境内の調査 僧房推定地 西北行小子房の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成5年度。
 森下恵介・今尾文昭 1986「平城京内のその他の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』昭和61年度。
 森下浩行 1991「ベンシヨ塚古墳」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成2年度。